

ジオン共和国の正体～
地球の重力に魂を引か
れた精神病患者たちの隔
離施設～

ミノフスキーのしっぽ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一年戦争以前の考察としての物語。

宇宙移民が開始されて半世紀が経過し、人類の大半は宇宙空間に浮かぶコロニーを生圏としていた。

いまやスペースノイド80億、アースノイド20億。

地球環境維持の大義のため、アースノイドが増えた人口を地球に残すことが不可能な一方、スペースノイド80億の人口規制は存在せず、これからも人口を拡大させていく。

もはや、地球連邦政府の実権が、平和裏にアースノイドたちからスペースノイドに移行していくのは、時間の問題に思われた。

しかし、そんな状況下、この平和な権力の移行が、分離主義者などの反地球連邦主義者たちによって邪魔されるのではないかと心配する連邦議員がいた。

後に、ジオン共和国をサイド3に建国する連邦議員ジオン・ズム・ダイクンである。彼は一計を案じ、自分自身が地球連邦からの独立主義の旗頭となることにする。

そうする事で、危険な分離主義者たちをその内側から統制し、行動を監督し、人類に無害な存在とすることが可能と考えたからだ。

また、地球連邦という人類統合国家を生み出し、多様性を失いつつあった人類に、新たな国家ジオン共和国を与えることで、彼等の新たな可能性を引き出そうとしたのである。

もちろん、地球連邦で負け組になつてしまつた人々に、「サイド3で1チャン賭けてみないか？」との為政者としての優しさもあった。

そんな野心的で大きな目標の下、多くの人々がダイクンの許に集まり、宇宙世紀の歴史は大きく動き出した。

この物語は、そんな時代に生きて、散つていった、ダイクンと名もなき一般市民たちの記録である。

作中舞台の政治状況説明

スペースノイドの貧困問題

一年戦争以前を舞台にしているので、作中の段階では存在しません。地球連邦は、地球特有の貧困の問題のない宇宙に、人類を移民として送り出すことで問題解決を果たしています。

新たな人類の居住スペースとなった宇宙空間には、空気も水もないのと同様に貧困もありませんでした。

そこに、差別、貧困のないコロニーを建設することで、地球連邦政府は旧世紀の悪習を排除しています。

スペースノイドの人口問題

宇宙世紀初頭から一年戦争まで、スペースノイドが住む各サイドには存在しません。人口増加の問題があったのは、人類の生存圏が地球しかなかった時代のことです。

広大な地球圏に100億は少ないのです。

以上の理由から、サイド3は呑気に独立運動をしています。

目次

宇宙世紀の病理の始まり。	1
ダイクンのニュータイプ論の人心掌握手 法。	8
お茶の合間に作品の趣旨説明	15
宇宙に散る守護者たち。	23
宇宙に散る守護者たち2。	31
お茶の合間に作品の趣旨説明2	39
お茶の合間に作品の趣旨説明おまけ。	47
宇宙に散る守護者たち3	53
宇宙に散る守護者たち4	62
戦士の回想	71

宇宙世紀のテロリストとその正体は、自 発的文盲、自発的認知バイアスとなった 人々。	78
サイド6の戦闘：守るべき対象の死。	84
命散つて。それでも残すべきもの。	94
神秘主義過激派集団ガロウ・ラン	104
各サイドのコロニーに潜む者たち	108
滅びの意思と共にある者たち	116
総力戦1 サイド4での待ち伏せ。	

生贄を求める兵器

蒼き闘争

それぞれの思惑

時の巻き戻しと加速

降魔スレイヤー空想バード、飛ぶ！

やさしい世界1

やさしい世界2

最後の会話1

最後の会話2

エピソード1

エピソード2

宇宙世紀の病理の始まり。

これから語る内容は、2010年以降、ゲームなどでガンダムというコンテンツに触れた人たちが用の内容である。

私は、彼等により深く機動戦士ガンダムの始まりを理解してもらうために、この作品をここに記す。

できれば、宇宙世紀の歴史年表初期を参考にして読んでほしい。
そうすれば、色々と楽しめると保証しよう。

さて、では始めよう。

ガンダム作中の一年戦争以前、どのようにしてジオン共和国（後のジオン公国）が成立したかを語る。

それには、まず宇宙世紀の人類の病理、スペースノイドたちの精神病を理解してもらわなければならない。

俗に、地球の重力に魂を引かれた者たち。

そう言われた精神病患者たちのことである。

この概念は、Zガンダムが発表されてから出された概念であるが、ティターンズだけではなく、地球圏から離れず、一方的な正義感から、世に禍を齎す連中全般を差している。

もちろん、地球圏外に飛び出す能力を持ちながら、そうにはせずに、しつこく地球圏を掌握しようと戦い続けた、ジオン側の自称独立主義者（苦笑）たちも、その中に含まれる。

少し話が脱線したようだ。話を戻す。

それは、本来、地球から飛び立ち、外宇宙を目指さなければならなかったスペースノイドたちの一部、その負け組がまず最初に陥った病である。

一種の地球回帰主義だ。彼等はスペースノイドでありながら、宇宙の生活に適應できなかつたのだ。

それ故に、もう宇宙に居たくない、地球に帰りたい、そこで人間らしく、宇宙に出る以前の人間たちのように、慎ましく暮らしたい。

そんな精神病に陥り、まともな定職にも就けず孤立していった。

その実像は、この時代の恵まれた一般層の想像を越え、悲惨を極めた。

その結果、スペースノイドの精神病患者たちは、後にジオン・ズム・ダイクンに導かれ、中央からもっとも離れた月の向こう側にある僻地、サイド3の精神病棟、ジオン共和国に隔離、收容されたのである。

そのジオン共和国誕生までのプロセスを紐解こう。

事の始まりは、宇宙世紀以前、地球の統一戦争によつて生じた勝ち組と負け組が生まれたこと。

そして、彼等の子供たちの育ち方である。

当時の政府は戦後に置いて、当然のこととして両陣営の憎しみを過去とし、共に連邦の一員として明るい未来を築いて行こう。目指そうと訴えた。

先の戦争の勝者たちと、その子供たちは、当然のことであると、素直にそれに従った。

しかし、負け組側の親、彼等の背中を見て育った子供たちは、簡単にそうすることはできなかった。

常に自分たちは、「勝ち組の子供たちの当て馬にされているのでは？」との意識を、心の奥底に持っていたのである。

勝った側が決めたルール、平等という欺瞞など信じられるかと。

自分たちは、所詮は敗者側なのだ。

勝者の犠牲にされる存在だと。

そのため、その病理は後年、最悪の形で表に現れた。

青年期を迎えた負け組の子供たちの就職面で、である。

それは、社会への準備期間での学生生活においては表面化しなかったが、本番である就職時には違った。

この肝心な場面で、劣った精神面が露呈し、表面化してしまったのである。

後ろ向きな考えに陥ることなく、伸び伸びとした精神状態で試験に臨んだ勝ち組の子供たち。

彼等は、伸び伸びとした環境で育ち、高いスキルを習得し、就職テストでも早々に良い結果を出した。

その一方、負け組の子たちは、やはり彼らの後塵を拝す結果となっていた。

常に勝ち組の子たちに対し後ろ向きな精神状態であったために、彼等、負け組の子たちは、就職テストなどの肝心要な場面において、つまらないミスを連発して次々に不合格となっていた。

そして、望む職種にも就けず、低賃金で働かされる立場に追いやられ、各サイドのコロニー間を、良い職種を求めて彷徨うこととなった。

そして、そこでも思い通りにならず、ますます宇宙世紀の社会から孤立していったのだ。

また、連邦政府による宇宙への強制移民も、その事態に拍車をかけた。

地球へと戻ることが叶わぬことで、彼等の絶望と怒りは、より深いものになっていったのだ。

彼等、先の大戦の敗者の子供たちにとっては、事態は深刻であった。

それにも係わらず、当時の連邦政府は動かなかった。

この問題が表面化した当時、連邦政府は「世代的な問題」と判断し、「世代が変われば改善される」と彼等と向き合わなかった。

そんなことよりも、もっと大切なことが大量にある。

まずは、優先する他の問題の処理だ。

優先順位が低い負け組の戯言になど、構ってはいられない。

そんな態度であつた。

結果、その病理は確実に地球圏全体に蔓延し、少しずつ世の中を、宇宙世紀の人類社会を蝕んで行つた。

だが、しばらく後、負け組の子たちの希望、救世主となる人物が現れた。

その人物は、当時の連邦議員の中にあつて、逸早くその問題の深刻さに気付いた。

そして、こう思い、言つた。

「これは、地球連邦政府から離れた場所に、新しい独立国でも作らないと解決しない問題だ……………」

「…なぜなら、彼等は地球連邦政府に対し自分たちは見捨てられたと思ひ込み、怨み骨髄に徹つしているからだ……………」

「…だからこそ地球からもつとも遠いサイド3へと彼等を保護し、悪意ある者達を遠ざけ、社会復帰させる治療を施さねばならない……………」

「…そうしなければ、彼らは程なくテロリストに仕立て上げられるだろう。意思の弱いものたちは、人類全体に悪意を持つ分離主義者たちにとっては、反地球連邦の洗脳を施しやすい都合の良い存在だ……」

「…逸早く彼等を保護しなければ、せつかく一つにまとまった人類の共同体、地球連邦が崩壊の危機に陥ってしまう……」

「…旧世紀の人類同士の争いを忘れられない分離主義者たちは、今現在も人類をアー
スノイドとスペーススノイドの二陣営に分けて、互いに殺し合わせる心算なのだから
……」

そう。

後にジオン共和国を建国するジオン・ズム・ダイクンである。

ダイクンのニュータイプ論の人心掌握手法。

月を見下ろす形で、一隻の美しい船が漆黒の空間を航行していた。

月の裏側、もつとも地球から遠い位置に建設されるサイド3、コロニー群の視察を終えた連邦議員。そんな人物が使用する瀟洒な個人用クルーザーであった。

瀟洒なクルーザーは、すでに月の重力を振り切り、遙か先に位置する、地球を眺めることのできる空間に到達していた。

拡がる。パノラマ。

人類の父母たる蒼い星の絶景が、クルーザーのキャプテンの視界を釘付けとする。

彼が守ろうとしている世界の中心……そして、未だ幼い人類が、今後飛び立つて行くべき場所だった。

「……後、もう少しか……」

地球から目を逸らせた議員が、そう呟いた通りである。

クルーザーがもう少しの飛翔を終えれば、自分の迎えである連邦艦隊と、その旗艦へとランデブーする。

それまでの僅かな時間が、彼、ジオン・ズム・ダイクンに許された、一人だけの思索

にふけることができる、貴重な時間であった。

彼、ダイクンは、その貴重な時間を有意義なものとするべく、自らクルーザーの舵を取り、こうして一人、この船のキャプテンとなっていた。

もちろん、警備担当者たちには反対されたが、半ば強引に押し切った形での短い一人旅である。安全な航路を通貨することが絶対条件の一人旅であったが、それを受け入れて時間をつくる必要が彼にはあつたのだ。

「さて…」

ドサリツ。

ダイクンは、自らのクルーザーを自動航行モードへと切り替えると、自身の身体をキャプテンシートへとドサリツと預けた。

「…ローゼンメア…」

(…こんにちは、ダイクン。私にどんな御用?)

そして、ダイクンがそう呟くと、キャプテンシートに身体を預ける議員の前に、一人の乙女が現れた。

媼のような老獪な叡智、聖母のような包容力、乙女のような若々しさが同居した、蠱

惑的な姿形をした存在であった。

もちろん、ダイクンが魔法を使い、妖精や女神を呼び出せる訳ではない。

当然、彼女は幻想の中の乙女である。

ダイクン自身の正妻たるローゼルシアの十代の頃の姿をベースに、ダイクンの脳内で創り出された存在だった。

そのため、名前の一部が若葉の頃：青春の日々を表す五月^{May}に変えられ、ローゼンメイアと名付けられていた。

「君と話たかったのだ」

（そう。大切なお話があるのね。何でも言っつて、ダイクン）

つまり、ダイクン自身が、一人思想に拭ける時に安心できる唯一の相手……自分自身の分身と話し合うためのギミックである。

彼女と一問一答形式で話し合うことで、ダイクンは自分の無意識に潜む想いや、いつの間にか完成していた計画の重要部分を、意識の底から表層へと導き出す作業を行うのだ。

孤独な宇宙世紀の救世主ダイクンが、新たなステージへと到るための作業。

そんな時間を得るための、個人クルーザーによる短い一人旅であった。

「ローゼンメイア、私は次に発表する論文で、とても酷いことをする気だ」
(何をするの?)

「あの忌まわしい旧世紀の革命手法を取り入れ、地球圏の反政府主義者たちを集めるのだ」

(それは……あの中身のない主義主張で人を集める手法?)

「そうだ。人間は個人個人がそれぞれ、主義主張、違った理想を持つ生き物なのだ。そして、現状に不満を持つ輩ほど、その主張が激しく、変えられない現状に対し怒りを持っている」

(だから、あの手法が有効なのね?)

「そう。彼等が自分の理想を重ね易い、中身のない主張を用意する。そうすれば、彼等は自分の主義主張が実現できる大義の御旗が用意されたと思ひ込み、誘蛾灯に飛び込む羽虫のように寄ってくるのだ」

(人間が、理想を追い求める生き物だと知って用いる思考誘導方法ね。でも、そうして集められた者達は、みんな酷い終わり方が待っているのよ)

「その通り。だから私は、これから酷い行いをすると告白しているのだ」

(旧共産圏では飢餓、粛清、民族浄化による大量虐殺……特殊なケース……ヤープンにおいて、アサマ山荘事件や、赤い貴族による、後々まで続く支持者の使い捨てが横行

した……)

「正直、同じになる可能性はある。所詮、集められた者達は、それぞれに違う主義主張と理想を持つている。一度、山岳ベースなどに集まり、互いの本当の主張を話し合ってしまうえば、結局は相手を認められずに殺し合う結果になる」

(レーニンの許に集まったスターリンやトロツキー、その他の者たちも一緒。結局、世界に禍と死を振り撒く結果にしかならなかった……特殊なヤープンでも、何十年も同じ党首がトップに君臨し続け、尽くして来た党員は相応しい地位に就くこともなく、赤い貴族に搾取され続けた)

「ああ。だが私がやらねばならないのだ。今、地球圏は次の飛翔のために力を溜めているところだ。地下に潜った輩に、悪戯に騒乱など起こされてもらっては困る」

(地球の重力に魂を引かれた病人だけでなく、そういった反政府主義者やアナキストも、サイド3に収容して治療を施す必要があると?)

「そのための地球連邦からの独立なのだよ。彼らに、人類全体に貢献する形で生きていける居場所を、この私が用意しなければならぬのだ。そのしなければ、本当の意味での人類の業……延々と続く戦いの連鎖を断ち切ることは、到底不可能なのだ」

(陰陽二元論の陰と陽のように、地球連邦を陽、新共和国を陰に見立てて、互いに影響を与えさせながら人類社会を発展させていくのね)

「……この時代の政治家は皆生贄だよ。次のステージに人類社会を到らせるために、私も、他の議員たちも人身御供にならなければならないのだ。そのためには私も……滑稽なピエロ……救世主も演じて見せ、やり遂げねばならぬのだ」

（そう………だつたら私が背中を押してあげる……あなたならきつとできるわ………ダイクン）

「………ありがとう。連邦中枢の他の議員たちにも、密かに計画に賛同してもらつた。人類社会の病巣の排除と再生を、私が中心になつてきつとやり遂げて見せる。ローゼルシア、デギンやラルも力を貸してくれる」

（頑張つて………私たちの救世主）

ダイクンが前方の虚空に右腕を伸ばす。

その右腕の掌に両手を重ね、頬を寄せると、微笑むローゼンメイアの幻影は消えていった。

「間もなく、ランデブーポイントです」

しばらく後、船内にマシンヴォイスが響き、大切な時間の終了を告げた。

ダイクンが船外映像に視線を移すと、そこには連邦艦隊と、合流すべき旗艦の姿が見

えたのだった。

続く

お茶の合間に作品の趣旨説明

本作のソースは、機動戦士ガンダムの第一話冒頭の説明から、その後に放送された内容です。

それと、それ等で浮かび上がった事実を裏付ける資料として、「逆襲のシャア」作中のスイートウォーターというコロニーの人情：住民たちの度し難い有り様をソースとしています。

それらを現実のガンダムファンたちが直視し、もう一度議論するように仕向けたいと筆者は考え、作品を発表している次第です。

では、はじめます。

ガンダムでは、第一話の状況説明から始まり、導入、各話ストーリーの流れで、サイド3の住民たちはキ〇ガイであることを、これでもか！これでもか！と、嫌という程説明してくる。

曰く、宇宙世紀0079年1月3日、月の裏側にある地球からもっとも遠いサイド3

は、ジオン公国を名乗り地球連邦政府に対して独立戦争を挑む。

そのフィルムムの最初に描かれるのは、他サイドのコロニーに対する艦砲射撃、モビルスーツによる無差別攻撃である。

続くのは地球へのコロニー落とし。

最後に開戦後8カ月の間に、戦争が総人口の半数以上を死に追いやつたと知らされる。

さらに本編が開始されると、視聴者はある事実を理解する。

人々が宇宙で生活するサイドは、建設途中であったサイド7を含めて七つあり、その中、独立戦争を起こしたスペースノイドは、サイド3の住人たちだけであり、スペースノイドでは少数派であったことだ。

そして、冒頭のフィルムムによる説明によって、サイド3のジオン公国軍によって、他のサイドの多くの住民が虐殺されていたことである。

さらには、サイド7コロニー内部での戦端が開かれ、その非道さを見せ付けられる。

ザクIIパイロットのジーンとデニムは、軍属のアムロの父親たちばかりではなく、民間人であるフラウ・ボウたちの両親、家族、その他の住民たちも容赦なく虐殺する。

その所業だけでも、十分にサイド3の軍部は末端までキ○ガイだと理解できるのに、さらに続く。

(長くなるので途中割愛)

その後、軍部だけでなく一般住民も洗脳されていて、キ○ガイだったのだと教えらる。

ジオンのザビ家の末弟、ガルマの死後の国葬。

その放送によって、一般の住民たちも洗脳されていて、キ○ガイになっていたと知らされるのだ。

かつての共和国を乗っ取ったデギン・ソド・ザビ。その息子ギレンが、ダイクンのニュータイプ論に関連付ける形で、人類優勢生存説を発表。サイド3の一般住民を洗脳、地球圏乗っ取りの手駒にしていた。

これには、ジオンの放送を視聴していたホワイトベースの面々も色を失い、ブライト・ノアは激昂する。

ガンダムの視聴者もドン引きである。

そこで、筆者はあることに気付くのである。

(あれ?…サイド3の住民たちって、ギレンに洗脳されたからキ○ガイなのか?…ジオン共和国時代?…それとも、それ以前から?)

それで、これまで情報を精査すると、ある結論へと到る。

(あ…………ジオン共和国成立以前からだわ…………だからこそ後のサイド3の住民は、ダイクンのニュータイプ論に引かれて、共和国に参加したんだわ…)

(…壁一つ隔てた先が宇宙空間であるスペースノイドは、基本、精神的、肉体的にタフでなければならぬ。事実、スペースノイドの大多数はジオン共和国に参加していない。自分で未来を切り開くタフさを持つ彼等には、ニュータイプ論は必要ない…)

(…彼等を除外すると、必然的にタフになれなかった精神弱者の連中と、社会の地下に潜っていた分離主義者たちなのだ…と解る…)

(…しかし…そうするとあれだな…ジオンのニュータイプ論とは「宇宙的やさしさ」だな……………」

つまり……………

「キ○ガイにも自尊心はあるんだナ」

「だからダイクンは、お前はキ○ガイだから、サイド3の精神病棟に入所しろとは言わずにナ」

「ニュータイプ論で引き付けて、自らサイド3に来るように仕向けたんだナ」

「ダイクンのニュータイプ論では、最終的な宇宙市民の勝利者は、いずれ登場するニュータイプと定義してあるんだナ」

「そのニュータイプを生み出す土壌を、サイド3で共に生み出そうと、ダイクンは彼らに呼び掛け、サイド3に集まるように誘導したんだナ」

「ダイクンの本来の目的は、有史以来から続く、人類の病理の治療ナ」

「宇宙世紀以前、敗者は切り捨てナ」

「でもダイクンは、宇宙世紀の今こそ彼等を救って、更生させて、人類の未来に役立つべきとしたんだナ」

「彼等を治療するため、地球連邦から独立した施設の運営が必要だったナ。所詮、地球連邦からの独立は、連邦の中央からもつとも遠いサイド3に、患者を誘導する手段に過ぎないナ」

「だからこそ地球連邦軍も、ジオン共和国独立運動を、武力制圧しなかつたナ」

「ダイクンが、宇宙生活に適応できない輩を引き取り更生してくれるなら、それは連邦

にとつて利益ナ」

「当時、連邦議員だったダイクンは、そう連邦上層部と取引したんだナ」

「見事な腹芸ナ」

「連邦の他の議員たちも、百億を超えた人類に対し、たった一つの政府ではもう限界だと考えていたナ」

「ダイクンの新共和国建国計画と、人類の弱者更生計画は、渡りに船だったナ」

「そして独立ナ。ジオン共和国の住民は、連邦の手厚い行政サービスを一切受けられなくなつたナ」

「それもダイクンの計画の中ナ。あえて苦しい生活を経験させ、乗り越えさせることで、劣っていた患者の肉体、精神の向上を図り、歪んでいた思想の矯正を計つたんだナ」

「将来的に、独自の技術の獲得や、文化の発展も人類全体のためになるナ」

「だけど……」

「計画は順調………に見えたナ」

「ヘビがいたナ。デギン・ソド・ザビー派と言うナ」

「暗殺ナ」

「混乱の中の共和国の乗っ取りナ」

「優性人類生存説でのニュータイプ論の上書きナ。多くの者がザビ家の走狗になるナ」

「デギンは共和国の乗っ取りに成功ナ」

「そうしてザビ家は、その息子ギレンの下、今度は地球圏全域の乗っ取りを計画するナ」

「モビルスーツ登場ナ」

「一年戦争ナ」

「サイド3の民衆は、自分たちとザビ家の主張に従わない連邦こそが悪であり、最終的にニュータイプを生み出す我々こそが正義と、意識を誘導されて狂っていたナ」

「ダイクンは、そう簡単に洗脳されてしまう者、容易く独裁者に自分の未来を丸投げにしてしまう者、そんな人々の弱さこそを矯正しようとしていたのに、ザビ家によって見事に悪化したナ」

「ギレンの手法は、議論をすり替えて煙に巻き、自分の主張こそが正しいと押し付けて、相手を洗脳する手法ナ」

「権威に弱い奴とかは、すぐコロツと騙されるナ」

「サイド3の住民は、元々弱い精神の持ち主の集まりナ。洗脳に弱いナ」

「だから初めから、そんな一面をザビ家一党に狙われていたナ」

「サイド3の連中がはじめからタフであったなら、そもそもダイクンのニュータイプ論に引き込まれなかったし、ギレンの優性人類生存説なんて笑い飛ばしていたナ」

「ジオン公国が歴史に登場する余地がないナ」

字数が2800越えたので、一旦、中断します。

スイートウォーターの住民の度し難さの説明は、また今度とします。

宇宙に散る守護者たち。

一隻のスペースシップが、真新しいコロニーのドッキングベイへと入港していく。

そこは、月とのラグランジュポイントの一つに位置するコロニー群、サイド6の一角であった。

サイド6のコロニーの多くは、これまでに建設された1〜5のサイド建設のノウハウを活かした、開放型のコロニー群である。

多数の農業用プラントを引き連れたその姿は、現時点での最新技術をふんだんに盛り込まれ、他のサイドのコロニー群とは一線を画した、見事な代物であった。

地球圏最大の建築物群らしく、それはそれは雄大で、とても素晴らしい光景であった。だが、それにも増してサイド6は、スペースノイドたちにとつて素晴らしい、別の側面も有していた。

スペースノイドの悲願、その自治権の一部の付与が、正式に認められていたということだ。

もちろん、それはアースノイドたちによる連邦議員を選ぶという最上位の権利ではなく、コロニーの各番地の代表、サイドの代表を選ぶという限定された権利ではあったが、

スペースノイドたちにとっては大きな前進であった。

来るべき地球圏のスペースノイド全員へと、連邦議員決定への投票権が公布される事前準備：そんな約束された福音を最初に得るといふ、前例のない側面であったのだ。

もともと、現時点においてのスペースノイドへの選挙権制限は、当のスペースノイドたちの大多数ですら、当然と納得している事柄ではあった。

宇宙世紀となつて半世紀を過ぎた現在でも宇宙生活の基盤整備は道半ば。

その状況で我々スペースノイドに連邦議員の決定権を与えるのは時期尚早。

という意見が支配的だったのである。

だが同時に。

でも、いつの日にか、我々は正式にその権利を勝ち取る。

これは来たるべきその日への第一歩。

そう言った意味で、スペースノイドたちの大多数にとってサイド6の決定は「小さな

「一步」ではあったが、未来へと繋がる大きな決定として歓迎すべき慶事であったのだ。

「さて…」

（目的地は4ブロック先か…最近、実験的にこのコロニーに配備された、あの電車に手が生えたような乗り物に乗ってみるか）

「…ほう…中々に乗り心地が良さそうだ」

宇宙港から経済ブロックへとアクセスする通路を抜け、軽装の男がそう軽く呟いた。そして、車両用乗り場へとゆっくりと接近していく。

車両乗り場を見れば、確かに木の幹のような触手を生やした奇妙な電車型の乗り物が、そこに停車していた。

男は、ミノフスキー粒子対策が施された電子マネーカードが入った財布を無人の電車（？）の所定の機器にかざすと、一人、車両へと乗り込み、早々と座席シートへ座り込んだ。

コートの端を揺らして、くたびれた服装以外にはビジネスバッグだけという姿の身体が、一人シートに腰掛けて手足を伸ばす。

すると、運転席のAIが起動し、車両が所定の停留所に向かって移動を開始した。

四番目に停車する場所まで、男はこの車両のたった一人の乗客になったのだ。

「ふっ…」

座席で一人ため息を吐くこの男。

本名はゴーマ・シオと言う。

一見軽薄そうな長身の青年であったが、連邦軍情報部の将校で、クソバードというコードネームを持つやり手であった。

今日のこの時、サイド6のこのコロニーに立ち寄ったのも、観光などではなく任務の一環である。

現在、ゴーマ・シオと実験車両が向かう4ブロック先の公共施設では、これよりあるパネルディスプレイが開催される予定であった。

パネリストたちがその場で述べる意見は、今話題のスペースノイドたちの異世界症候群、そして、その悪化によって発症する地球回帰主義が主な内容であった。

つまり、地球に魂を引かれた病人たちの症状が、如何にして蔓延するのかな、詳細な説明であった。

この青年将校ゴーマ・シオは、そのディスプレイを密かに警備しようと、連邦政府から派遣された一人なのであった。

(エルラン少佐が言うような事態にならなければ良いが)

ゴーマ・シオは、コロニー内部の大気を切つて走行する車両の中、流れていく景色を横に眺めながら、そう、一人思い出し、考えていた。

そして、数十時間前の上司との会話を思い出した。

数十時間前。

「シオ、サイド6のあるデイスカツションの警備をしてほしい。秘密裏にな。サイド3に移住したダイクン派内部の過激な層が、一見、意味不明なことをしている。ダイクン議員をスペーススノイドたち開放の闘志に仕立て上げるといふ行動だ」

「?…:意味が解りません。ダイクン議員は連邦議員選出の投票権を持つアースノイドたちに多くの支持を受け当選した人物です。単純なスペーススノイド開放の闘志ではないと、アースノイド、スペーススノイド共によく理解しているはずですが?」

「その通り。投票権の制限を受けているスペーススノイドの指示がどれ程あろうが、現在の環境では連邦議員にはなれん。だが、なぜかその事実を捻じ曲げ、ダイクン議員を一方的なスペーススノイド側の人間としようとする輩が現れたのだ」

「??…:分離主義者たちによる神話の形成ですかね、そういうリーダーの許、自分たちは独立運動をしているという……?」

「それもあるだろう。だが、私が疑っているのはそれではない。冗談抜きの、地球連邦に対する武力闘争の準備。その理由捏造ではないかと、私は疑っている」

「エルラン少佐、それは！」

「良いか、良く聞けよシオ」

「はい」

「旧世紀のゲルマニアの宣伝相は、ゲルマニア民族の他民族への攻撃正当化のため、捏造の映像を撮影し、真実として広めた。後にジェーダス人を絶滅収容所に収監した彼等は、ゲルマニア民族がジェーダス人に迫害され、地面に穴倉を掘って暮らしていると捏造したのだ。そして、そんな愚かな真似をしてゲルマニアは進む道を間違え、滅びにひた走っていった」

「……………では、まさか……………」

「また、大戦後にヤーパンから独立し、同胞との戦争により分断された南コーリヨでのことだ。彼等は初等教育の教科書に、存在しないコーリヨ戦争なるものを捏造、掲載した。現実存在した北と南の内戦を消し去り、すべてヤーパンが悪いとしたのだ。永遠にヤーパン人に土下座させる理由捏造だよ。その結果、ヤーパン人に対して南コーリヨ人は、その後も様々な捏造をしてヤーパン人たちを攻撃をした。後年、結果的にヤーパンとの関係を悪化させ、経済的に失速して北コーリヨに飲み込まれていったのだがな」

「…それと同様のことをする輩が、この宇宙世紀に現れたというのですか……：馬鹿な……」

「他者を洗脳する場合、精神的に弱っている者たちや、現行政府に対して過度の不満を持つ者を集める必要がある。次に彼等に情報統制を敷き、闘争心を刺激して特定の方向へと誘導するのだ」

「……今、サイド3にはそういった洗脳されやすい連中が、ダイクン議員によつて集められている……」

「その通り。ダイクン議員の目的は、多くの人々が知っている通り、スペースノイドの負け組を集めて再教育を施すことだ。サイド3独立運動も、彼等に自分たちで新しい新世界を造り出させて、自信を付けさせるための処置だ。治療の一環ではない」

「…だが、その中にはいるということですか？ ダイクン議員の救世政策を利用し、彼等を地球連邦に対する武力闘争の兵隊として、洗脳しようとする者が？」

「人類の統一政府である地球連邦に戦いを挑むなど、馬鹿馬鹿しい話だがな。だが、どの時代にもキ〇ガイはいるものだ」

「それは……そうですね……：それで、サイド6でのデイスカッションとの関係は何なのでしょう？」

「地球の重力に引かれた病人たちの発生のプロセスと、その治療法の見解だそうだ」

「…確かに、狙われる可能性は少なくないですね。治療されたら洗脳できない」
「ああ。だから、頼む」

「了解しました。ゴーマ・シオ、サイド6へと出発します！」

そんな回想の後。

「…少佐の予想通りにならなければいいが…」

次の停留所に向かう車両の中、ゴーマ・シオは一人呟くのだった。

宇宙に散る守護者たち2。

「…少し遅れたか…」

サイド6商業地区で開催されたシンポジウムの会場に到着し、シオはひとり呟く。

時間が押していた。

早急に秘密警備の下見に移らなければならない。

なぜなら、彼が密かに警備するパネルディスカッションは、広大な会場の一室で十数分後には開始される予定だからだ。

それまでに、シオは複数のことをやり遂げねばならない。

まずテロリストが現れると思われる場所の確認だ。荷物の搬入路を下見し、警備用モニターなどをあらかじめ掌握しておく。

続いて、ディスカッション会場全体を見渡せ、各来場者、各スタッフたちの動きと位置を把握できる場所を確保する。

テロリストは何処に、どの様な姿となって潜んでいるのか。

それがその時になってみないと察知できないようではお話にならない。

そんな様では、上司には無能と烙印を押されてしまうことだろう。

テロの兆候が見えたら即座に行動を起こせる体制を作る。

シオは、残された時間内でそれらのことを済ましてテロと対決しなければならないのだ。

「…無駄に考えてる暇もなしか」

そう愚痴つて、シオは入場用のチケット片手にお目当ての場所へと向かった。

まずスタツフに来場者である証を示し、開催場所をうろつくという行動の自由を確保しなければならないからだ。

「バックドア…コード…脳を守らないと」

ミノフスキー粒子対策済みの携帯機器を使用し、会場の警備ネットワークへとシオは介入を試みる。

しばらくすると携帯画面に、バックドアコード確認との文字が映し出された。

(よし、次)

地球連邦軍情報部の特殊コードを使用し、バックドアから侵入した情報部員のシオである。緊急時のための連邦軍コードは強力であり、警備用モニターへの介入は容易く実現した。

モニターを通じて、シオの持つ携帯に次々と送られてくる各種情報。現時点での最優

先は、物資の搬入路やスタッフ用の通路の状況把握である。

動画を見ている振りをしながら各部を点検するシオ。幸いな事に、どこにも問題は見当たらなかった。

(「こちらはよし……次」)

この後にシオがやるべきことは、会場に集まった各来場者、各スタッフの動向の監視である。

テロリストがどのような姿となってくるのか……その情報は存在しない。

それを見抜くために、会場を見渡せる位置取りをして気を配る。

それが、搬入路、スタッフ用通路の確認を終えたシオが、今もつとも優先してすべき事柄だった。

「それでは、各パネリストのみなさんに、それぞれの立場から、地球に魂を引かれた者たちとはいつたい何者なのか——を語っていただきます」

パチパチパチパチ……………

(間に合った！)

開始間際になって、拍手で満たされた会場入りをするシオ。

講演壇上では、開会挨拶と趣旨説明の後、司会進行役のコーディネーターの下、問題

のパネルディスカッションが開始されていた。

(さて…)

講演場全体を見渡せる欄干の側へと移動し不審人物を探し始める、連邦情報部員シオ。その耳に、一番目の講演内容が入ってくる。

「…えー、そもそも私の専門は、旧世紀からの引き籠り症状を発症した若者、その発生プロセスであります。そう言った方々が、宇宙世紀に入っただの様な状況となったか、新たにどういった問題を社会に生じさせたか。それを研究していた過程で、異世界逃避や、地球逃避症候群へと、研究が重なっていった次第なのであります」

壇上に映し出された地球の映像と各種情報の下、一人目のパネリストが話を開始する。最初の質問役は、司会進行のコーディネーターの女性だ。

「では博士、質問をさせていただきます」

「どうぞ」

「今現在、サイド3に集められた方々が発症されている問題、地球回帰主義とは、異世界逃避症候群と同じものなのですか？」

「ふむ…同じとも言えますし、微妙に違うとも言えますね。彼らにとって渡航が禁止された地球は、ある意味異世界ですが、その気になればいけなくもない場所です。手に届く場所にあるのですよ…だから彼等にとっては地獄なのです」

「どういったことでしょうか？」

「目の前にあるからこそ、彼等は本来自分たちが住んでいるべき場所を、連邦に奪われたのだと感じてしまうのです。まず、宇宙生活者の負け組となった方々は、そうやって責任転嫁をするのです。自分は悪くなく、社会が悪いと思いつつ、自分の自尊心を護ります。その状態が長引くと、次はリアルはクソと、引きこもりや異世界逃避主義者となる訳です」

「それは理解できません。では地球回帰主義とは、その次の段階ですか？」

「その質問に答える前に、一つ語ることがあります。別に非現実……ゲームや小説世界への逃避は、悪いことではありません。むしろ、そうやって傷付いた精神を癒し、明日へと向かう活力を得る意味では健全です。それは解りますよね？」

「はい」

「結構。では質問された地球回帰主義の答えを出しましょう。地球回帰主義とは、異世界逃避よりは、より引き籠りといった精神状態に近いですね。なにしろ地球は我々スペースノイドにとって容易に手の届かない場所ではあっても、現実には存在している場所ですから。彼等は地球に帰って宇宙生活と縁を切り、そこで引き籠りたいと思つていきます」

「……それは………歪んでいますね」

「ええ……ぐにやりと歪んでいるのです。精神的な逃避状況が長時間持続すると、彼等は自分に都合の良い情報だけを信じ込み、物事の考えが狭まっていきます。それで、次第に地球の重力の影響を多大に受け、次第にそこに引き込まれていくのです」

「…引かれる？……それはどういった意味なのでしょう？」

「知つての通り、物質には万有引力が存在します。我々は、常に自分以外の何かしらの物質に引かれ、影響を受けています。また、人間同士でも惹かれ合い、恋愛関係になつたりもします」

「そこに、引力……いえ、重力も介在している？」

「これを信じる信じないは個人それぞれの自由ですが、私はそれを信じています……話が進みました。軌道修正します。とにかく、我々地球圏に住むスペースノイドたちは、気付くと気付かざるに関わらず、地球という巨大な質量に引かれていると言えます。そして、負け組や引きこもり、ドロップアウトした人々は、次第に実生活である宇宙での生活から精神のみを切り離し、地球の重力に精神を持って行かれてしまうのです」

「それが、地球の重力に魂を引かれた者たち……ですか？」

「ええ。それで自分の置かれている現状を変えられないかと、何とか地球に行こうと奇行に走つたり、分離主義の反政府主義者たちと接触してみたりする訳です。同時に、

他者に対して相手の気持ちを推し量れなくなっていく、独善的になるのです」

「ちよつと……いえ、かなり迷惑な話ですね。そうだったのですか……：……ジャン・ヘーエイチ博士、貴重な説明をありがとうございます。では、小休止の後、続いてリツネーニヤ・ワカバスキー博士による講演を開始します。ワカバスキー博士の研究は、今話題のサイド3の実体と、ダイクン議員の思想の原点についてです。ヘーエイチ博士、ありがとうございます！ 最後の質問タイムもよろしくお願いします！」

「いえ、こちらこそ、ありがとうございます！」

起立して熱弁していたヘーエイチ博士が着席し、一時の休憩タイムとなる。司会進行のコーディネーターの女性も、休憩時間をして、リラックスして資料の点検に勤しんでいた。彼女にしてみれば手慣れた作業なのだろう。

(……までは異常なし……か)

公演を聞き流しながら会場を見回していたシオであったが、ここまでは異常はなかった。

「次……」

(ダイクン議員の考え……原点の思想か。気を付けないとな)

背筋にピリピリとしたプレッシャーを感じ、シオは一人、集中力を高めていくのであった。

お茶の合間に作品の趣旨説明2

「親愛なるアルテイシアへ。君がこの音声を聞いている頃、私、キャスバル・レム・ダイクンは、この世には存在はしていないだろう」

「遺言として、なぜ私が愚かにもネオ・ジオンの総裁となり、隕石落としなどの従事したのか……その訳を明かしておこうと思う」

「では、始める……」

「…私がその事実気付いたのは、グリプス戦役の最後に、パプテマス・シロッコという男が、自分の真実をニュータイプ能力で開示した時だ」

「カミーユ・ビダンに敗れた瞬間、シロッコは残酷な真実をカミーユに開示し、その力によってカミーユを精神崩壊に導いた」

「その場の近くで戦っていた私とハマーンは、高いニュータイプ能力によってその事実気付いた」

「だからこそ当時クワトロ・バジーナを名乗り、エウーゴの代表となっていた私は、立場を捨て下野し、シロッコの意味を継ぐべくスイートウォーターへと赴いたのだ」

「事実を告げよう。シロツコという男は、連邦政府の官僚たちの間者だった。シロツコは、遠くアステロイドベルトに位置するアクシズに集まった、ジオン公国の残党を地球圏へと釣り出し、殲滅、或いは内部崩壊させて、自滅させることを第一とし、その目標のために行動した男だったのだ」

「だからこそ、アクシズとの交渉前というベストタイミングで、シロツコはティターンズ側として現れることができたのだ」

「実際、彼は上手くやった。ティターンズと同盟を結んだアクシズは、もしかしたら自分たちが地球圏を掌握できるかもしれない……そんな野望を確かなものとし、逃れられない自滅の道を歩み出した」

「ハマーン・カーンは、シロツコの死によつてその事実気付き、慌てて作戦の一部を修正したが、今さら愚民たちを説得してアステロイドベルトに帰還する訳にもいかず、そのまま自滅の道を歩んだ」

「連邦の官僚たちがもつとも恐れていた通り、ハマーンがアステロイドベルトに残り、そこでコロニーレーザーでも建設していれば、彼女は幸せに生きられたことだろう」

「コロニーレーザーは宇宙で減退、拡散してしまうメガ粒子とは違い、宇宙で減退することのないレーザー兵器だ。それを上手くアステロイドベルトで建造できれば、それだけでハマーン・カーンは地球連邦政府に勝利できた」

「コロニーレーザー建造の後、地球圏を狙撃するという脅しができれば、ハマーンはアクシズを中心とした独立国家樹立も可能だったのだ。当時の地球連邦政府も、それを渋々認める以外、事態を取捨する手段を持たなかったのだから」

「だが、アクシズにサイド3からの移民してきた愚衆たちによって、それは叶わなかった。なぜなら彼等は地球圏への帰還を望み、彼等を制御できなかつたハマーンは、滅びの道を歩む以外、手段がなくなつてしまつたのだから」

「余談だが、シロツコが生前、地球圏の未来は女性がトップに立つことになると思つていたのも、その比喩だ。シロツコは、地球圏の一部を明け渡せば、アクシズが勝手に自滅すると最初から見抜いていたのだ」

「そもそも地球圏の乗っ取りには、ジオン公国も失敗していた。そのミニチュアサイズでしかないアクシズ勢力に、何ができるといふのか？ そう看破していたのだ」

「実際、ハマーンは掌握した地域の支配を維持できずに、部下に反乱を起こされ退路を失う。ガンダムZZ擁するガンダムチームにも対応できずに、ジユドー・アーシタとの一騎打ちでも、無残に敗れ去つたのだ」

「これが、今は亡きハマーン・カーンと、アクシズ側の真実だ」

「さて、これで私がネオ・ジオンの総帥になる前の話は終わりだ。地球連邦の官僚たち

とシロッコによる改革は、不完全ながらこうして一応の成功に終わった」

「連邦の官僚たちが苦慮していたもう一つの事柄は、ジオン公国討伐という輝かしい武勲によって、軍閥化していた連邦軍だ」

「ティターンズとエウーゴという同士討ちで弱体化下し、双方が消えていくこととなり、地球連邦の官僚たちはシロッコを失ったにしても、計画を順調に進めていた」

「だが、まだその元凶の源が残されていた。そんな連中が、この地球圏に残っていたのだ……」

「…私は、そんな彼等を纏めて、共に地獄に落ちる決心をした」

「連邦の官僚たちとシロッコの計画のその先を、私、キャスバル・レム・ダイクンが果たすのだ」

「その奴等とは、ギレン・ザビの優性人類生存説の選民思想に取り込まれたスペースノイドたちだ」

「連中は、戦後、一年戦争の責任を独裁者であったザビ家の者たちにすべて押し付け、自分たちは上手く逃げおおせたつもりでいたが、そうはいかない」

「ティターンズの暴走ということで、その多くは地球連邦政府が始末したが、スイートウオーターの住民たちを含め、まだ少なくない人数が残っていた」

「私は、父ジオンの名を借り、武力を持ったジオン残党をも集め、奴等に隕石落しとしと

いう罪を犯させる計画を用意した」

「奴等は、一年戦争ではその責任をすべて独裁者であったザビ家に押し付け、逃げおせた」

「自分たちは悪くない。悪いのは自分たちを大事にしなかった地球連邦だと責任を押し付けて、自分たち自身を洗脳したのだ」

「だからこそ、自分たちはスペースノイドたちの独立のために戦ったのだと嘯いていられたのだ……反吐が出る」

「だが、実際には、一年戦争の緒戦に置いてもつとも犠牲になったのは、サイド3以外に居住していた数十億のスペースノイドたちだ。ギレンの選民思想に侵されていない、真の意味で優良なスペースノイドたちだったのだ」

「奴等は、私が一兵卒として前線で連邦軍と戦っていた間、自分たちの邪魔になる他のサイドのスペースノイドたちを襲い、虐殺していた連中と同類だ。だから簡単に私の隕石落とし計画にも乗ってきたのだ」

「だが、もう逃がさない」

「私、キャスバル・レム・ダイクンの下に集まったすべてのスペースノイドたちは、全員が有罪だ」

「この戦乱が終わった後、奴等はそれ相応の責任を取らされることだろう。残ったジ

オン軍残党たちも、アナハイムや、僅かなジオンシンパに縋って生きる以外、生きる手段はなくなる」

「そうしてやっつとだ。これまでに選民思想に侵されたスペースノイドたちが巻き起こした反乱が、収束へと向かっていくのだ」

「今思えば、父ジオンは、地球連邦との決定的な武力衝突は決して実行しない、わきまえた人物だった。」

「だが、その死によって多くの人々が道を間違えた。道を差し示してくれるリーダーを失い、多くの者がギレンの選民思想に染まってしまった。その結果が、あの醜悪な一年戦争なのだ」

「それもやっつと終わる。この戦乱の後、多くの人々がスペースノイド開放の戦争などじつは存在していなかった。ザビ家の独裁者と、それを支持したスペースノイドたちの反乱だったと気付くだろう」

「そうして初めて、地球圏の人々はスペースノイド独立という嘘から逃れ、本来の正道に戻って生きていけるのだ。これで、ジオンのスペースノイド開放を謳う反連邦運動は縮小し、やがて消え去っていくだろう」

「そこに、ジオンの遺児である私などに居場所はない。むしろ邪魔なのだ」

「だから私は消える。これからの地球圏の再生の邪魔にはなりたくない。私が生きて

いれば、私の意思を無視して、戦乱の理由にしようとする者がかならず現れる」

「それとアルテイシア、隕石落としの件は安心してくれ」

「隕石落としでは核の冬は来ない。すでに連邦は一年戦争、デラーズ紛争、アクシズとの戦いで、二度三度とコロニー落としを経験している」

「大質量の落下によって、地球の大気中に巻き上がる粉塵の処理方法は、すでに確立してある。その心配をする必要はないのだ……」

「…それに気付かないのは、地球の情報をよく知らない…自分たちに都合の良いことしか知ろうとしないスペースノイドくらいだよ……」

「…さて、それでは最後になる。すまないなアルテイシア。私もお前の優しい兄として生きたかったが、時代が許してはくれなかった」

「どうかアルテイシアは、良縁を得て幸せに生きて欲しい」

「ただ、ダイクンの名のまま生きるか、捨てて生きるかは、自分の判断でしてほしい。これからの時代は、誰もが自分の判断で答えを出していかなければならないのだから」

「それが、ギレン・ザビなどの洗脳から抜け出し、愚衆にならぬということなのだから……」

「…それではさらばだ。私は一足先に、父さんと母さんの許に行くことにするよ

……許してくれるな？……アルテイシア……」

お茶の合間に作品の趣旨説明おまけ。

「アカン。ブレックス准将が、ブチ切れたメラニー会長に情報流されて、ティターンズに暗殺されたンゴ……………」

「…だからアクシズとエウーゴの同盟なんて、ワイはやめとけって言ったんやで……………メラニー会長とその裏にいる官僚のみなさんは、そこはキツパリと、准将に断って欲しかったんや……………」

「…だから、お前はエウーゴ…いや、未来の地球連邦軍の総帥として不合格だよって、殺されたんやで……………」

「…連邦の文民統制の原則として、連邦軍の総帥となる立場で、悪のジオン残党との取引なんて以ての外や。いくらエウーゴを勝たせるためだって、軍閥の長のままの感覚で、暴走してはアカンやつたんや……………」

「…再三のアクシズとの同盟しろとの要求は、メラニーと連邦官僚たちによる、後の地球連邦総帥としての適性を見るための試験だったんやで……………」

「…それで、准将亡き後、前回、ハマーンとの交渉を「だが断る！」ってやわにしたワイにお鉢が回って来たって寸法や。ほんまええ迷惑やで……………」

「…やっぱワイがエウーゴの代表にならんとアカンのやろか……なんやかんやでワイも、ハマーンのアホに頭を下げなきやならんようでイヤやなあ……まあ、ワイはどうしても連邦軍の総裁になる立場やないさかい、暗殺の心配はないんやろうが…辛味や」

「エウーゴ、カラバという軍閥は、連邦の文民統制の原則に外れとる。ティターンズやアクシズの始末が終わったら解体せなアカン。ワイがやらんとならんのやろか……」

「…まあ、それも、エウーゴの代表になるんは、もう仕方ないが、本当に問題なのはそっちやない」

「今の地球圏に残っているスペースノイド共、連中こそバカ過ぎてヤバインゴ」

「成長したミネバが、ハマーンに偏見の塊に育てられていた状況と同じや。ミネバ同様に、スペースノイドたちの多くは、洗脳された状況から回復していない」

「アムロにしても、ブライト艦長、コバヤシ船長、カイ・シデン君、カミーユのアホンダラにしてみても、目の前の敵にばかりに気をやって、その事に気付いてない……ワロタ……ワロタ……」

「…まあ、ギレンが支配するために生かしておいた連中だから、バカばかりなんは当然なんやけど、嫌なことを思い出すから、辛いわ」

「先の一年戦争緒戦のすぐ後に、ザビ家が支配し易いと思われるスペースノイド以外

は、公国軍に皆殺しに近いことをされてもうたからなあ……………」

「…ワイもその時、父の共和国の後継が失われるのは嫌で、必至に連邦軍のレビル艦隊と、一兵卒として戦ったわ。だが、その裏でギレンに洗脳された連中が、やってはアカンことをやっていたンゴ」

「意気揚々と勝って帰ったら、ギレンとドズル、キシリアのアホンダラ共、他のサイドの民間人を虐殺しておった。さすがに、ワイ含め比較的まともだった連中は真っ青や」

「なんで同胞であるスペースノイドの民間人を、ジオン軍が虐殺するんだ!？」

「大本営は狂ったのか!？」

「俺たちは、スペースノイドの開放を信じて連邦と戦ったんじゃないのか!？」

「民間人でも、連邦側は敵だと言うのか!？」

「だから殺せと!？」

「そんな…そんな馬鹿な!？」

「戦争の早期終結にコロニー落としが必要!？」

「そんな馬鹿な理屈を…上層部は罷り通ると思ってるのか!？」

「狂ってる!!！」

「…でも、それがザビ家の実態やったんやで。ワイは復讐を果たすまではと、何とか耐えて軍に残ったが、正直パイロット仲間には、精神崩壊した奴や、自殺した奴、戦闘中に逃げ出してMIA（戦争行方不明者）になった連中も仰山おったで……………」

「…その結果、まともな奴はジオン側には残らなかつた。軍も、民間も、生き残った奴は脳をやられていた……………」

「…今、多くのスペースノイドが、自主的な洗脳か、ジオンの残党に洗脳されたのかは知らんが、当時の狂った状況と同じになつとる。また幻想のスペースノイドの独立の美名を理由にして、地球圏を混乱させる行為に加担している……………」

「…地球からの独立には、連邦と戦うことではなく、自ら地球圏から離れ、苦しくとも天涯の地で生きていく覚悟が必要だというのに、そんな簡単なことも理解できなくなっている……………」

「…このままでは、ティターンズ、エウーゴ、アクシズが消えても、小ギレンとも言うべき危険人物が次々に現れ、地球圏は混乱で疲弊していく……………」

「…もうこうなつたら、誰かがそんな連中を集めて、二度と地球圏の趨勢に関われない様にしなければアカンわ……………」

「…まあ、それをできるのは、この私、クワトロ・バジーナ…いや。シャア・アズナブルでもなく、この私、キャスバル・レム・ダイクン唯一人だろうな……………」

「…それは置いておいて、現在の状況が辛過ぎるわ。今のエウーゴには相談できる奴がおらん。ブライトは実働部隊やから、下手に混乱させることは話せんし、アムロ、コバヤシ艦長やカイ・シデン君は遠い場所」

「ヘンケン艦長やエマ・シーンは色恋沙汰で忙しい。カツやファは論外。カミーユのアホンダラは、なんでワイを殴るンゴ？」

「あいつ、下手にスペーススノイドは精神病だ。洗脳されているとかいうと、殴ってきそうだからコワイ。殴らんでクレメンス」

「だから、話す時は、地球の重力に魂を引かれた者たちとでも、オブラートに包んで言っておくンゴ」

「空手使いのDVは勘弁して欲しいんやで、ホンマ」

「あいつ絶対、ステ振り間違つとるわ。空手、Zガンダムを設計するメカニック、モビルスーツ操縦技術。ニュータイプ能力やろ。それは一流だが、他が酷過ぎる。あいつ、テイターンズを殺すマシーンとしては優秀だが、人間として間違つとる」

「それとレコアは……………消えてくれて助かったンゴ。あいつはハマーンと同じく地雷臭がプンプンだったわ。クワトロにも、付き合う女性を選ぶ権利くらいあろうもん」

「ん……………そろそろダカールに向かう準備や。面倒やけれど仕方ない。ほな、いくン

52 お茶の合間に作品の趣旨説明おまけ。

ゴ
コ

宇宙に散る守護者たち3

「それでは、リツネーニャ・ワカバスキー女史に登壇していただきます。ワカバスキー女史には、サイド3に多くの人々を集めるダイクン議員の政治的な信念、その信念を形作る旧世紀への想い、そして、これから何を成そうとしているのかを解説して頂きます………それではワカバスキー女史、どうぞ！」

進行役のコーデイネーターの、若々しくはきはきとした紹介が講演室へと響く。それに観客からの拍手が続く。

それは壇上を見下ろす形の欄干の側にいたシオのところにも響き渡った。

好意的な観客たちの拍手の最中、シオは講演室全体を鋭い目で見張っていた。

その間にも、リツネーニャはスツと無駄のない動作で壇上の席から起立し、拍手の中央の机迄ゆつくりと歩いて行つた。

マイクの前に立つた彼女の演説が始まる。

「先程紹介されたリツネーニャ・ワカバスキーです。本日は来場のみなさんと共に、今現在進行中の多くの事柄を話し合い、情報を共有していきたいと思えます。また、そうして得た多くの事柄を、今後の研究に活かしていきたいことを嬉しく思います………それ

では早速、現在サイド3で進行中の運動に到るまでの、ダイクン議員の歩みを追って語っていきましょうと思います」

壇上のリツネーニヤはそう宣言し、講演の第二幕が上がった。

再びの拍手が巻き起こる。

「ダイクン氏の幼少期から少年期は、けっして恵まれた環境とは言えない状況でした。氏の生家は、旧世紀の地球統一大戦において、敗北者側であったことが原因です。そのため、祖父、実父共に分離主義的思想の持ち主で、ダイクン氏は、半ば洗脳されるような状況で成長しました」

その内容は、コーデイナーターの女性と彼女の言葉通り、サイド3に移住した今話題のダイクン議員の半生がメインであった。

そのきょう興味深い内容のためか、観客たちは一様に静まり返り、リツネーニヤの話に耳を傾けていた。

講演室の二階部分の欄干付近から、周辺を鋭い目で見まわしているシオを除いて。

「しかし、ダイクン氏はその洗脳まがいの思想を自ら否定し、支援者の力を借りて家を出ました。成長した氏は、親元から離れて自ら寄宿学校に赴き、入学し、自立した生活を開始します」

「これには、宇宙世紀前半にまだ存在していた、ネット上の情報相互主義が大きく寄与

しました。今日、地球圏の距離とミノフスキー粒子の影響により、地球上、各サイドの情報相互インフラは

半ば消滅してしまいましたが、ダイクン氏の少年時代は、まだ確かな情報相互主義がありました」

「もちろん、ダイクン氏の祖父、実父は、ネットは悪いものだ、嘘を教えると、氏のネット閲覧を制限していました。しかし、氏は学校の倶楽部活動とい名目で、万人が閲覧できるパソコン等に触れる機会がありました。それが幸いしたのです」

「また、これが重要なことなのですが、ダイクン氏は生来、高い知能とバランス感覚を有していました」

「それにネット上の情報相互主義が加わり、氏は祖父、実父の思想が歪んだものであると看破でき、また、ネットを通して虐待される子供を保護する組織とも接触をすることができたのです。こうしてダイクン氏は、自由を手に入れることができました」

中々に波乱万丈な話の内容に、ほおお…と客席から感嘆の溜息が聴こえてきた。

なぜなら、地球と各サイドの間に拡がる広大な距離と、昨今のイヨネスコ型核融合炉が散布するミノフスキー粒子の影響が、地球圏の情報インフラは著しく低下させていたからだ。

電波攪乱を引き起こすミノフスキー粒子下では、レーザー通信以外の無線通信は壊滅状態。近隣のコロニー間での早期の情報共有は今や難しく、各サイド間でも大きなタイムラグが発生していた。

そのため、今回初めてダイクンの幼少期のエピソードを、リツネーニヤの口から聞ける者も少なくないのである。

恐るべきことに、この情報相互主義の崩壊によって、地球圏は人々は、ますます洗脳されやすい状況に置かれていた。

情報を統制し、独裁者側に都合の良い情報を流し、盲信させる。

それが洗脳なのである。

旧世紀にあった情報インフラは崩壊したのだ。

だからこそ、多くの公聴客がリツネーニヤの話に引き込まれたのである。

（お客の反応は決して悪くはないにや。ここであの話差し挟んでおこうかにや。驚かせるにや）

そんな公聴客たちの反応を見て、リツネーニヤはアドリブ的に、あるダイクンの優秀さを示すエピソードを差し挟むことにした。

それは、宇宙世紀の今後に確かに影響を与えるエピソードであった。

「話を続けるその前に、ここでダイクン氏の優秀さを物語る一つのエピソードを紹介します。それは、今日に続くアースノイドとスペースノイドの対立の始まりを生み出した思想の一つを、ダイクン氏が完全に否定し、論破する内容でした。それを、まだ幼さの残るダイクン氏が、破綻なく論破して見せたのです」

そんなリツネーニヤの宣言を聞き、公聴客の多くが瞳を輝かせた。早く話を聞かせてくれと、彼等の態度が語っていた。

リツネーニヤは、言葉巧みに彼等を誘導し、その興味を自分が語る話へと引き付けたのだった。

「ダイクン氏の幼少期から少年期にかけて分離主義者は、次世代の子供たちに対する呪いとも言うべき工作をしていました。それは、過去、自分たちの主義が連邦政府に敗北したことに対する意趣返し思想工作でした」

おおおつと、公聴席の一部から驚きの声上がる。老齢の公聴人の声であった。

まさか、あの鉄板の話をも今の時代にするのかと、その老人は驚いたのだ。

その声には触れずに、リツネーニヤは続ける。

「なんと分離主義者たちは、宇宙移民を進める連邦政府の方針を逆手に取り、やつと一つになつて来た人類をアースノイドとスペースノイドへとカテゴリー別に分けて、互いに争う様に仕向ける思想工作を開始していたのです」

「じつは、今日に続くこの二つの勢力の争いは、自然発生的なものではなく、分離主義者達によって仕組まれた、次世代の子供たちに対する闘争の理由造り。本来は必要のない争いへと導く道だった訳です」

「それは……………まさに呪いですね……………」

あまりの話の内容に、司会進行役のコーデイネーターも口を挿む。彼女は、喉が異様に乾く気がして、手持ちの飲み物に数度口を付け、ゴクツゴクツと飲み込んで喉を潤した。

「…失礼。自国をローマ・エンパイアに滅ぼされながらも、二千年を経て、ついに聖地を奪還したジューダス人的な恐ろしさ…執念を感じます……………」

「そうですね。彼等分離主義者たちは、連邦に勝てなかった自分たちの代りに、子や孫であるの世代に争いの種を仕込み、アースノイドとスペースノイドという対立軸を作り出し、互いに殺し合わせようとしたのです。すべては、憎い地球連邦を滅ぼすために、自分の子供たちを悪魔に差し出したのです」

「…気が狂っています。でも、ダイクン氏は、それを見事に論破して見せたのですよね？」

「はい。そのエピソードはダイクン氏の祖父、実父が、ダイクン氏を連れ戻そうと、寄宿学校へと半ば強引に押しかけて来た時のことです」

ゴクリツ……と、公聴席から唾を飲み込む音が聞こえた……ような気が、シオはした。その合間にも、連邦軍情報局員であるシオは、公聴席を見回していた。

一方、いよいよだと、公聴客の多くが緊張し、集中してリツネーニヤの言葉を待つていた。

「遂行なアースノイド側との戦いに、スペースノイド側として戦えとしてお前も戦えと、ダイクン氏の祖父、実父は迫りました。しかし……」

「しかし?」

「彼等に対するダイクン氏はこう言ったのです……」

「……本来、地球は宇宙という環境の一部で、ある意味、地球とは環境の良いコロニーに過ぎない。つまり、地球に住むアースノイドとは、本質的にスペースノイドの一形態に過ぎず、アースノイド側とスペースノイド側の違いなんて、住んでいる場所一つの違いに過ぎない……」

「……人類は、そんな理由で戦う必要なんてないんだ。せつかく一つになっている人類を二つに分けて、悲劇と哀しみしか生まない対立軸を、自分やこれから生まれてくる子供たちに、無理矢理押し付けなくてくれ……」

「……あなたたち分離主義者はいったい何様のつもりなんだ? あなたたちにそんな歪んだ思想を押し付ける権利なんてないだろう。私たちの生き方は、私たち一人一人が自

分で決める。放っておいてくれ……と」

リツネーニヤの話が一旦終わると、公聴席は一瞬沈黙で静まり返り、その後、わあっ！と、歓声が巻き起こった。

その歓声の中で、リツネーニヤが話を再開する。

「その話を聞き、自分の孫、子の聡明さに気圧された二人は帰っていききました。以後、ダイクン氏の人生にこの二人は登場しません。ダイクン氏は彼等との絶縁を宣言し、二度と会うことはありませんでした……みなさん、ここまでご清聴ありがとうございました。ちよつと話が脱線しましたので、小休止の後、本来の話に戻します」

感動冷めやらぬ歓声の中、リツネーニヤは小休止を宣言。自分の席に一旦も出っついていく。

ジャン・ヘーエイチ博士他。パネリストたちが、リツネーニヤのトークの成功に、惜しみない拍手を送って彼女を迎える。

それを見届けて、司会進行役のコーディネーターが小休止を告げるのだった。

「では、一旦小休止とします。小休止の後、引き続きリツネーニヤ・ワカバスキー女史の公演を再開します。それまで少々お待ちください」

(……)までは無事か。襲撃者もリツネーニヤ女史のトークの内容に気圧されたか？

……)

「……まだ油断はできんな……」

二階の欄干傍で、シオはそう呟いて、公聴室を見回すのだった。

(……しかし、皮肉な話だな。アースノイドとスペースノイドの対立を無意味と否定したダイクン氏が、後年、人類の病理を解決するためにスペースノイド側に歩み寄り、武力闘争を否定しているとはいえ、独立運動をするなんてな……)

そんなことを、頭の片隅で考えながら。

宇宙に散る守護者たち4

小休止の時間となり、リツネーニヤ女史は自分の座席へと戻り、他のパネリストたちとこれからの講演の打合せを開始した。

司会進行のコーディネーターの女性も一緒である。

もしかしたら、これから講演の順番や講演内容などに変更点があるのかもしれない。講演には、話の進行、公聴客の盛り上がり方、パネリストのアドリブなどによって、予定が入れ替わることも多々ある。

リツネーニヤ女史は、講演のパンフレットに記載されている博士、マモローネ・ノウヲ女子としきりに話し合い、今後の予定の打合わせをしていた。

一方、一時の興奮に冷め、クールダウンした公聴客たちと言えば、空いた時間を利用して花摘みに向かうために席を立つ者、あるいは水分補給と当分補給に軽食を口にする者が多数いた。

また、近しい友人達で訪れた者たちは、華々しい会話の華を咲かせて、講演が再開されるまでの時間を潰していた。

一方、民間人を装い、潜入調査をしていたゴーマ・シオといえは。

(ここ)まで異常はない…か。さつきは確かに殺意のプレッシャーを感じたのだがな……これは消耗戦になりそうだ……)

そう思いながら、公聴室全体を二階の欄干側から見回していた。

その筋…連邦軍情報局員…の人間であるシオは、テロリストの殺意に敏感だ。いくら相手が一般人を装って姿を隠しても、何となく感じられる才能を有していた。

こと対テロリストに関する分野にのみであれば、シオはダイクン議員の提唱するニュータイプの能力を持っている……のかもしれない。

(ん？…あれは！)

そんな折、壇上側から目を放し、反対側の入口付近を見張っていたシオは、ある異変に気が付いた。

これまで講演室に居なかった一般人の男が、ふらりと講演室へと入ってきたのだ。

そして、講演室から出て行く者とすれ違った瞬間、男は、その手からさりげなく小振りな何かの入られた包み紙を受け取ったのだった。

シオでなければ気付かない、偶然を装った見事な受け渡しだった。

(あの動き…それなりの訓練を受けた輩の動きだ…ターゲットの監視役と実行役は別

か…当たりだな…)

「…コード・お問い合わせ…」

シオは、そう携帯機器に向け、ぼそりと呟いた。

外部の連邦軍情報局員へと、監視役の男の監視を頼むと依頼したのである。

バックアップ要員は、シオとは別ルートでサイド6のこのコロニーへと、すでに潜入している。

すでに会場のセキュリティは、シオのバックドア・コードによって連邦軍情報局員たちの支配下にある。

それは簡単な連絡事項だった。

その引継ぎを終わらずと、シオは二階の欄干にそつてゆつくりと、テロの実行役と思しき男が座った席の近くへと移動していった。

シオの、クソバードというコードネームは伊達ではない。

その名の通り、シオは素早い動きと空中戦が得意な男だった。

敵側のテロリストにしてみれば、彼は確かに恐るべきクソバードなのである。

つまり、テロ実行犯と思しき男が動いた瞬間、シオは二階の欄干を蹴って跳躍し、上からの落下攻撃を敢行して、相手に身体的大打撃を与え、仕留める心算なのだ。

無論、相手は武装したテロリストなので、一瞬で反撃をする力を奪い、制圧する心積

もりである。

その計画がもつともやり易いと思われる場所へと、シオは移動していったのである。

ピ——ッ、ガ——ッ、

その時、シオにとっては上手い形で、壇上の司会進行役のスピーカーから異音が響いた。

段取りから外れる仕様のために、ノイズが入ってしまったのだ。

(うまい！)

シオが内心そう考え、にやりと笑う。

偶然にも目標となる男はそちらに気を取られ、シオの移動が気取られる心配が消えたのだ。

その隙に乗じて、シオは予定通りの位置に問題なく到着、その場を確保する。

その頃、壇上では公聴客に対する、必要なアナウンスがなされていた。

講演者の交代である。

「えー、公聴席のみなさま、突然ですがリツネーニャ・ワカバスキ女史に代わりまして、ここでマモローネ・ノウヲ博士の講演を挿ませて頂きます」

「マモローネ博士は、旧世紀から続く人間同士の争いの歴史、とくに古代王朝成立時の支配する側とされる側……栄華を得る支配者側と、奴隷とされる者たちが、如何にして別たれるのかの専門家であります」

「人類が地球を飛び立つ以前、地球という狭い領域に生存していた人類でしたが、インターネットという集団の知性を得る手段を持っていました」

「彼等は、その集団の知性を最大限に活かし、バラバラだった各国家をまとめ上げ、地球連邦の原形を造り出し、そしてついに人類の統合の成功したのであります」

「ですが、それ以前の人類は、如何にして国家を造り上げ、そして国家同士で殺し合ったのでしょうか？」

「マモローネ博士には、インターネット登場それ以前、集団の知性を持たない世界で、どのようにして支配者が誕生し、どのようにして大勢の人々が奴隷にされたのかを語って頂きます」

「それは、今日地球圏の広大さとミノフスキー粒子の増大によって、集団地性の源泉であるインターネット技術を失いつつある私たちにも、無関係ではない事柄なのです」

「講演する側の私たちと致しましては、リツネーニャ女史のお話を最後まで聞き終え

る前に、マモローネ女史のお話を聞き、その情報の共有をするべきだと考えました」

「そのため、このような構成とさせて頂いた次第です」

「それでは、リツネーニヤ女史に代り、マモローネ女史の講演を開始させて頂きます
……………マモローネ女史、それではお願いします」

そんな司会進行役のアナウンスは終了し、壇上の座席の一つからマモローネ・ノウヲがスツと立ち上がり、一礼した。シユツと背の高く、知的な雰囲気的女性であった。

間もなく彼女：マモローネ・ノウヲは壇上の机へと歩み寄り、机上のスピーカーの前で講演を開始した。

「先程、ご紹介にあずかりましたマモローネ・ノウヲです。これより、私の専門である人類の支配者による独裁と、奴隷問題……………その始まりを簡単に説明していこうと思います」

「世に言うファラオ・ゲーム……………有り体に言ってしまうえば、神の子孫を称する側の支配層が如何にして出現し、彼等に逆らった民衆が、如何にして奴隷にされて、その一部の者たちが、如何にして支配者たちの思いを遂げるための道具にされるか。それを語っていきこうと思います」

「さて、始まりは簡単です。少数の集団の知性を持つ集団、Aと、集団の知性をほとん

ど持たない、B、C、D、Eの集団が存在したとします。その内部で成功していくのは、当然、Aです……………」

（彼女が連中の一番のターゲットか……………）

シオは、マモローネ・ノウヲ女子を見詰める監視下の男の殺意が、急速に高まっているのを感じていた。

シオの監視下の男…おそらく、一つになっている人類に対し、アースノイドとスペースノイドに別れて殺し合うように工作している連中の仲間…にとって、マモローネ女史の話はすこぶる都合が悪いのだろう。

（彼女が語っている内容は古代王朝の話だが、じつは人類の洗脳方法の原形だ……………）

（多くの死んだ人間たちから様々な知識を受け継いだ集団Aは、当然、治水、四季、作物の植え付け時期を知っていて、当然成功する。一方、それらの知識を持たないBCDEの集団は、その無知故にA集団に従うことになる……………）

（そして、無知なBCDE集団は、なぜA集団だけが成功するのかさえ理解できない……………）

（次の段階に起こることは、A集団にはただ従っていればよい。それで成功するので、思考を捨てたBCDE集団によるA集団の崇拜だ。ついにはA集団は、思考を捨て

た他の集団の者たちによって神の御使い、子孫ではないかと噂されるようになる……)

(…そして、その神の御使い、子孫説に乗ったA集団は、自らを神に選ばれた者たち…神に選ばれた王の血筋だと主張し始める。フアラオ…王権神授説の原形だ……)

(…皮肉なことに、古代王朝から2000年以上過ぎた宇宙世紀に、そんな状況…すなわち支配者に操られる無知な集団を大量に生み出し、互いに殺し合わせようとしている計画が蠢いている……)

(今日のコロニー生活者たちは、地球圏の広大さと、ミノフスキー粒子散布の影響により、前世紀の遺産である集団の知性を失い、無知になる状況下に置かれている……)

(…さらにセルフ無知化…宇宙生活に適応できないために、外部との接触を断って孤立化していく、引き籠り気質の者たちも増大した……)

(…他者を無知な愚衆…奴隷にして洗脳し、殺し合わせようとする者たちにとっては、素晴らしい状況だ……)

(…そんな状況下、無知な愚衆としたい一般民衆に、様々な知識を与えようとしているマモローネヤリツネーニヤ、ジャン博士は、彼等にとつて邪魔な存在以外の何者でもない……)

(…知識はそれ自体が力なのだ。知識がなければ、どんなにIQが高くても、物事の判

断ができないのだから………)

(…分離主義者たちは、スペースノイドたちを無知な状態で固定させ、自分たちの言うことを信じ、その思惑通りに行動するようにしたい………)

(…そして、独立運動が正しいのだと、アースノイドと殺し合わせる心算なんだ………)

「…させんよ。俺たち、連邦の情報部員たちがな…」

そう呟いたシオが、全体の筋肉を滾らせて、タツ！と、欄干を蹴って跳躍した。

(…俺たちが貴様等、分離主義者たちの野望を挫く！)

そんな思いを抱く、シオの舞い降りるべき目標点は、今まさにマモローネ女史の頭部へと銃口を向けた、テロリストの男の頭上だった——

戦士の回想

それは、とある連邦軍直属の軍事コロニーでのこと。

コロニー移動用の船の到着を待つ男が一人、ドッキングベイの巨大施設を見下ろす高台に立っていた。

自分を運ぶ車の到着を待っているのである。

予定では、すぐにエレカで同僚のプロン・ク・ホーンがやってくるはずだった。

彼女は豊かな胸を持ちながら、張りのある太腿と素早い移動力を持つ、魅力的な女性である。

穏やかな心を持ちながら、怒ると…その、コワイ女性である。

ビッ、ビッ！

シオが、あの女怖え…などと考えていると、高台にクラクションが聴こえてきた。同僚のプロン・ク・ホーンとエレカの到着だ。

「ゴマちゃん、今度の任務はサイド6だったて？」

「……………ゴマちゃんて言うな。そうだ」

連邦捜査官のゴーマ・シオが、情報収集担当のスタッフであるプロンに話掛けられ、少しいやそうな表情でに、そう同意した。

豊かな胸の上にタピオカティーを置きながら飲む、プロンが笑顔になる。

容器が落ちないのがスゴイ。

「資料持ってきたよ、ゴマちゃん」

シオがエレカに乗り込むと、早速、プロンはある資料をカバンちゃんから取り出し、シオに差し出して来た。

「だからゴマちゃん言うな…何だ？」

「洗脳用書き換えられたエレズム、コントリズム、ジオニズム思想の実物。出所はサイド3。実験的に配布されたみたい」

「サイド3……どうなってる？」

「読めば解るよ」

エレカを飛ばさせないプロン。とりあえずここで読めと、シオに促してくる。

「…」

シオは、無言で速読を開始する。

「……………穏健なエレズムは、地球からアースノイドを追うせと追加され、平和的なコロニー統治を謳うコントリズムでは、武力闘争で権利を勝ち取るべきとされている。地

球連邦と並ぶべき宇宙国家を建設するべきとのジオニズムは、武力を用い、どれ程の犠牲が出ようとも、戦って独立を勝ち取るべきだと書き換えられているな………どれも読者の闘争心を過度に刺激し、人類同士で殺し合う様に仕向けている」

「そうよ、ゴマちゃん。どれも立派な洗脳思想に改悪されているわ」

「また分離主義者の工作か。いまやスペースノイドは80億人。対してアースノイドは20億人。時間の経過と共に、その実権は徐々にスペースノイド側へと移っていく。なんでスペースノイドの国家を、スペースノイドが打倒しなけりやならんのだ………それと、ゴマちゃん言うな」

「そこで洗脳ですよ、ゴマちゃん。サイド3は洗脳に好都合の状況だもの。ダイクン氏が洗脳し易い者たちを治療するために集めているし、元々サイド3は地球からもっとも離れた場所にある、地球圏一のクソ立地。洗脳に最適の場所です」

実際、サイド3は別のサイドに住む者達に、「余はサイド3に生まれなくて良かった」と言われるクソ立地だ。「月の裏側になんて、ビジネス以外に用はない」と、商売以外では行く理由がなく、避けられる御土地柄なのである。

だが、それ故に外部からの影響が少なく、静かに暮らしたい者たちや、隠れて何事かやらかしたい連中にとっては、理想的ではないが、そこそ良い場所なのである。

「だから、ゴマちゃんやめろ。旧世紀では、共産主義者が再教育と称して、僻地に洗脳

対象を隔離して洗脳教育を施していた。僻地で孤立しがちなサイド3、そこに位置する宇宙コロニーともなれば、その収容施設そのものだ」

そこまで言ったシオは、資料を後部シートに放り投げ、ドサリツと助手席へと身体をもたれ掛けた。度し難い人類の暗黒面に呆れかえり、天を仰ぎたくなつたのである。もつとも、天を仰いだシオに見えたものは、コロニーの隔壁であつたのだが。

エレカが止まる高台周辺で、プロンがタピオカミルクティーを啜る音だけが響いた。

「…ゴマちゃん……………」

「…だからゴマちゃんじゃない……………何だ？」

いつものやり取りのつもりだつたシオが、プロンの態度を訝しむ。今回のプロンの態度には奇妙な真面目さと緊張があつたのだ。

「…今度の敵、子供がいる可能性がある。別のサイドでガサ入れて得た資料に、旧世紀のヤーパンのレアケースが見つかったの」

そう言うプロンの言葉には、普段の茶化す雰囲気とは別の剣呑な雰囲気があり、シオとしても、それは無視できぬ物言いであつた。

シオの上半身が起き上がり、プロンへと向き直る。

「ヤープンのレアケース？」

「そう。多くの子供がインターネット経由で、SFフィクションの洗脳思想に感染しちゃうケースよ」

「?.....旧世紀のインターネットの相互情報主義が存在する状況でか? 一概に信じられないが.....」

「情報相互主義が有効なのは、複数人が集まって、一つの事柄を議論できる状況だよ。一人になっての検索は、本人が洗脳思想と知らずにアクセスしてしまい、ブレーキがなまままで、それを信じてしまうケースがあるの」

「!? そうか。洗脳思想と個人の検索者による密室状態になる。旧世紀の一般人が、イスラム過激派のモスクに連れ込まれ、そこで洗脳され自爆テロ犯になったケースと酷似する!」

「そういうことよ」

「?.....だが、SFでフィクションなんだろう? 実害はあったのか?」

「問題はその洗脳思想が、実際に存在していた洗脳方法を、そのままコピーしていたことよ。その中身が遙か未来の内容でも、そのコピー部分は、確実に現実の人間の真相意識に影響を与えるの」

「それで、実際の人間の被害は?」

「幸い、気付いた人物がそのプロセスを公開し、被害はファンのコミニティ間や、ネット空間だけで押さえ込まれたらしい。けれど、とにかくその作品のファンは長年、外部に対して攻撃的になっていたそうよ。問題が起これば、「また〇〇〇〇ファンが暴れているのか」と揶揄されるくらいにはね」

そこまで言って、プロンはカラになったタピオカミルクティーの容器を紙袋に押し込んだ。そろそろ出発しなければならぬ時間になる。プロンはエレカのハンドルを握った。

「つまり、今度の俺の相手は、その手法をアレンジして洗脳された子供が含まれる訳か……」

「上層部からは、見付けたら容赦せず殺せって指示が出ているわ。閉鎖空間であるコロニーでは、テロの被害は予想以上に大きくなる可能性があります。子供でも容赦するなって」

「…寒い時代になったもの…だな」

旧世紀、SFフィクションから現代に洗脳思想が実際に逆輸入され、存在した被害。

（そのケースを、この宇宙世紀に流用する輩が存在する。その敵の操る子供と、俺が実際にやり合う可能性がある）

寒い気持ちになり、表情を硬くするシオだった。

「…ええ、気を付けてね、ゴマちゃん」

「…わかったよ。助言、感謝するよ、プロン」

ゴマちゃん言うなどは言い返さず、素直に返事をするシオ。実際に有意義な助言だった。ここはプロンの言いたいようにさせる場面だろう。

そんなシオを乗せ、プロンのエレカは宇宙港の所定の場所へと向かって行った。

エレカの助手席のシオの頬にあたる風が、やけに寒い気がした。

宇宙世紀のテロリストくその正体は、自発的文盲、自発的認知バイアスとなった人々。

シオは、物音も立てずに素早く二階を移動していた。

二階の欄干を蹴って空中からの奇襲を敢行するべく、テロ実行犯と思しき人物の頭上近くへと移動していく途中である。

そんな僅かな間、シオは壇上のマモローネの話を吟味しつつ、同僚のプロンとの会話を思い出していた。多数の事象に同時に対処しなければならない情報局員は、思考も色々と忙しいのであった。

（彼女：プロンの話が確かなら、目標であるテロリストは、自発的文盲、自発的認知バイアスとなった輩）

数時間前の連邦軍船室。

「……………なあ、プロン。機能性文盲や、認知バイアスってのは理解できるが、この自発的文盲や、自発的認知バイアスって何な訳？」

「あ、ええと…それは、洗脳された人々が、特定の事柄について自発的に見ないことに

して、排除してしまう状況よ」

「どういう事だよ?」

「うーん、旧世紀のヤープンで説明するけど良い?」

「OK」

「了解。人間って生き物は、イメージ戦略にとことん弱い生き物なの。例えば、新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどで、間違っている事でも延々と同じことを繰り返し言われれば、「みんな同じことを言っている。そうなのかな…そうだな」と信じてしまうのよ」

「洗脳の初歩だな。そんな状況が、旧世紀のヤープンに実際にあった?」

「YES! 反政府的な集団が、外国勢力と一緒になって各メディアを掌握して、主に無能な政治家と腐敗した官僚が、様々な不正を犯していたと喧伝し続けた訳……愚かなことに、インターネット全盛期の時代に入ってもね」

「おいおい…政治家はともかく、ヤープンの官僚は世界でも有能な実務集団として有名だった。その事実が無視されて、一般国民が洗脳されたつてのは、流石に信じられないな?」

「言いたいことは理解できるわ。官僚組織は近代国家の要。国家のシステムが機能していると言うことは、官僚が優秀だったということですから。とくに自然災害の多いヤープンの官僚には腐敗している暇なんてありません。国家の屋台骨を支える実務か

ら遠い、文部省や外務省を覗いてね」

「だろう？」

「でも、それを実現するのが洗脳なのよ。ヤープンではね、そのメディアの洗脳放送の期間が尋常ではなかったの。数カ月や数年ではなく、数十年よ」

「…マジか？」

「マジよ。これは当時のヤープン政府の責任ね。まさか、こんな子供染みた洗脳に乗る人がいるなんてと、長年、事態の改善を図らなかつたのよ……それで一定数の人たちが、その洗脳を信じ込んでしまったの」

「…古風な洗脳方法も、長年続ければ有効って事か」

「YES それで、洗脳された人々の特徴として、自発的な機能的文盲と、自発的な認知バイアス状態が確認された訳」

「………ん、文脈によると、その洗脳された人たちは、優秀な政治家や官僚の情報を、見ても、存在を認めず、自発的に排除して理解しようとしなかつたってことか？」

「YES！ 彼等にしてみれば、自分の持つ世界観を守るためには、政治家や官僚が優秀であるという情報は決して認められないことなの。彼等にとつては、政治家や官僚は悪の存在で、それに立ち向かう存在こそが正義の存在だったのよ。その世界観を壊す存在は、決して認められないわ」

「……………だから、自分が持つ世界観に都合の悪い情報は、自発的に見ない。見ても理解しようとしなない?」

「その通りです。でも、洗脳された人々はそれでは終わらないの」

「…何やらかした?」

「まず脱税という犯罪行為。続いて反政府組織への資金提供。外患誘致。外患援助。一般市民の拉致への協力。外国への誘拐。ヤーパン人の中にも、実際に反政府運動の兵隊になった人もいたって」

「…自分が帰属している自国への反乱じゃねえか」

「繰り返し返すけど、洗脳された者たちの世界観では、腐敗したヤーパン政府（と、思い込んでいる）と戦っている者たちこそが正義なの。たとえそれがテロリストであってもね」

「だから、腐敗したヤーパン政府には税金など払えないと、脱税もするし、反政府主義者や外国勢力に援助などの協力もしたと?」

「……………哀しいけど、それが過去の歴史の真実です……………」

「ふ——……………話は変わるが、今、サイド3を中心にして地球圏では、第二次世界大戦前のゲルマニアやヤーパンと、似たような状況になっているんだな?」

「ううん。まだ反地球連邦主義のピラが不定期にばら撒かれたりしている段階ね。各

メディアはまだ中立性を保っている。これは、サイド3にいるダイクン氏の存在が大きいわ。ただ、ミノフスキー粒子の電波障害で、どのサイドもレーザー通信以外の連絡がほとんど難しくなっているの。地球と各サイドの情報格差はますます酷くなっていて、分断されて内向きになるのは時間の問題」

「反地球連邦主義の拡散阻止を、連邦政府はや躍起になって阻止しているが、何分手が足りずに追い付かない状況か。連中、サイド1、2、4、5と、どこでも問題を起こしやがる」

「そうね。今回はサイド6って訳」

「イヨネスコ・ミノフスキー反応炉で核技術は大幅に躍進したが、その反動としての電波障害………悩ましいな」

「うん。それがなければ、連中の一斉検挙も不可能じゃないんだけど。なにか、良い電波障害の解決方法があればいいのにね」

「………そういえば、技術部のカパルアさんと博士と助手が、サイ・コミュニケーションとかいう新技术が密かに研究されてるっていつていたな………」

そこまで思い出し、シオは過去へと向かう思考を停止した。

(よしー………だ)

目標のテロリストに対し、空中から奇襲を敢行するに相応しい場所へと到達したのである。シオは冷静に相手との距離を測り、両脚へと力を込めた。

そして。

シオが、欄干を蹴って空中へと躍り出る。

「このっ！ ビビってんじやねーぞー！」

サイド6の戦闘：守るべき対象の死。

欄干を蹴ったシオが、二階から空中へと跳び上がる。

「このっ！ ビビってんじゃねーぞー！」

空中を舞いながら、目標の男に対して敵意の伴う煽り文句を叫んだ。

その煽りを聞いて、マモローネを狙うテロリストの身体がビクリツと跳ね、両手で構える銃口が僅かながらブレる。

予想外の方向から煽り文句を受け、テロリストの男は反射的に体幹を乱し、その乱れが、状を構える両腕に伝わったのである。

標的を捉えていた銃口が逸れた。

（勝機！）

シオにしてみれば、それは十分な隙だった。

テロリストに空中から接近したシオは、ダンツ！ クルツ、ガンツ！ クルツ、バキイツ！と、まるで重力を無視したかのような三連続の足技を繰り出した！

頭部、頭部、手首へと連続で衝撃を受けたたテロリストは、最後の手首への攻撃で銃

を取り落とし、拳銃は、カラカラツ、カラツと音を立てながら遠ざかっていく。

その合間にシオは、テロリストの身体を踏み台にして跳び、軽業師、或いは忍者の如く軽やかに床に降り立つ。

その流れのままに体勢を立て直し、シオは追撃の体制へと移行する。

「おおっ！」

気合の短い叫びと共に、シオは疾走。

スピードの向こう側へと達するような速度で、素早くテロリストとの間合いを詰め、手持ちの電磁ナイフで態勢を立て直せないままのテロリストの両太腿を攻撃。傷付けていく。

相手の移動力と反抗心を削ぎ取る、冷静な狩人の動きと、計算された対応だった。

倒れて態勢を立て直せぬまま、両太腿を無防備に晒していたテロリストに、その攻撃を躲す手段はない。

ザシュツ！ ザクツ！

「!? !? あっ、あー!?」

剣閃が奔り、テロリストの両太腿が出血。男の悲鳴が響いた。

「シツ！ シュツ！」

シオは、すかさずナイフを振って見せ、同時に短い叫びを上げて、テロリストを煽る。

防御しないとまた切るぞ！ 切るぞ！と牽制しているのである。

!?

「ひっ！」

その様子を見たテロリストが、自分の絶対急所がある頭部、臓器の集中する胴体を防御しようと、必至に両腕で防御する動作を取る。

しかし、それはシオの誘導通りの動きである。

シオは始めから、太腿に続き両腕も傷付けてテロリストの抵抗力を奪う心算だったのだ。テロリストの防御のための動きは、自らシオに獲物を差し出すのも同然だった。

ザッ！ ザシユッ！

再びの剣閃で、テロリストの腕が切り裂かれ、出血する。

「!? !? あっ、あー！」

両腕を切り裂かれ、奇声を発するテロリスト。

振り回された手足から、周辺の席へと鮮血が振り撒かれ、その一部は、近くに座っていた観客の肌や衣服を汚した。

ピチャッ！

「!? 冷た…ヒイ！」

飛び散り、自分の肌に当たった血液を反射的に拭い、その拭った指先の鮮血に気付い

た御婦人が、短く叫ぶ。

そして、今、眼前で何が起こっているかを理解した。

「連邦情報局だ！ 現在、テロリストを制圧中だ！ 無関係の者は逃げろ！」

シオが、状況説明のため叫ぶ。

(連邦情報局！………テロリスト?!?!?)

シオの叫びを聞いた観客たちの動きがピタリと止まり、彼等の視線が、シオとテロリストに有り様に集中した。

「キャアアアアッ！」

「うわあっ！」

「逃げろっ！」

一瞬の後、事態の全容を理解した観客たちは、一斉に客席から立ち上がり、公聴室の出入り口へと向かって、我先にと駆け出した。

ある者は、その途中でバランスを崩して無様に床に倒れ、ある者は、床に這った人物を飛び跳ねて跨いでいく。立ったまま出入口に向かう者たちは、押し合いへし合い目的の場所へと殺到していった。

自分優先で他人を思いやらない、一見、地獄絵図のような光景だった。

だが、一般客側としては、そうする理由があるのである。

他人の身を思いやって、その移動を妨げないように立ち止まれば、テロリストやその仲間に入質にされる危険性がある。

返って連邦情報局員の邪魔になるくらいなら、人だなしと思われようと、自分は出口へと向かった方が得策だ。

結局、その方法が一番被害が少ないという動機だった。

一方、壇上のパネリスト、司会進行役のコーディネーターたちは、事態にどう対応すればわからず壇上に立ち竦んでいた。

観客たちの方向に自分たちが逃げれば、自分たちと一緒に観客たちが狙われるかもしれない。

また、観客たちの中に潜り込み、彼等を囮にしようとも思わなかった。

パネリストのマモローネたちにしてみれば、テロリストに狙われている自分たちから観客の皆様が、一国も早く遠ざかるのを祈るのみだった。

「シッ！ シャア！」

半数以上の観客が講演室を逃げ出し、室内に人影がまばらになってきたその時、シオは順調にテロリストの男の

抵抗力を奪っていた。

八割の観客が逃げ出す頃には、テロリストの男はすでに抵抗の意思を保てなくなっていた。シオの容赦がないながらも、確実に手足を負傷させる制圧方法に、抵抗の意思を削ぎ落されていたのだ。

「たっ、たっ、助けて！」

そもそも、自分がテロリズムに走ったからこのような事態となったのも関わらず、手足が傷と出血塗れとなった男は、悲鳴を上げて助けを請う。

「…無駄な抵抗は止め、大人しく捕まれ！」

「しっ、従う！ だからもう！ やめてくれ！」

シオの降伏勧告に、もう嫌だと従うテロリスト。

その時、シオの後方で殺意の想念が一気に沸き上がった。

!?

ぞおっ！つと、背中でのその想念を感じたシオは、悪寒を走らせたまま、すぐさまその場からエスケープする。素早く横に飛び退いたのである。

すかさず床上で一回転し、体勢を立て直す。

パンツパンツパンツ!!!

その時、三点バーストの銃声が鳴り響いた。硝煙の香りが辺りの立ち込める。

戦慄し、ブルーとなった顔をテロリストの男のいる方向に動かすと、別の地獄絵図がそこに拡がっていた。

テロリストの男は即死だった。力なく床に倒れ伏し、銃弾が直撃した頭部からは出血が止まらない。

だが、驚くべき地獄の光景はそれだけではなかった。

その頭部を穿った銃弾の射線の先にその者たちはいた。

「っ!?!」

（子供が三人だと……いつ等、あの旧世紀から続く帝国主義者の組織、ガロウ・ランの洗脳兵か!）

一瞬、あまりの光景に両の臉を見開いたシオであった。

しかし、同僚から「子供が敵になるかもしれない」と事前情報を聞いていたために、シオは何とか精神の平静を保つことができた。

怒りと哀しみをないまぜにし、何とかこの酷い現実に向き合う。

そんなシオを無視し、三人の子供の中央に立つ身なりの良い男の子が、銃口をゆつくりと壇上に立ち尽くすマモローネへと向けていった。

(南無三！)

シオに、迷っている暇を持つことは許されなかった。

守護対象であるマモローネの命を未来へと繋げるため、その場から飛び退くのと同時に、その掌の電磁ナイフを男の子に向け投擲した！

一瞬の後、ダツ！と床を蹴る靴音が響き、続いてドスツ！と、少女の薄い胸を穿つ音が響いたのだった！

「なっ!?!」

なんと、洗脳兵の少女の一人が、電磁ナイフの射線に飛び込み、その身体を盾にして拳銃を持つ男の子を守ったのである。

投擲された電磁ナイフは、射線上の生体反応……すなわち、生体電気の反応を感知し、目標の脳か心臓へと引き寄せられる。何かか盾にならない限り、確実に相手を殺害する必殺の兵器であった。

それを、一介の幼い少女が自ら犠牲となり、肉の盾になって止めて見せたのである。

シオが驚愕で再び両の臉を見開き、短く叫ぶのも仕方のないことであった。

ドサッ！

少女の身体が床に落下する音が響く………即死だった。

パンツパンツパンツ!!!

その時、男の子が持つ拳銃から、再び三点バーストの銃声が響いた。発射された銃弾は、無慈悲に壇上のマモローネの豊かな胸部へと向かって、吸い込まれていった。

一瞬の後。

長身のモデル体型の女性の身体が、くの字に折れ曲がり、前方にドサツ……と倒れ込んだ。壇上に、鮮血が真円状に拡がっていく。

ゴーマ・シオという連邦情報局員は、守護の対象である一般市民、マモローネ・ノウヲという女性をまも護れなかったのだ。

「うおおおおおおおっつっ!!!」

猛るシオは雄叫びを上げ、一般人を装うために身に付けていた腰の工具箱から鉛筆と三角定規を引き抜いた。

鉛筆と三角定規と侮る事なかれ。

炭素の芯もプラスチック製の定規も、尖らせたものならば、情報局員にとっては容易く人を殺害できる凶器である。むしろ、情報局員にとつては、コロニーの区画ゲートで「危険物を持っているな」と見做されない優れた道具であつた。

対象が情報局員であると知る者でなければ、一体何者がどこにでもある道具を持つ者の行動を阻害し、押し留めるというのか？

尖る鉛筆と三角定規を持つシオは、地上を疾走するおおみちばしりという鳥にも似た動きで、残る男女の幼い洗脳兵との間合いを高速で詰めていった。

命散って。それでも残すべきもの。

精神を集中し、肉体のリミッターを解除してシオは駆けた。

目標は次の標的へと銃を向ける少年洗脳兵だ。

すでにマモローネがその犠牲になっているのだ。次の犠牲者を出す訳にはいかない。速攻で倒す。

だが、その前に、組み立てたリボルバー式拳銃を構えた少女兵が立ちはだかる。洗脳兵三人で分解して会場に持ち込み、人目を忍んで組み立てた一挺だった。

カッ！

「!? ああああっ!!!」

だが、シオは冷静に自身の持つギミックを開放した。

シオのゴマ塩頭の模様から、前方に強力な目潰し光が放たれたのだ。頭の星形の模様はファッションではなく、こういった仕込み武器なのであった。

少女は堪らず叫んで両の脛を押さえる。

「南無三ー!」

シオは優れた身体能力で少女に急接近し、すれ違いざま、がら空きになったその頸動

脈に、無慈悲に尖った鉛筆の芯を突き立てた。

子供と言えど、慈悲を与える訳にはいかなかった。

テロリストはもう一人いるのだ。少女一人に手間取っている暇はない。手間取れば、標的にされているパネリストの誰かが、また犠牲になってしまう。

「はっー」

崩れ落ちる少女の身体を踏み台にして、シオは銃器を構える少年に向かってジャンプした。

高い。

空中で移動する人物は、狙いを付ける側にしてみれば、標的には出来辛い。

それを利用してジャンプしたシオの狙いは、得意である強力な足技によって少年を蹴り飛ばし、撃たれる危険を消した後に、無慈悲に止めを刺すことであつた。

!?

パンツパンツパンツ!!!

空中に放たれる銃弾。

シオの行動に気付いた少年兵が、自衛のために急遽カウンターで放った弾丸だつた。しかし、空中で移動するシオの身体を捉えることは不可能だつた。

銃器の熟練度と、身体能力が不足していた。

(せめて安らかに)

勝利を確信したシオは、そんな思いを込め、少年に冷酷な足技を放つのだった。



とある連邦軍旗下の、実験コロニーの一区角。

そこが、地球連邦軍情報省の、地球圏各サイド支部を統括する総本部であった。

その科学部門と、情報統括を兼任する部署に、三つの人影があった。

一人は科学者で、人間工学に基づいた強化服や各種装備の開発を担当する博士。もう

一人は、同じく科学者で流体(物質、生物の液体の動きを含む)力学を担当する助手。

そして、二人のボディーガード兼お茶汲みのカパル・リース女氏である。

なお、博士と助手は、テロリストの活動が各サイドに拡大したあたりを受け、各部隊との通信士も兼務していた。

現在の地球連邦軍諜報部には、人的資源のリソースが不足しているのである。

「博士、サイド6の強襲艦からレーザー通信受信しました。情報解凍します」

「助手、状況は？」

「少々お待ちください………博士、先程、サイド6のパネルディスカッションの会場で

のテロ鎮圧が終了した模様です」

「そうですか。シオ隊員に怪我は？ 会場の観客の身柄は無事でしたか？ 負傷者や死者の数は？」

「ええつと、シオ隊員は健在。テロリストの実行犯四名は制圧済み。全員死亡です。パネリストの一人、マモローネ・ノウヲ女氏もまた、死亡した模様」

「そうですが。以外に死者が少なかつたですね。死亡したマモローネ・ノウヲ女子の御家族には、お悔やみ申し上げます……それで何故、彼女だけが犠牲に？」

「そう助手に質問し、胸元で十字を切る博士。」

「事務的な報告を聞くだけではなく、何故か、それだけは知っておくべき気がしたのだ。『囿』になったのです」

「囿？」

「はい。火器を持つテロリストのヘイトが他のパネリストや司会進行役に向かないように、敢えて棒立ちになって、テロリストのヘイトを自分に向け続けたのです」

「そうですね……立派な責任感をお持ちの女性だったのですね……この業界では、良い人から先に死んでいく……それが当然のこととはいえ、気が滅入ります」

「はい」

「博士と助手は、共に自分の胸元で十字を切り、マモローネ・ノウヲ女氏の魂が安らか

であらんことを願ひ、祈るのだった。

「お茶を入れますねえ」

そんな祈りの時間を終えた二人に、茶器セットを携えたカパルアが話しかけてきた。頭脳労働で疲れた博士と助手に、カロリーと糖分を定期的に摂取させる措置を施すためであり、三人によるちよつとした毎日のセレモニー。そんな日々の日課のためであった。

コポポポツ。

早速、気温の安定したコロニー内部では珍しい、ファーをあしらったメイド服姿のカパルアがお茶を入れ始める。

湯気が立ち、茶器の辺りが白く染まる。

カパルアは、テーブルワゴンに乗せられた二人用のカップに琥珀色の液体を注ぎながら注いでいく。

それより先に、自分用に用意していたティーカップにお茶を注いでいく。あらかじめ適量のミルクが注がれていた大きめのカップへと、地球製茶葉で淹れられた琥珀色の液体がなみなみと注がれ、混ざり合っていた。

ベーシックなミルクティーだ。

「お二人には、今すぐマジヨラムティーを淹れますねえ」

コポコポツ：コポコポコポツ。

続いて淹れられるマジヨラムティー。鎮静、対不安効果のある茶葉である。三人が居る室内に新たな香りが立ち込め、二種類のそれが混ざり合って充満していった。

「ありがとう、カパルアさん」

「ありがとうございます」

「どうぞ致しましてえ」

感謝の言葉を述べる博士と助手に、カパルアがニコニコと笑顔を浮かべてのんきな受け答えをする。ついでに可愛くカーテシーでお辞儀をした。

激務の合間に、今だけは楽しいお茶の時間にしようという趣向だった。

一方、職人芸級のお茶出しの腕前に謝礼を言った博士と助手は、早速、お茶を口に含み、それを飲み干すとフウツと息を吐いた。

何だかじんわり心が落ち着いてくる。そう二人は感じるのだった。

「鎮静効果のあるマジヨラムティーとは乙なのです。とても美味しゅう御座いました」

「同じく。カパルアさんが淹れてくれるお茶には、いつもお世話になっております」

「どうぞ致しましてえ。お菓子も用意済みですよ。どうぞ遠慮せずに召し上がってくださいい」

そう言つて、カパルアはカラフルなお菓子の乗ったお皿を進める。

「ほう、マカロンですか。では、御言葉に甘えて……」

「良い脳の栄養になるのです。では遠慮なく……」

「……いただきます」

笑顔を絶やさないカパルアに、そうデュオで応じる二人。お茶請けに出せれたカラフルなマカロンを笑顔になつて頂き、激務で失われたカロリーと糖分を補給するのであった。

そんな、三人のやさしい時間が暫しの間、過ぎ去つていく。

「ごちそうさまなのです。やはり美味しいものをいただくのは乙なのです」

「同じくなのです」

「おそまつさまあ」

そうして、再び職務を再開する博士と助手。カパルアは、自分のお茶を味わい終える

と、いそいそと簡単な後片付けをし、その場に留まった。二人の助手的な役割を演じるためだ。

「それでは、助手。初めからの経緯を説明してください。エルラン大佐に上げる報告書を、我々で用意しておきましょう。返ってくるシオ隊員はお疲れでしょうからね」

「了解しました、博士」

「私も一応、聞いておきますね」

「では、カパルアさんも……事の起こりは、サイド3の流通部門を統括なさっているザビ家のみなさんの通報からです。集めた分離主義者の一部が、このジオン共和国建国の大事な時期に、暴走してテロ活動を続けている。そんなヤバイ連中が、我々ザビ家と一体だと思われては困る。奴等ガロウ・ランの情報は提供するからそちらで始末してくれと、我々、連邦軍情報省に接触してきた。それが始まりです」

「助手、そこは、我々も十分に承知しています。建国前にテロリストがやり過ぎて、共和国建設計画自体、お流れになつては元も子もありません。これまでの準備のすべてが無駄になつてしまいます」

「ええ、その通りです。先方のサスロ・ザビ氏もそう言っていました」

「トキコさんが持ち帰った映像、お出ししますかあ」

そこで、カパルアが口を挿む。同僚のエンジニアト、トキコ・モモセが持ち帰ったサロ口の映像があるのだ。ちなみに、トキコ・モモセは、地球圏のコロニーを自家用のクルーザーで飛び回る身で、場合によってサイド3にも、こうして訪れるのだった。

「お願ひします、カパルアさん」

「妥当なタイミングなのです。了承します」

「スイツチ、入れますねえ」

ブウウン………という駆動音と共に、スクリーンに青年の姿が浮かび上がる。傍らのトキコと共に、高価そうな趣味の良いスーツを纏った青年が、映った画面を占拠していた。

「………そう。国家とは建国するだけでは意味はないのです。建国だけなら有象無象の国家が成し遂げたことだ。そして、有象無象は何も生み出せず、未来に何も残せないままに滅びていったのです。国家の توسط、もつとも重要なことは独自の文化を残し得るのだ。それを生み出してこそ、一流の国家として後世に名を残したと言えるのです」

「確かに。宇宙に出た人類の多くは、平等という美名の下、地球に残る文化の多くを喪失してしまいました。そんな文化を新たに生み出せる環境を整備することができてこそ、サイド3に新国家を建設する意義がある。そう私も思います。」

「ええ。新国家がスペースノイドのはみ出し者を隔離するだけの国家であつて良いは

ずがない。だからこそ、ダイクン氏率いる宇宙での新国家は、それを生み出しうる共和国でなければならぬのです。旧世紀に存在し、滅びていった帝国主義国家では、それを成し遂げられないのですから……」

「何か心配事が？」

「…お恥ずかしい話ですが、父デギンや私の兄弟の多くは、ダイクン氏の建国後、その後継となつて帝国主義国家を生み出す野望を持っているのです。帝国主義国家など、滅びることが運命だと決まっているというのに……」

男性は、柄にもなく熱心に自らの内にある本心を吐露していた。

なぜなら、男には時に身内でない者だからこそ明かせる本心……内に抱え、身内に言えないこと……があるからだつた。

身内ではない他人、連邦軍情報局員であるトキコ・モモセだからこそ、ザビ家の青年サス口は、新国家を帝国主義にはさせたくないという本心を、忌憚なく吐露できたのである。

神秘主義過激派集団ガロウ・ラン

「……それが、皇国と帝国の違いなのです。シヨウトクタイシは「和を以て貴しとなす」と、民草の上から下を遍く諭し、皇室を築き上げました。その結果、ヤープンは易姓革命もなく発展を続けました。もちろん、帝国主義に回帰しようとした馬鹿な奸臣の言葉を、時のテンノーが聞き入れてしまい、滅びかけた時期もありましたが……ね」

「一方、皇国の意味を理解しようとせず、帝国の道を延々と歩み続けたシーナは、易姓革命を約二千年の間続けました。結果、各民族が中原の覇権と皇帝の座を巡って延々と殺し合い、宇宙世紀へと移行するまで、政治的な停滞を改善できなかったのです」

「それは、文化力の差が歴然となったことから理解できます。ヤープンは、他民族から受け取った文化、風俗を受け入れ、独自にアレンジし、世界に冠たる独自の文化、文明を生み出しました。それは、宇宙世紀となった今日まで続いています。」

「一方、シーナは易姓革命の度に前政権の文化を、悪しきものとして破棄してしまつたのです。これでは、時代を経て劣つていた他の文化圏に先を越され、追い抜かれてしまうのも無理はない。始皇帝が中原を平定した時代へと逆戻りしてしまうのです。二十世紀となり看板を共産主義に書き換えた後も、中身は中華思想、経済、文化はヤープン

の劣化した複製といった感じだね」

「その歴史の教訓から、私は新共和国が帝国主義に陥つてはならないと考えているのです」

そこまで一気に語り終え、サスロ・ザビは両肘をつく机の上で、フウツと息を吐いた。ザビ家と無関係であるトキコ・モモセに、普段は胸の内に秘めている想いを語ることで、サスロは良いストレス解消ができたようだ。

そんなサスロに、トキコが近付き話しかける素振りを見せる。

それまで彼女は、部屋の隅の椅子に座り、長話をずっと聞き続けていたのだ

「……………含蓄あるお話でした。流石はザビ家一党で、もつともバランスの取れていると称されるMr. サスロです。人類の互恵の意味、民主、共和主義の意味を的確に捉えていると感じます。ある意味、ダイクン氏の語るニュータイプとは、Mr. サスロのよくな方なのではと、私は思います」

「それは…勿体ない評価ですな。ですが、私は所詮、一般的なオールドタイプですよ。まあ、旧世紀の政治知識だけは一人前と自負していますが」

「ふふ…それはご謙遜だと感じます。それに、オールドタイプはニュータイプ誕生のための土壌という話をよく耳にします。オールドタイプの民衆を良き方向へと導いてこそ、結果的に人類をニュータイプへと昇華させる正しい道なのでは？ Mr. サスロ

は、ジオン・ズム・ダイクン氏と共に、それをなさろうとしているのでしょうか？」

「いや……………そう言って頂けると幸いです。救われますよ」

トキコの言葉に感じ入ったサスロは、座っていた椅子から立ち上がると、姿勢を正して、トキコへと向け右手を差し出して来た。

トキコは、そんなサスロの右手を自分の右手で握り返し、がっしりと握手するのだった。

一組の男女はその立場の違いを越え、同じ認識を持つ者同士、一時的とはいえ友情で結ばれたのだった。

「さて、それでは本題に入ります。奴等…ガロウ・ランは、先程渡した資料の通りの連中ですよ。反地球連邦運動から始まり、オカルトに走ったテロリスト集団なのです」

トキコとの握手を終えたサスロが、本題を語り出した。

この連中だけは、今の内に、何としても排除しなければならぬ。

それが、この日サスロが連邦軍情報省と接触を持つことにした直接の理由だった。

「連中の今の指導者の目的は、この地球圏全体を一旦破壊することです。そうしなければ、自分たちの目的は何時まで待っても達成されない。連中はそう思って行動してい

ます」

「では、その方法というものが……」

「そう。もはや正気とも思えぬオカルト染みた手段なのです！」

「…」

「その資料を読んで、貴女が無言になるのも理解できません。人類の悪の想念を「器」となる依代に憑依させ、ジオン共和国の指導者になったその者に、地球圏を破壊させようなどと！」

資料片手に無言のトキコに、サスロはその計画の内容を話し出した。テロリストの手段が夢物語のようなオカルトであった……それとは別の理由で起こっているような態度である。

「まさか、その「器」を！ 依代というべき存在を！ 私の家族、ザビ家の人間に定めるなど、どうかしています！ 正気ではないのですよ！ このガロウ・ランという連中は！」

各サイドのコロニーに潜む者たち

「……こちらが得た情報によりますと、主犯であるガロウ・ランのリーダー、イギー・カッグの他に、連邦で秘密研究に従事していたプロフェッサーQⅡルルが手を結んでいるとのことです。ロシユーの旧ソ連時代での研究を復活させたのです」

「その研究は……ミニノフスキー粒子影響下での新型通信の実証実験ですね」

「ええ。その情報をダイクン氏へと故意に流し、興味を持たせようとしています。ミノフスキー粒子の電波障害を克服すれば、レーザー光の有線放送とは違った形で地球圏全土へと演説することも可能です。ダイクン氏は、多くのスペースノイドに自らの意思を伝えることができるのです」

「そうして、ダイクン氏へと近付いて暗殺ですか」

「その可能性は大きい。そうなる前に、ガロウ・ランのような輩は、排除しなければならぬの……」

ブツ！

そこで映像は途切れた。博士がリモコンのスイッチを切ったのである。

「助手！ カパルアさん！」

「はい、博士」

「何〜?」

「報告書の作成は一時棚上げです。我々も出撃しましょう。やはり、嫌な予感がします!」

リモコンを持って立ち上がった博士が、コロニー外の指差して言った。情報省の特務艦が係留されている方向だ。博士は、そこを指すべく、白衣を翻してダツと走り出す。リモコンはクツシヨンの上へと投げ捨てられ、コントロール良くポスンツとクツシヨンの上に落ちた。

「それは良い考えです。続きます」

「解つた、エルラン少佐に行つてくるつて報告するんだね〜」

シユンツと音を立てて開いた自動ドアを抜け、博士が隣のフロアへと向かい走つていった。博士を追つた助手、端末で出動を知らせるカパルアも後に続く。

三人が向かっているのは、コロニー外の船渠である。

現在、地球連邦情報省の宇宙総司令部が存在する場所は、宇宙引つ越し公社が権利を持つ、あるサイドの外れの宙域にある旧式コロニーである。そのため、様々な役目を持つ船を停泊させる船渠ドックが複数、コロニーの近くに存在し、博士たちはその一つ、ゴコク(畜生界) エリアへと向かつていた。

特務艦オキツネサマが停泊中なのである。

「キュウシユウ（修羅界）エリアで特務艦オキツネサマに、クロコマ、キツチヨウ、トウテツを搭載するのです。敵の本拠地のあるサイド2へと向かいましょう」

「つまり、シオ隊員と合流するんですね。艦長のギーン・フォックスに連絡。モビル・ドロイドの特殊OSオオカミ0、カワウソ0、オオワシ0起動させます」

「エルラン少佐から出撃許可下りたんだねえ」

通路途中にある武器庫へと次々と入り込み、コスモ・レンジャー用ノーマルスーツを着込む三人。地球連邦軍情報省の誇る栄光のカーバンクルチームの装備、けものの意匠が入ったヘルメットをそれぞれに装備する。

博士、助手、カパルアの三人は、その合間に、5メートル級のモビル・ドロイド三機を起動させたり、上司への承認を求めたりし、出撃準備を順調に整えていった。

「博士、オキツネサマにはレイダー装備とシューター装備が揃っています。装備の内訳はどうしましょう？」

「レイダー装備は私が担当します。レーザーポインターガンと、僚艦への攻撃要請は任せて」

「では、私はドロイドの操作に集中します」

「じゃあ、カパルアはシューター装備なんだねえ。狙撃兵は任せてねえ」

三人の話題の上った、博士が担当するコスモ・レイダーとは、レーザーポインターガ
ンと有線で繋がったランドセルを有する兵科である。

ランドセルには、後方の僚艦へとレーザー通信で敵の正確な位置を知らせる機能が標
準装備されているのだ。

これは、ミノフスキー粒子の電波障害下でも、後方と連携してテロリスト集団を攻撃
することが可能な装備で、テロリストとの交戦を想定して、情報省の隊員へと先行して
配備されたものである。

次に、助手のレンジャー装備とは、所謂、空間騎兵のベシツクなものである。

今回は前線に出て、戦闘用ドロイド、三機の操作に徹する。

当然、安全のためにプラズマ・スローター044式（宇宙用プラズマ散弾銃）、ガンレ
イピア（ビームサーベルとは違う技術による光線剣）は形態している。

最後に、カパルアが担当するのはコスモ・シューター。コスモ・レイダーと連携し、敵
の位置を知らせて貰い、後方から狙撃をする兵科である。

暗黒の宇宙空間のデブリや建築物の影に潜み、冷徹に目標を狙撃する。

カパルアは、狙撃用アンチ・マテリアル・ライフル以外にも、敵の起動兵器の動きを
封じるためのトリモチバズーカも持ち出し、背中に背負った。これは、宇宙船、コロニー
には補修材として使用されている代物だ。

「二人共、理解していると思いますが、相手に情けは無用です。敵に奇妙な情けをかけて、仲間が損耗することがないようにお願いします」

「それは、理解しているねえ。敵は、ニュータイプの世を現世に齎そうとしているジョン・ズム・ダイクンまで殺そうとしている危険な集団なんだねえ」

「そうです。ダイクン氏は言っています。真にニュータイプの世を望むなら、オールドタイプによる平和な世界こそ守るべきだと」

「突然変異的に誕生した人類の上位種は、多数のオールドタイプに排斥されるんだねえ。だから、多数であるオールドタイプが平和な世の中を継続させて、自然とニュータイプが誕生して、受け入れられる土壌を生み出さなければならいんだねえ」

「そうして、始めてニュータイプの世界が実現する。確かに、ダイクン氏はそう自分のニュータイプ論の中で言っていましたね」

助手とカパルアの話聞き、博士がうんうんと肯く。

「ですから、その邪魔をするテロリストは、我々情報省の隊員が、この手を汚しても排除しなければならぬ」

「自分の手を汚す覚悟はできているねえ」

「助手もカパルアさんも立派ですね。私も覚悟を決めるのです……………昔の賢者は言っ

ていました。天（宇宙）は地（星）にありて、地は天にあり。星は宇宙のエッセンスが重力に引かれて集まった縮図。そこから生まれ出た命と想念は、宇宙の意思の欠片である」と

「だから、多くの良き想念が地球圏に満ち、多くの意思が平和な世界を齎すニュータイプの世を望むなら、それは実現して天国となり、逆に悪しき人々が多数となり、悪の想念が地球圏に満ちれば、人の世は地獄と化す……ダイクンのニュータイプ論の一節に、引用されていた旧世紀の賢者の言葉です」

「ガロウ・ランとかいう連中は、それを人為的に操作して、地球圏を、人の世を、一度滅ぼそうとしているんだねえ」

「ええ。ですが、私たちがそれを阻止します。急ぎましょう二人共」

「任せてください」

「任せてねえ」

多くの準備を終えた三人は、仕上げとして互いに決意を語り合い、テンションを高め合う。すでに情報省特殊部隊用の通路を抜け、三人は船渠付近へとたどり着いていた。

そんな三人が移動途中の通路に並走する形で、発進した特務艦の姿が見えた。

「こちら、オキツネサマ艦長ギーン・フォックス。発進準備は完了。ばすてきつて訳にはいかないが、順調な旅を約束するよ。さあ、三人とも乗り込んでくれ。まずはキュウ

シユウエリアに向かう」

ゴコクエリアまでやって来た三人に、オキツネサマのギーンから通信が入った。

「了解です」

そう応えた博士は、近くにあつた四重エアロックを指差し、三人はそちらへと向かった。四重エアロックは、外部で散布されるミノフスキー粒子を、極力通路へと入れない仕組みである。ちよつと出入りが面倒くさい。

「そう言えば、カパルアさん」

第一の扉が開き、三人がその先に進むと、博士がカパルアに話掛けた。暇な時間を使つた航海のミーティングである。

「何〜?」

博士の呼び掛けに? マークを浮かべるカパルア。

「じつは、オキツネサマにはミノフスキー・フラッグという試作の装置を取り付けてあります。それでやってもらいたいことがあります」

「それって、一体〜?」

「イヨネスコ炉のミノフスキー・フィールドの応用で、ビームの絵を描ける装置です。カパルアさんは絵がお上手でしょう? それを掲げて航海し、先行しているシオ隊員たちが乗る特務艦に気付いてもらおうと思つています。サイド2の手前で、航路は交差し

ているはずですので」

「なるほど。ミノフスキー粒子の影響下では目視は大事だねえ。艦隊を集結させる起点にもなる、便利だね」

「元々、そのための試作装置なんです。今回は不測の事態なので、別の使い方ができるかテストしてみるのです」

「わかった。やってみる。紅茶の絵で良い？」

「お任せするのです」

そこまで話を打ち切り、三人は宇宙空間へと飛び出した。やっと四重のエアロックの最後の扉が、順序良く開いたのだ。

宇宙空間へと飛び出すと、オキツネサマの外装部が開きエアロックが露出していた。

まず、カパルアがそこに取り付き、伸ばした手に助手が。そして、助手が伸ばした手に博士が掴まり、三人はオキツネサマ内部へと入り込む。

「こちらカーバンクルチーム、全員乗艦しました」

「了解。まずはキュウシュウエリアに向かう。発進！」

こうして、博士はじめ、助手、カパルアの三人も、戦場へと向かうのだった。

滅びの意思と共にある者たち

「……………」から。あの連邦に潜む獅子身中の虫からの連絡だ。情報省の特殊部隊が来るぞ。」

「規模は？」

「サイド3以外の各サイドに一中隊規模（ダンバー数に合致する150〜200）が同時にだそうだ。前衛はドロイド部隊。人命尊重のお優しい連中さ」

「サイド3は？」

「ザビ家のサスロの私兵が主力らしい」

「なるほどな。あの男は、父デギンや兄弟たちのやり方だけでは、より良い未来は掴み取れんという考えだ。我々の内情をしつこく探っていたのも彼奴か」

「だろうな。すぐ各サイドの信者たちに戦闘準備をさせる。突撃用クルーザー、ハンペン、コーヒーも出すぞ」

「武装を施したゲケロロの量産型を使えば、コスモ・フェンサー部隊とも互角にやり合えると聞いている。そこまでする必要はあるのか？」

「ああ。今更信者を逃がして再起を図っても意味はあるまい？ すべての戦力を投入

する。こちらはハーゴーン隊を出すぞ。ＱⅡルルよ。お前はあれ等を……ベリーリアル、パズブル。それに、アートラストも出撃させる」

「ほう。それは面白い。あの一つ目の巨人型マン・マシーンもか。良いだろう。八割がたは完成している。いよいよサイ・コミュニケーションの実戦使用という訳か。良い実験になりそうだ」

別々のサイドで、ガロウ・ランの二大幹部、イギー・カッグとＱⅡルルがスクリーン越しに会話をしていた。

ミノフスキー粒子の影響を排除できる、レーザー通信での話し合いであった。

その内容は、何と、秘密裏に知りえた自分たちへの襲撃情報に対する対抗手段であった。

地球連邦からの分離主義組織を母体とする彼等ガロウ・ランは、地球連邦政府内部にも、密かに内通者を浸透させていた。

その内通情報を受け、こうして情報省特殊部隊への対抗処置を話し合っているのだ。

「クク…時間が味方したな。ジオン・ズム・ダイクンの独立運動に呼応し、連邦軍によつて密かに設計されたゲケロロピースト。そして、独自に完成させたハーゴーン隊の力を見せてくれる……新たな闘争の始まりだ！ 連邦の平和主義者共に目にも見せてくれる！」

「その通り。この戦いが人類の闘争本能を呼び覚まし、怒り、憎しみと言った想念が寄り集まって、宇宙世紀を滅びへと誘うのだ！」

フハハハハッ！、クハハハハッ！と哄笑し、イギー・カツグとQⅡルルは、常人には決して理解できない理屈を言い合い、スクリーン越しに悪意に満ちたその表情を晒し合う。

とはいえ、完全に狂っているとしか思えない二人の言葉にも、聞き逃せない内容が含まれていた。

昨今のサイド3を中心にしたスペースノイドの独立運動の最中、各軍需産業は戦争抑止を名目として、連邦政府に対してロビー活動を活発化させていた。

安全保障の市場がそこに拡がっているのである。

そのチャンスを逃す武器商人たちではない。

その過程で、密かに様々な地球圏用の兵器が生み出され、軍に対し強力なプレゼンテーションがなされていた。

民間で開発されていた小型のコロニー建設用コスモ・ワーカー、ゲケロロ。その発展型であるゲケロロビーストも、その一つである。

本来、蛙型で可愛らしくデIFOオルメされたその機体は、四つ足の吸盤でコロニー隔壁にくっつきながら作業を可能とする、旧世界で言えばビートル車のような、愛すべき

国民車的な存在であった。

しかし、自立起動し、背部にジュエル型の対人用レーザーを搭載されたその機体は、コロニー付近での戦闘用に特化、強化発展させられ、見るも無残な姿へと変えられていた。まさに人間に襲い掛かる、醜悪なビーストである。

ガロウ・ランは、その改造用設計図を密かに入手し、自分たちの手駒として量産していた。

ゲケロロは、その汎用性によって各サイドで大量に使用されており、躯体だけなら大量に手に入れることが可能だったのである。

また、8メートル級の巨人型兵器三体は、ガロウ・ランの大規模テロ用に開発されたもので、現実にコロニーの隔壁を突き破り、一般住人の虐殺を可能にする破壊兵器であった。

モビルスーツがまだ開発されていないこの時期には、明らかにオーバースペックの兵器群である。

この三体は、地球圏外の小惑星からの資源調達を名目に、QⅡルルが設計し、ガロウ・ランの息の掛かったある軍需産業のダムミー会社が製造したものであった。

本来、地球連邦政府のものであった技術を、連邦の研究施設を出奔同然に飛び出したQⅡルルが、勝手に使用していたのである。

本来は公共の利益のために使われるはずの技術を、QⅡルルはじめガロウ・ランというテロ組織が、私物化、独占した結果であった。

イギーとQは、この状況で、それ等の兵器を解き放とうとしているのであった。

すべては……………

「ダイクンを始末し、そのトリガーにできんのは痛い、もはや計画は走り出している」

「その通り。月の裏側、サイド3という陰気が集まる最悪のエナジースポットに、分離主義者と宇宙世紀の世に対応できん者たちを集めてしまった。その時点で、地球圏は緩やかに崩壊へと向かっている」

「この世界の終焉を望む者共。その存在自体が、この地球圏が向かうベクトルを、破壊の方向…死道へと向かわせるのだ」

「そう。我々はその後押しをするだけ。引金を引くのは誰でも良いのだ。もちろん、それが独裁者であることが望ましいが。フフ…何者かがその引金を引くことで、事態は一気に加速する」

「クハハツ……………今、我等がなすべき処置は、その崩壊規模をより一層深刻にする仕掛けを施すこと」

「たとえこの身がこれからの戦いで滅びようとも…な」

「我等が怒り、絶望。それらの想念も、すべて死道への生贄となるだろう」

「では、いずれ地獄で会おう！ 簡単には死ぬなよ！」

「無論！ 一人でも多くの生贄を、我等が死道へと捧げてくれよう！」

「すべては！ 破壊の意思を！ この地球圏へと満たすために!!!」

……そんな狂った理由のためであった。

イギーとQは二重奏でそう叫び、別々のサイドとサイドを結ぶレーザー通信を終えた。

ブツツ！

停止音と共にスクリーンが消えると同時に、イギーとQはスクリーンの前で身を翻し、それぞれ担当する戦場へと向かって行った。

無論、件の三次元複合魔方阵を起動してである。

その後方から、胡乱な雰囲気の方が続く。

その者たちは、例外なく邪悪なる意志に取り付かれ、ガロウ・ランの走狗となった者共であった。

総力戦Ⅰ サイド4での待ち伏せ。

「……………ぜんぜんわからん」

コスモ・フエンサー隊の部隊長アムール・トローラーには、目標であるガロウ・ランの信者たち…シンフレの行動理念がまったく理解できなかった。

圧倒的な勢力を誇る地球連邦に、僅かな戦力で徹底抗戦をする気にいる。

そんな彼等のは内心は、正常な一般人の真理とはあまりに遠すぎ、実直な性格のアムールには窺い知ることがまったく不可能だった。

まあ、シンフレの行動理念は、はなから狂気の沙汰である。

で、あるからして、アムールの感想は当然といえば当然だった。

そもそも、近年発表されたあるデータによれば、ガロウ・ランの母体である地球連邦からの分離主義思想を支持する層は、人類全体の2.6%にも満たないとのことだ。

その中にあつても、ガロウ・ランの信者たちはさらに少数派閥であり、とても連邦に對抗できる規模ではない。

それでも、なお信者であるシンフレたちは戦い続けると言う。

そうする理由が、冗談抜きでアムール・トローラーには理解できない。

とはいえ、「ぜんぜんわからん」からと言って、アムールはテロを繰り返すシンフレタ
ちを頼っておく訳にはいかない。

彼女が身に纏う、対レーザーコーティングを施されたパワードスーツ、パイルバン
カー付きシールド、対物ベイオネットといった特殊装備は、言ってしまうえばそんな狂人
と戦い抜き、制圧するための装備である。

それ等を身に纏うアムールには、様々な歪んだ思想を持ち、地球連邦体制に弓退くテ
ロリストたちに立ち向かう責任がある。

嫌だからといって逃げ出せはしないのだ。

(……………今は目の前の任務に集中しよう。責任を果たすんだ)

仕事だ、仕事。

そう考えたアムールは、ここ(サイド4にあるコロニーの一つ)の、内部、周辺宙域
の状況を確認する。

現在、このコロニーと周辺宙域にある生産プラント群は、連邦電子操作部隊によつて
密かに制御下に置かれている。

シンフレ拠点制圧作戦開始と同時に、各区画と敵拠点の周辺出入りをロック。
限られた限定戦場を構築し、そこでシンフレたちを制圧する手筈であるからだ。

(ひさびさの大取物。失敗してなるものかー がんばれ! 私!)

そう考えてテンションを上げ、アムールは準備の最終チェックを開始する。

「トローラー隊、突入準備。ドロイドを前面に押し立て制圧する。各班、マーゲイ・ペパプロデューズ、状況は？」

「こちら第2班、メンテナンスハッチ側、準備完了」

「こちら第3班、居住区画側、準備完了。パンジャン・ドライブも出せます」

「特務艦セイリユウ艦長セイ・ウチだ。こちら支援体制はできている。宇宙空間に逃げ出した連中はこちらで制圧する」

「コロニーは無事、私の制御下よ。裏切り者がいて作戦が漏れ出ていないかぎり、失敗はないわ。何時でも行けるわよ」

「こちら第1班アムール・トローラー、了解だ……マーゲイ、フラグみたいな物言いはヤメロ。こちらは電子戦はぜんぜんわかん。あんただけが頼りだ。とにかく、作戦通りやってくれ」

「解ってるわ」

対電子戦用に開発されたノートパソコン（ミノフスキー粒子下でも有線なら使用可能）画面を見据えて応じるマーゲイ。

アムールは、そんな様子の彼女に了解を取ると、第1班の部下たちに「やるぞ」と肯いて見せた。コスモ・フェンサー隊各班長たち、セイリユウ艦長も、頭部ヘルメットの

通信画面越しにアムールへと肯き返す。

サイド4担当のコスモ・フェンサー隊の準備は、こうして滞りなく整った。
後は突入を強行するのみ。

「では、頼む」

「了解」

アムールのゴーサインを受け、ENTERキーを押すマーゲイ。各区画をロック、逃げ場所を限定して、一方的なテロリストの制圧を開始……………

ビー、ビー、ビー、ビー、ビー、ビー、
……………できなかつた。

ビー、ビー、ビー、ビー、ビー、
ウウウウーウウウウー!!!! ウウウウーウウウウー!!!!

「何だ!?!」

「!? やられたっ!!!」

「何事だ!」

突然鳴り出したノートパソコンの警告音とコロニー内部の拡声器。続くマーゲイの叫びに、アムールが何事と聞き返す。

「このコロニーのセキュリティ、私たちがやって来るずっと以前にウイルスに感染

されてた！ 特定のトリガーで発動するタイプ！ 敵が襲撃を警戒して事前準備していたみたい！ 今、動き出した敵ウィルスの制圧に対抗してる！」

パソコンのノートキーボードへとブラインドタッチで指を激しく打ち付けるマーゲイ。各種対ウィルスアプリを総動員して、敵ウィルスアプリを押し返しているのだった。

「よし！ コロニー外部、メンテナンスハッチのカメラ制圧！ 他の制御も取返し……ああ！ 敵らしきクルーザーから、敵の起動兵器多数！ ！？ これって、ゲケロロ???

メンテナンスハッチから入ってくる！ こっちにも来るよ！」

「!? 待ち伏せされたか！ 各班戦闘開始！ アルマ！ 制圧用ドロイドとパンジャン・ドライブ全機起動！」

「でっ、ですが隊長!? パンジャン・ドライブはコロニーへの被害が！」

第3班の班長アルマ・ジローにそう支持するアムール。

戦闘の主導権を敵に奪われた以上、このコロニー内外は戦場になる。

シンフレの狂信者たち程なく立ち向かってくるだろう。連中は狂信者だ。死を恐れずに立ち向かってくるだろうし、コロニーへの被害も、アルマのように気にすることもあるまい。

こちらに迷っている暇はない。すべての装備を使い迎え撃つ。たとえコロニーへの

被害が甚大になってもだ。

無論、使用すると被害の大きい、突撃自爆用ドロイド、パンジャン・ドライブも使用しなければならぬ。

非人道的兵器だからと、勿体ぶっている場合ではない。生き残らなば、フェンサー隊が次の段階に我が身を到らせることは不可能だ。

（まずは生き残る！）

不利な状況に陥つても、素早く自らの精神を立て直し、自分と仲間たちの戦闘に注力するアムール。伊達にコスモ・フェンサー隊の隊長をしている訳ではないのだ。

「みんな、まず自分が生き残ることを考えろ！ 話はそれからだ！ マーゲイ！ 君は電子制圧を頼む！」

「了解！ みんなも生き残つてよ！」

オオオオ！と、雄叫びを上げ、戦闘態勢を取る第1班の面々。

それぞれ、アムールトラの意匠が施されたヘルメットのバイザーを下ろす。

そのヘルメット内部のセンサーには、近付いてくるゲケロロビーストの反応が複数捕捉されていた。

「先制攻撃！ 全弾撃ちまくれ！ 第一射後にブースター始動！ 突っ込むぞ！」

潤沢にある補給物資を頼みに、敵を目視する前に射撃を開始する第1班。

こうして、地球連邦軍情報省特務隊とガロウ・ランの信者たちとの戦闘は、ここサイド4から始まった。

生贄を求める兵器

コスモ・フェンサーチームが、敵ゲケロロビーストの第一波を凌いだ後、サイド4コロニー内での闘いは凄惨さを極めていった。

「第47、48隔壁閉鎖します！ 第34ブロックに敵モビルワーカー移動開始です！」

「了解！ パンジャン・ドライブ自爆モードで突撃させます！」

「別ルートからの敵は、俺たち第2班に任せろ！」

「各ブロックの電子制御は、我々ペンギンチームが制圧、維持します」

コロニーのメンテナンスハッチから入り込んできたゲケロロビーストに対しては、マーゲイのペンギンアプリ（電脳空間内部）と、フェンサー隊第2、第3班が協力して迎撃に当たり。

「隊長！ 実態弾の威力が半減されています！ 我々のレーザーライフルでも出力が足りません！ 連中のアーマーは普通じゃありません！」

「対レーザーマントとワードスーツとアーマーを兼ねた装備か………ライフルに着剣！ グレネードもだ！」

「相手が人間でも容赦は無用ってことですか………やってやりますよ！」

「おおっ!!!」

「一旦、市街側に後退する！　そこで信者共を待ち受ける！　一斉射後、引くぞー！」

別行動のアムール・トローラー旗下の第1班は、敵本拠から溢れ出てきたガロウ・ランの狂信者「シンフレ」たちの迎撃に当たっていた。

サイド4のコスモ・フェンサーチームは、冷静に二正面作戦で敵集団を個別に迎撃。何とか二方向から半包围される危機を脱し、戦闘を継続していた。

しかし、新たな敵の増援、独自開発の装備に身を包んだ狂信者たちは厄介だった。

ローブにマント姿を想起させる装備は冗談抜きにハイスペックで、フェンサーチームの遠距離攻撃を、すべてではないがある程度無効化した。

作戦面でも、数だけを頼み突っ込んでくる………そんな無謀な冒険は犯さずに弾幕を貼りながら間合いを詰め、こちら側を着実に追い詰めようとしてくる。

シンフレは、戦闘面において凡庸ではなく、とにかく強い敵集団であった。

「こちらが引いたと見せて追い掛けてきたところを逆襲する。近接射撃も視野に入れて十分に引き付けて！」

コーキング剤のトリモチとコロニー資材を用いて、簡易的なトーチカを施設する部下にそう指示し、コスモ・フェンサー隊の隊長アムール・トローラーは自らも射撃準備を整

えた。

そんなアムール・トローラーの近くで、電子戦を担当していたマーゲイが顔色を変える。「マスター、コロニー外部で敵の増援です。ミノフスキー粒子の増大を確認しました」配下の人工知能アプリから報告があり、制圧していた外部カメラの映像が送られてきたからだ。手持ちのノートパソコンの画像にコロニー外が映し出される。

「!? アムール隊長! 別のクルーザーから大型兵器出現! 数は3! 2体が特務艦へ! 1体がこちらに来る! 人:いえ、巨人型です! 大きさは約8メートル!」
「何?!」

マーゲイが、コロニー外部カメラの映像を見て叫んだ。その叫びを聞いて、アムールの顔が歪んだ。

(ここ)までテロの準備が進んでいたか………これは、我々が敵を侮っていたと思われ
ても仕方がないな)

そう感想を持つアムール。

しかし、今頃そう思っても後の祭りだ。

今更、職場放棄して逃げることなど論外。

敵よりも完全に装備面で劣っていても、限られた装備で迎撃に当たらないとならない。

それに。

「「「おおおおおおおつっ」」」

まずは目の前の敵の迎撃だ。

「チイツ！ 逆撃！ 背部ブースター吹かせっ！」

アサルトライフルをタタタタツ！と撃ちまくり、雄叫びを上げ突っ込んでくるシンフレ。まずはその対処が優先すべき行動だった。アムールは、自身も先頭に立って逆撃の先陣を切る！

機械の鎧を纏った宇宙の騎士たちが、ゴウツと背部ブースターを吹かし、銃剣を突き出て突撃する。

コスモ・フェンサー隊第1班は、敵の銃弾を弾きつつ横並びに槍袈を形作る隊形でシンフレに肉迫。

コスモ・フェンサー隊とシンフレの前衛が激突する怪音が、ドンツ！ガンツ！と響く！

アムールは弾幕を抜けると、まずは敵前衛に銃剣を突き立ててシンフレのアーマーとマントに傷を付ける。間を置かずに、怯み、倒れ込んだ相手に近距離で発砲。止めを刺す。

その合間にも、多数の発砲音が続き、複数の断末魔が響く。

その一瞬で、複数の人の命が消えた。

近接戦闘、乱戦の開始。

パワーアシストの威力を借り重い棍棒で殴りつけてくるシンフレ。フェンサー隊は、楯を使ったパライングでそれを弾くと、銃床を上手く利用し逆に殴り付ける。鎧をまとつての戦闘は、専門家であるフェンサーチームが一枚上手だ。

だが、それでもコスモ・フェンサー隊が倒せた敵は、シンフレたちの一部に過ぎない。アムールは、隊員たちと共に続け様にシンフレ後続へと攻撃する。

斃した敵の身体と、鎧複腕の楯で自分を防御しつつ、シンフレ後続部隊に接近。銃口を突きつけ発砲。

もう一方の腕での盾で殴りつけ、パイルバンカーで敵の装備を貫く刺突攻撃を試みる。

程なく、ドンツドンツドンツ！と杭が打ち込まれる音が響くと、複数の命が消立て続けに消えた。

他の隊員たちも続く。銃剣やパイルバンカーを多用し、激しい剣劇音と発砲音が聴こえた末に、さらに複数の命が消えていった。

「アムール隊長！ こちら制圧完了！」

「こちらもです！」

「解った！ 敵残存兵力は？」

「後方に動体反応複数。ですが、動きはありません！」

「敵の大型兵器と合流する気か……：……マーゲイ、こちらに迫ってくる大型1体は？」
部下から制圧報告を聞き終えると、前線に立つアムールは、後方に残してきたマーゲイとの通信を試みる。全体的な状況と、迫り来る大型機動兵器の情報を得るためだ。

「コロニー外の敵機動兵器へは、特務艦が迎撃に向かっています。宇宙側ハッチを破壊しながらやって来ている巨人型は、間もなくすべてのハッチを破壊する模様」

アムールは、そんな報告を聞き、激しく自らの頭脳をフル回転させた。

なぜなら、アムールはフェンサーチームの隊長として、敵を制圧しなければならない立場である。

「ぜんぜんわからん」とか言って、職務放棄することはできない。

何としても、手持ちの武器、武装、資材、今、自分が置かれている状況を利用し、敵の大型兵器を駆逐しなければならない。

「!? そうだ！ あの手があるか！」

程なく、ある作戦を思いつくアムールであった。

「みんな……：……トリモチ弾を装填して市街地まで後退。第2，3班にも後退するように伝える」

「アムール隊長、何か策があるのですか？」

不安そうな声で、そう訊ねてくるマーゲイ。

「敵は巨人型だったな？」

「はい」

「では、人体と同じように、関節を伸ばし切れば、動きを封じられないか？」

「!? 映像で関節部分を観察してみます！」

アムールの意図をくみ取ったマーゲイが、早速、敵の画像の関節部分にズームアップし、作戦が可能かどうかを判断しようとした。

「敵巨人型は、一つ目、腕が長く、足が短いタイプです。武器は巨大な鋼鉄の棍棒………手足のバランスが人間とは違う以外、これと言って関節部に違いはないようです」

「そうか。関節を伸ばす作戦はやれそうか？」

「やれそうですね」

「では、マーゲイ隊員は、我々が巨人兵器を破壊できなかつた時に備え、敵の兵器のA Iを制圧する準備をしてくれ。まずは力技で仕掛けてみる」

「その…場所はどうしますか？ ここで迎え撃つの？」

「いや。居住ブロックの奥にあるビル街まで撤退する。そこに丁度良い高さのホテル

があつたはずだ。そこに誘導する」

「確かに。狭さも伸びるトリモチ…コーキング弾で絡め獲るのに調度良いかも」
市街地奥の3D画像データを眺めて、そう感想を言うマーゲイだった。

「そうでなければ困る……では、全班、市街地まで一時撤退！」

「「「オオオオオオオ」」」

フエンサーチームの面々は、アムール・トローラーの指揮の下、整然と撤退していくのだった。

その一方。

「おお…これが我々の悪霊神機アートラストか！」

そんな言葉と共に、オオオオオオオ……と感嘆の声が周辺に響いた。サイド4で生き残ったシンフレたちが、合流を果たしたアートラストの威容に感動していたのである。

「クククッ！ 多くの仲間と多数のゲケロ口を失ったが、これなら勝てるぞ！ 温い平和に浸かる連中に、大いなる恐怖の時代を見せ付けてやる！」

生き残ったシンフレたちのリーダー格が歪んだ表情となり、そう歓喜の声で言い放つ！

「俺は狂っているぞー!」との、自己紹介発現だった。

そんな瞬間のことである。

ブオンツ!

アートルラストが突如、棍棒の薙ぎ払いを繰り出し、その手加減した攻撃を受けたシンフレたちが吹き飛んだ。

ただし、シンフレたちは優れた装備を身に纏っていたため、致命傷には至らない。

「……なぜ……………」

突然の攻撃と、それを受け、床に倒れ伏した自分たちの意味が「ぜんぜんわからん」ガロウ・ラン信者の一人が、途切れ途切れに疑問の声を上げた。

だが、アートルラストの何も持たぬもう一本の腕が、その疑問に答えることなく器用に信者の身体を摘み上げた。そして、胸のハッチを開け放ち、そこに次々と床から拾ったシンフレたちを詰め込んでいくのだった。

無論、全身に打撃を受けたシンフレたちは、その行為に抵抗する術など持たなかった。最後のシンフレが、ドサツとアークラストの胸に押し込まれる。

「ゆっくりしていつてね!」と、本当にゆっくり閉まっていく胸のハッチ。

もし、胸のハッチが開いていたその合間に、内部を観察することができた者がいれば、そこはコックピットなどではなく、多人数の人々を押し込め、拷問するための拷問室だ

と理解したことだろう。

「あ……あ……あああ……！！」

「う……ウウウ……」

「……………て……助け……」

「……」

自分たちが、なぜこんな状況に追いやられたのか理解せぬまま、シンフレたちが見聞える。これから、自分たちが生体部品として使用される未来も知らぬままに。

「……助け……誰……」

バクンツと、ハッチが完全に閉まり、悲鳴が拷問室から漏れることはなくなった。

その拷問室の外側。

アートルラストの頭部の一つ目が一瞬、禍々しい紅色の輝きに包まれ、光が機体全体を覆った。

だが、それは本当に一瞬のことであった。

ズンツ！

通常の状態に戻った巨人型悪霊神機アートルラストは、次の獲物の待つ市街地へと向かい、ゆつくりと進撃していくのだった。

蒼き闘争

ズゴウツ！

ズゴウツ！

ドオオオオンツ！

マーゲイの操るペンギンAIたちによってロックされていたハッチが、物理的な攻撃によってこじ開けられた。手持ちの棍棒で、強烈な物理攻撃を放ち、無理矢理破壊するという方法である。

如何に電子世界でペンギンAIが強くても、現実世界への物理攻撃は阻止できない。ソフトとハード。

明確に区切られた限界がそこにあった。

アークラストのAIへと進入できない現在、マーゲイたちには、その進撃を食い止める手段がもう存在しなかった。

それ故に、ズンツ！ズンツ！と重量感を感じさせる足取りで、悪霊神機アークラストは悠々とハッチ残骸の側を通り抜けていく。

市街地エリアと港湾エリアを分ける境界を邪魔されることなく抜けて、運河を通って

アムールたちの待つ市街地へと入っていく。

タアアンツ！

タアアンツ！

そこに、狙撃兵の待ち伏せによる対物理攻撃がなされた。

パアアアツ！　パアアアアンツ！

しかし、謎の禍々しい輝きが、障壁のようにアートルラストの装甲を覆っており、その力が着弾するはずだった弾丸を逸らせてしまう。逸れた弾丸は港湾《ベイ》エリアの障壁に着弾し爆散。アートルラストのボディは無傷だ。

「バリアーか!？」

着弾を監視していたフェンサーが叫ぶ。予想外の事態だった。

「ガロウ・ランは、そんな兵装まで実用化しているのか!？」

驚愕を隠せないフェンサーチーム狙撃班。

（なんだ？　このプレッシャー!）

（普通じゃないと、肌で感じる!）

「引くぞ!」

「了解した!　異論はない!」

「ああー！」

あの巨人兵器は普通じゃない！ 理屈はわからんが、何か異様なプレッシャーを感じる！

狙撃兵という兵士のセンスでそう理解した三人は、取るべき武器もそこに残り、素早く後方へと逃げ去っていく。

ここでは不利と、留まることに見切りを付け、後方の本体への合流を急いだのだ。

その一番の目的は、敵起動兵器が禍々しい障壁を纏っている情報を、生きて持ち帰り隊長に伝えることだった。

◇ ◇ ◇

「対物理ライフルの銃弾が効かない？」

アムール・トローラーは、部下の報告に自分の耳を疑った。なぜなら、それは遠距離攻撃が無効であることを意味するからだ。

「はい。ロケットランチャーは使用してみなければ有効かどうか判断できませんが、ライフルの弾丸は外装を覆う障壁の阻まれ、逸らされてしまいました」

「自分も同様です！」

「そうか……あれ止めるには、何か別の手段が必要か」

信頼する部下たちに弾丸無効を告げられたなら、疑う理由もない。敵の起動兵器に弾丸での攻撃は通用しないのだろう。ならば、アムールいては、何か別の手段を用意して、敵機の進撃を防がなければならない。

「…」

正直、今の限られた装備では、作戦通りの行動しか実行しようがない。アムールには都合よく、新たな作戦を立案することはできなかった。

とはいえ、職務を放棄して逃げ出す選択肢などアムールには存在しない。

ガロウ・ランの起動兵器を放置すれば、このコロニーだけでなく、サイド4全体が危機に陥るかもしれないのだ。

アムールたちフェンサーチームに、それを座視することなどできなかった。

「用意したトリモチ利用作戦でいく。みんな覚悟を決めろ……」

それ故に、敵のバリア情報が齎される前に立案した計画続行を部下たちに告げるアムールだった。その表情には苦渋が満ち満ちており、部下たちを死地に追いやる決断に苦しんでいることが解る。

そんな隊長の立場を理解できるフェンサーたちも決死の思いで敬礼を返す。

「…」

「……」

一同無言。

合流したチーム一同は死兵となる覚悟を決めて、その状況を受け入れ、共有して事に当たろうとしていた。

「待つてください。これを見てください。こちらが切れるカードはまだあります」

しかし、まだ別の対応方法があると、覚悟を決めたフェンサーチームに新たな手段を提案する存在がその場にいた。フェンサーチームの会話に割り込んできた人物は、電子戦担当のマーゲイであった。

マーゲイは、パソコン画面をアムールたちに見せるために豊かな胸の前に置き、そのデータを映し出させた。

「サイド6に出荷前のmidori型触手列車四両が、このコロニーに運び込まれていました。これを接続して、敵の起動兵器に対抗させるのです！」

「…話を聞こう」

予想外のところからの新たな提案に、アムールが耳を傾ける。今は、テロリスト制圧のために勝利し、生き残らねばならない時である。そのためならば、アムールはどんな提案も受け入れる気になっていた。

「敵起動兵器が周囲にバリアを纏う事ができても、機体を稼働できない程の圧力を衝

えれば動きを停止させることは可能なはずです。midori型の触手で絡め獲り、そこをコーキング材トリモチで固め、大量の建物の瓦礫で押し潰してしまえば、勝ち目はあるはずですよ！」

自身の言葉と、画像の簡易33Dアニメーションで作戦を説明するマーゲイであった。

「いけそうだな。手段は理解した。早速、ばかわー型を接收してくれ」

「もうやっています！」

コロニーインフラ制圧をやらせていた電子ペンギンたち半数を、すでに接收に向かわせていたマーゲイである。

笑顔を浮かべ、そのことを報告するマーゲイであった。

それぞれの思惑

「各コロニーでの戦闘が始まったようですね」

連邦の高官であるミウラー・ガイドナーが、高級ホテルの個室で地球を眺めている仕事の男性に話掛けた。部下たちから各サイドで戦闘が開始されたとの報告を受けたからだった。

話し掛けられた男性といえば、連邦軍情報省のエルラン少佐であった。

「……とうとう、我等が地球連邦の懸案の一つが解決される訳ですな、レディ・ミウラー」
「ええ。やっと旧世紀の呪いの一つを始末できます」

そう語り合うと、二人は部屋の中央部にあるソファへとそれぞれ腰掛け、テーブルを挟んで向き合い、次の報告を待つことにした。

今日、ここに秘密裏にやってきた二人の理由は複数ある。

一つは、厄介なテロリスト集団ガロウ・ラン壊滅の知らせを共に聞くため。

一つは、ガロウ・ランと関係がある、とある組織に対する対応を話し合うため。

そして、もう一つは、地球連邦政府が推し進める、ジオン・ズム・ダイクンによる新共和国建国計画の開始を祝うためであった。

その計画が、もうしばらくすると、本格的に動き出すのだ。

「少し早過ぎるかもしれませんが、お祝いを言わせてもらいます、これでやっと、あの被害者を騙る詐欺師共の根性を叩き直す改革が開始される訳です。じつに喜ばしい事だ」

「ありがとう。宇宙移民が開始されて半世紀。空気も、食料も、水も、住居も、権利も、すべて他人の税金によって用意してもらいながら、なお、自分たちは強制的に宇宙に移民させられた棄民だと嘯く、一部のスペースノイド共を、やっと隔離病棟へ閉じ込めることができませす！」

「ふっ、付け加えるなら、その子供、孫まで動員し、自分は被害者側であるとポジショニングする連中ですな」

「それだけなら、まだマシなのです。ただ自分たちは被害者だと主張するだけならば……問題は、自分たちが地球連邦という獅子に取り付くノミ、シラミだと自覚したくないために、分離主義者のテロリストたちに資金援助し、反地球連邦運動に参加することです」

「自分たちの生き方が、地球連邦に寄生する寄生虫だと自覚してしまうと、もう被害者ポジションではいられない。恥ずかしくて自殺したくなる。だが、被害者という楽な生き方はやめられない。だから、自己洗脳に走る」

「自分たちは本来はみじめな乞食ではなく、誇り高い改革の闘志なのだ。強大な地球連邦政府に立ち向かう、あの独立の志士たちと同じなのだ。そう思い込むために、反地球連邦運動にのめり込む」

「そのテロリストたちに送る援助資金すら、連邦政府からの生活保護予算から出ているというのにな」

「そして、連邦を貶める数々の嘘。地球の議会もいい加減にしると、連中への対策を本格的に考えます」

「そうして、新共和国建設計画が立案された」

「酷い現実ですが、それだけの醜い事件があったからこそ、歴史が一気に動き出したという事です」

「そこまで語り合い、エルラン少佐とミウラーは会話を一時中断する。」

語り合った二人は、お互いに「本当にやつとだ」という表情になっていた。二人は向かい合わせていた顔を横に向け、部屋のスクリーンに映し出された地球へと双眸を向ける。

BGM、言葉、その他の雑音のない静かな時間が過ぎ去っていった。

「…旧世紀の末期、在ヤーパーンコーリヨ人という、愚劣な存在が極東の列島に存在しま

した。彼等はないもない事件を捏造し、賠償しろと、当時のヤーパン政府に強請り集りをし、嫌っているはずの民族から生活保護費を受け取り、生活していました」

そう言つて、エルランが静寂を撃ち破つた。

「ですが、北のジェネラル・キーム、南の従北政権が外部勢力によつて駆逐されると、彼等は憑き物が落ちたかのように反ヤーパン運動から距離を取り、後に地球連邦となる世界統一勢力に忠誠を誓つた」

ミウラーといえ、そのようにエルランに応じる。役人的な律儀な対応であつた……いや、彼女もこの話題を話したかつたのだろう。

「その良き変化は、やがて地球連邦政府となる地球統一勢力の、大きな成果の一つですね。超改革派であつた者たちも、これには大変満足しました」

「そう。統一派内のエリートと言えたヤーパン人たちに恨み言を言つて生き続けるよりも、共に統一派として地球連邦を生み出すことに寄与した方が、強請り集りだけの人生より、何倍もマシだと思つたのです」

「そして、地球連邦が宇宙移民政策を開始した後も、統一した半島の新しいリーダー、リ・ナミの下、率先してフロンティアである宇宙へと上がり、人類の新たな大地、生活の場である各サイドの建設に寄与しました」

「リ・ナミ議員の思想、統一コーリヨ民族百年の計に従い、民族の哀しい過去から決別

し、前向きにフロンティアで成功しようとしたのです。彼等はロケットのGに耐えて宇宙へと飛び出し、地球圏という新世界のエリートとなるべく、新たな一歩を踏み出した」

「その計画は、今日、成功を収めた。サイド2を中心に統一コーリヨ系スペースノイドの人口は増加し、半世紀を経て、その人口は3億。後10年もすれば4億になる。半島に残る5000万と合計すれば4億5000万を超える一大勢力だ。地球連邦は、他民族から最悪と言われた民族を見事に再生させた。統一コーリヨ民族は、真に地球圏の優良民族へと成長しました」

「今日、その事実は地球連邦の大きな成果の一つとして記録されています」

「……ですが、宇宙移民が開始されて20年が経過した頃、予期せぬ事態が生じた。奴等が現れたのです」

「……我々、連邦総務省最大の敵K F o f P（ケダモノ・フェデレーション・オブ・プレシヤス）……あのクズ共は、自分たちスペースノイドは棄民同然に宇宙に強制移民させられた……そんな嘘を平気で騙る、人類史上最悪の詐欺師集団です」

苦々し気な表情となり、K F o f Pの名を出すミウラーであった。

「そう。在ヤーパンコーリヨ人はじめ統一コーリヨの一般人たちが、優良な地球連邦市民として再出発した一方、あの唾棄すべき連中が活動を開始しました。一人のスペースノイドとして真つ当に働くよりも、連邦という巨大国家に被害者として寄生し、他人

が払う税金でコロニー内部でぬくぬくと暮らそうとした。何時の世も悪は蔓延るといふことですよ」

「旧世紀の在ヤーパーンコーリヨ人の悪い真似を始めた連中は、本来、人間とは地球に生きるようにデザインされたケダモノで、それを無理矢理宇宙に住まわせるのは間違っている。住民は宝だ！プレシヤスだ！その権利を守れ！」と主張し、地球連邦政府に対し、謝罪と賠償を求めてきた。もちろん、その目的は地球に帰ることなどではなく、賠償金を得て、働くことなくコロニーでぬくぬくと暮らすことだった」

「改革を至上命題とする左派から、安定を求める右派に政権が移行し世情が安定すると、かならず嘘捏造で生活資金を得ようとする詐欺師が登場する。旧世紀終盤から連邦黎明期、各国政府の行政権を奪った地球統一勢力は、反抗する一般住民を弾圧すること、辞さない超改革派が中心だった。彼等が主導する統一政権の弾圧を恐れ、詐欺師たちは、右派政権が誕生するまでの間、地下の潜り身を潜めていた」

「そうです。そして連邦が右傾化し、自分たちが左派たちに弾圧されない状況となると、詐欺師たちは堰を切ったように表舞台に現れ、宇宙移民たちの権利を守れ！被害者である自分たちに賠償しろ！と主張し始めました」

「当時の地球連邦政府総務省には、そういった詐欺師連中に対する対応策が存在しなかった。K F o f P 側は、一時金を払って追い払おうとしてしまった」

「それが失敗でした。強請り集りで連邦から大金を得られると知って、K F o f Pへと詐欺師などが続々と集まり、その構成員は爆発的に増えていきました。自分も賠償金を得て、楽な暮らしがしたいと」

「さらに、K F o f Pはテロリストに資金援助を開始し、彼等を自分たちのボディガードとしました。資金が枯渇して活動がままならなかったテロリストたちは、容易くK F o f Pの支配下に置かれた。進んでその飼犬になったのです」

「そして、その関係は長く続き、餌を与えられたテロリストの一部は、次第に雇い主の意に沿うように、地球連邦政府からスペースノイドの開放を謳い始めた。当初の目的である、連邦に潰された各国の主権を取り戻すという主張から大幅に逸脱して」

「酷い現実です。旧世紀、強権的国家に支配された地域では身分が固定化されました。その国の支配者層になれない一般人たちは、頭を使って支配者層を騙し、その利益を奪い取る詐欺師に憧れた。そして、実際に詐欺師となった者たちは多い。そんな旧世紀の悪癖を、今日、K F o f Pが地球圏で再現し、テロリストたちにまで影響を与えてしまった状況が、今現在、私たちの前に存在しています」

「しかし、それも終わりです」

「ええ。今回、ガロウ・ランを始末する理由は、もうK F o f Pといった詐欺師集団や、その支配下にあったテロリスト共を放つてはおかないという、連邦政府からのメッセー

ジです。詐欺師たちは一斉にK F o f Pを見限り、他の寄生先を探し始めるでしょう」

「その目の前には、ダイクンによる新共和国計画があるということですね」

「そうです。本質がクズの詐欺師である彼等は、内心では詐欺師である自分やその仲間たちを嫌い合っています。ダイクン氏の許、本物の革命の志士となれると知って、彼等は狂喜して新共和国に飛び付くでしょう」

「そうでしょうね。ダイクン氏には、愛妾として北欧の王家の血筋であるアストラリア嬢も娶らせてあります。彼女とその子供たちの血筋が、新たな共和国に正当性を与えることでしょう」

「それで旧世紀の権威主義者たちもサイド3に集まっています。夢見がちな人々は、本常に地球連邦からの独立も夢物語ではないと思ひ込む」

「そうして、サイド3の隔離施設は完成する。ところで、レディ・ミウラー、ダイクン氏へと送る建国資金は万全でしょうか？」

「ふふ。知ってるくせに」

今回のガロウ・ラン殲滅作戦完了と時を同じくして、サイド3のダイクンの許へと、新たに大量の資金が振り込まれる算段であった。その資金によって新共和国建国宣言がなされて後も、しばらくの間はダイクンの政権は安泰だろう。

エルランは、無言で口角を上昇させた。

驚くべきことに、本来は独立運動を監視し解散させる側の地球連邦政府が、この様にして新共和国の誕生を後押ししていた。

すべては、地球の重力に魂を引かれた者たちと隠語で揶揄される、スペースノイドの詐欺師たち、その他、連邦政府で問題にしている輩たちへの対応だった。

彼等をサイド3へと隔離させ、そのタカリ根性を捨てさせて、鍛え直すのである。

本気で新共和国を用いて、詐欺師勢力を真人間へと更生させようとしているジオン・ズム・ダイクンと、あくまで連邦の官僚であるミウラーたちとの間には、若干の齟齬は生じていたが、とりあえずは新共和国を誕生させることで合意はなされていた。

未来の事は別として、現状、その計画に問題は存在しなかった。

「そちらこそ、ご自慢の特務部隊は活躍なさっているのですか？ なぜか、ザビ家のサロ殿がそちらに合流し、ガロウ・ラン退治に参加していると聞きましたか？」

エルランへのお返しと、ミウラーも自らの持独自情報カードで反撃する。政府の実務者同士の、腹の探り合いというお遊びである。

「ほう。レディの情報収集能力も大したものですな。じつはガロウ・ラン指導層がオカルトに染まっついて、ザビ家がそれに巻き込まれる寸前だったとか。まあ、それほど憂慮することでもないようです」

「それなら良いのですけどっ。」

お遊びを終えると、エルラン少佐が寄り掛かっていたソファから上半身を起こし、テーブルへと手を伸ばした。用意してあったワイングラスを手に取り、数回揺らした後、白い泡立つ液体に口を付ける。

popudepipikku……

そこで、ミウラーの持っていた携帯端末が鳴った。ミウラーの秘書リユウコ・バトーからのコールだった。

「失礼……」

その報告内容に目を通すミウラー。

「あら、サイド2で特務隊が苦戦しているとか？」

「ほう。それは面白い。こちら側のルートからも、程なく報告が入るはずですよ」

「そう」

「ええ。ではレディ・ミウラー。次の報告を待つことにしましょう」

「わかりましたわ」

双方、さして心配するでもなく、余裕を持って次の報告を待つこととした。

特務隊の指令であるエルランは情報不足のため、ガロウ・ランが未知の兵器を繰り出しているとは知らなかったのだ。

時の巻き戻しと加速

証明入りのガラス板多数が、壁面から巨大な破壊神像を照らし出し、その禍々しき所々へと陰影を生み出していた。

その正面に座す人影が一つ。

戦闘用パワードスーツを身に纏った大神官イギー・カッグが、コロニー外壁と内壁の間にある、秘密の神殿の中央に座していたのだ。

イギーは、そうして破壊神像の前で双眸を閉じ、部下たちの報告を待っているのである。

「まさか、サスロに計画の邪魔をされるとはな」

（暗殺される運命の男にしてやられる。所詮、ニュータイプとして覚醒していても、世界の隅々までは把握することは不可能か）

そう一人呟き考えるのは、自分の計画の全容を掴み、殲滅するために地球連邦軍に情報提供を行った男、サスロ・ザビのこと。

そして、ニュータイプとはいえ自分も万能ではないという事実と、その戒めであった。

（これは、時を一旦加速し、近未来までの状況を把握。然る後、時を巻き戻し、計画を

初期段階からリトライする必要があるかもしれない)

P I P I P I :

そう善後策を考えていると、大神官シヨツ：いや、イギー・カツグの許に、部下からの戦闘準備完了の連絡が入ってきた。

「カツグ大神官様、出撃準備が整いました！」

「神官1、2、3番隊、出撃します！」

「頼む。悪霊神機がサイド4から到着するまで持ちこたえろ」

「はっ！」

「仰せのままに！」

サイコマテリアを組み込むことで、飛躍的に防御能力を高めた神官服を身に纏い、ガロウ・ラン構成員たちが出撃していく。連邦軍情報省特務隊を迎え撃つのだ。

その姿を監視カメラの映像越しに確認するイギーは、いつの間にかやら未来を幻視していた。自らが出会う未来の敵の姿を捉えたのである。

意図しないニュータイプ能力の発動だった。

「!? ブルーゲイル！ ザブン導師ヅルの力！ あの男は性別は変わっていても守護天使

！ ブルーゲイルの力を借りたか！ 青い鳥の勇者として宇宙世紀に転生するとは！」

その姿は、まぎれもなくヤツだった。

バイストンウエルでの700年間を死ぬずの罪人として過ごした後、転生した先コズミック・イラで戦った青き鳥の勇者、降魔スレイヤー空想バード！

性別は変わっているが、そのオオミチバシリの魂は忘れようもない。

「まさか、この私のイデオナイト練成計画を嗅ぎつけてきたか？ 無限力の破壊の力を恐れ……いや、獣の守護天使けものフレンドズの破壊を回避しようとする本能に従い、この世界へとやって来たか？」

忌々し気に、右手に持つサイコマテリアの杖で床をコツコツと叩くイギー。その表情は、イギー・カッグでも、ラウ・ル・クルーゼのものでもなく、それ以前の男のそれとなっていた。叡智溢れる賢者でありながら、野望に生きた男の表情であった。

その面影は、まさしくあの野望の徒のもの。

本格的なMSの開発が完了していないこの宇宙世紀に、ガロウ・ランが人型兵器を運用していただけることも、この男が黒幕であるなら納得である。

なぜなら、この男はバイストンウエルでオーラバトラーを創造するという、激しい乱世の切っ掛けを生み出すほどの男だったのだから。

7メートル級のオーラバトラーが作り出せるのだから、宇宙世紀の技術力があれば、より大きい8メートル級人型兵器を生み出す程度、この男にしてみれば簡単なことだったであろう。

また、その才気に惹かれ、多くの者たちがイギーの下に集まるのも当然と言えた。その中には、サイコマテリアの研究を任せられる、ＱⅡルルもいたということだ。

「……………いや、これは天恵か？」

（イデオナイト練成には、ダイクン家ザビ家を最大限利用し、一年戦争で失われる命、その負の想念をもつて執り行う予定であったが、あの青き鳥の勇者をその核に据えることができるなら、より成功率を高めることが可能だ）

僅かな時間に悪魔的な計算を終えたシヨツ：イギー・カツグは、その表情に邪悪さを加えて、一人、ほくそ笑むのだった。

そして。

「時よ！ 加速せよ！ この私を青い鳥の勇者の許へ！」

自らのニュータイプ力を開放し、時間の流れを加速させるのだった。

降魔スレイヤー空想バード、飛ぶ!

過程は吹き飛ばされ! 結果だけが現れる!

「エゴだよ! それは!」

人の理性と狂気を分けるなどナンセンス。そう語るイギーの主張に、降魔スレイヤーが反論する。

降魔スレイヤーにしてみれば、イギーの主張は「犯人を狂人と決めつけて、動機を調べない悪徳警官の主張」にしか聞こえなかった。

警官が犯人の動機や周辺人物の状況、原因や因果関係を調べることがを止めてしまえば、永遠に真実には辿り着けない。

犯罪の原因を調べ、それらを理由に犯人逮捕をしないのならば、警官はただの権力の犬でしかなく、事件の全容を闇に葬りたい権力者の私兵でしかないだろう。

別の言い方をすれば、現象の因果説明をせずに自分は科学者と言い張る詐欺師や、奇跡とは無縁のくせに自分は宗教家と言い張る。そんな輩と何も変わらない。

「ゴーマ・シオ：いや、降魔スレイヤーにとって、イギーの主張は断じて認められるものではない。」

「地球連邦の右派が新共和国をゴミ捨て場にして、都合の悪い連中を送り込みたいのは真実だろう。しかし、ジオン・ダイクンのようにその状況を逆利用し、新しい人類の道を整備する気概を持つ人々がいるのもまた真実！ それが人の心の暖かさだろう！」

人の心の光を認めない狭量なイギーに、降魔スレイヤーはそう叫ばずにはいられなかった。

「ふっ、人の心の暖かさ、光か。しかし、それを簡単に打ち捨てるのも人間だよ。ジオン、アストラライア、シンバ・ラル、デギン他のザビ家の面々。彼等すべてを人身御供として、地球圏の繁栄を築こうと蠢動するのが、貴様等地球連邦だろう！」

旧世紀末期からたった一つの政府で人類を制御してきた。そんな地球連邦の官僚たちは疲れ切り、今やジオンの新共和国へと不穏分子たちを押し付けようとしている。

一方、不穏分子たちも同様に、自己の責任を連邦官僚に押し付け生きてきた。責任ある他者の立場を理解しようとせず、ただ不満だけを言い続け、自助努力で世の中を良くしようとはしない。彼等はいずれ自分たちの身勝手な、地球連邦の官僚たちを追い詰め、そのツケが自分たち廻って来るのだと理解できないのだ。

結局、双方ともダイクンが語るニュータイプのように、他者の対場を理解しようとは

せず争いへと突き進んでいた。

イギーは、そんな地球圏の現状を嘲笑っていた。

（解らぬさ！ 愚衆は解らぬ！ だから争いは繰り返される！ 故にその時が訪れるのだ！ 古来より誰もが思い描き！ 恐れ！ 慄いた審判の時！）

「生き方が醜いんだよ！ そんなお前たちは！ 消えていなくなれば良い！」

（時が見える！ 私には解る！ ダイクンの許に集まった者たちは、スペースノイドの自治のために平和的な革命を開始するだろう！ だがその道半ば！ 盗人が現れるのだ！ サスロを覗くザビ家の者共は！ ダイクンもその支持者も粛清し！ その立場を奪い取り！ なり代わる！ そして優性人類生存説なる愚劣な洗脳を愚衆に施し！ ザビ家のための地球圏制圧に乗り出す！ 愚かなサイド3の軍も民間も！ それをスペースノイドの独立のためと誤認し！ 人類の大虐殺に協力してしまうのだ！）

「だからって！ それを理由にして破壊を齎そうとする行為は断じて違う！ 貴様は！ ただ地球圏に破壊を齎したいだけだろう！」

「その何が悪いか！ 穢れた世界など、破壊の化身たる降魔の：悪霊の神々によって滅びるが良いのさ！ 所詮はニュータイプではない降魔スレイヤーには理解できない！ 時の輪廻に捕らわれたアムロ・レイや、シャア・アズナブルの魂の慟哭などな！」

「アムロ……？ シヤア……？ 解らない。なぜ貴様は俺を降魔スレイヤー、空想バードと呼ぶ？」

「ふん、やはり何も思い出せぬか……ならば、真実に辿り付かぬまま今生を終わらすが良い！」

（墮天使けだものⅡビーストに墮天しなかつたとはいえ、所詮は獣を司る守護天使けだものⅡフレンドズ。龍輝脈を断ち切られて弱体化し、ヒトにしか転生できない哀れな存在。如何にザブン導師^{グル}のブルーゲイルに導かれても、青い鳥の勇者以上の存在には転生できない。過去生の記憶を呼び覚ますことも不可能。ただフレンドズの本能……破壊を止めようとする……に従い、勇者となつてこの私の前に現れるだけ。無様な空想バード）

（この私の真の目的が、時の輪に捕らわれた魂の救済……時の輪を破壊し、ニュータイプ^{イプ}の到るその先、因果地平への道を再び開くことも知らずに……）

「……哀れ」

（もはや会話は無意味か）

降魔スレイヤーの現状を看破し、無感動を装いイギーは言い放つた。

そして、ジ・死道をサイコマテリアで操作し、降魔スレイヤー迎撃に打つて出る。

（この私の魂と同様に、時の輪に捕らわれた哀れなフレンドズよ。せめて安らかに眠る

が良い)

「ジ・死道、ジエノサイド・スパーク・ゼロ! 放射準備!」

ジ・死道は数多の犠牲者の血糊で穢れた三対の腕を拡げ、巨体前方に雷撃派を集約していく。もし、フルパワーでそれが放たれたなら、被害を受けるサイド2のコロニーは一つや二つ…いや、片手の指どころでは済まされまいだろう。

「くっ! 本当に世界を浄化したいのなら、人の暖かさを人々に知らしめろ! なぜ、それができるセンスと力がありながら、それを拒否し破壊に走る!」

「未練! 未練がましいぞ! 青き勇者! 我が進むはイデオナイトへと続く破壊の道なり! 世界の守護者と破壊の神官が相容れることはない!」

「それでも! それでも俺は!」

極大クラスの攻撃が放たれんとするその瞬間も、降魔スレイヤーは懸命に反撃方法を考えていた。

青きイロドリーの翼の沓と、理力力の盾の広域未来予測機能を持って、自分一人が極大雷撃派を躲すのは可能だろう。しかし、この場から動いてしまえば、極大雷撃派から各コロニーを守護することは不可能だ。見捨てられた人々には、確実に死が訪れるだろう。

未来予測が的確にできるが故に、降魔スレイヤーはその場から動かない。

(いっ！) ヒビッてんじやねーよ！)

覚悟を決めた青き鳥の勇者は、自分自身を激励し、八百万言葉剣やおよろずのことのはのけんを持つ腕に力を込める。この場で極大雷撃派を防ぎ、ジ・死道へと死合う覚悟を決めたのだった。

(頼むぜ！ 数多の言葉を つむぐ 勇気の 剣よ！)

次の勝負にすべてを賭けるため、勇者は楯を背中に背負い直し、両手持ちにした剣を正眼に構える。両足首から伸びるイロドリーの光の翼も、降魔スレイヤーを祝福するよ
うにバサリッ！と一羽搏きするのだった。

(ほう…思い切ったな！)

一方、降魔スレイヤーの覚悟を目にしたイギー・カッグ：いや、銃後の賢者シヨット・ウエポン：もまた、この一撃ですべてを賭すと決めるのだった。

「消え失せよ！ フレンズ！ 龍輝脈が断たれ！ 幸福の菌トヨフクハラが！ バイ
ストンウエルより消え去ったが如く！」

楽園の喪失を聞かせるイギーの声に、戦場で散っていったガロウ・ラン信者たちの怨念が寄り集まる。それ等は、極大雷撃派に干渉し、より強大な破壊力を与えていく。いまや極大雷撃派は暗黒の雷の奔流と化し、解き放たれるその瞬間を待ち望むよう猛り狂う。

ジ・死道がサイコ・フィールドを解除し解き放たれたなら、周辺のコロニーは原形を

保つことすら難しいだろう。

そんな強大な力が降魔スレイヤーを標的として放たれようとしている。

(……)が天王山。破壊と隼の言葉よ。こののは重なり混ざりて闇を切り裂く閃光の刃と化せ
……)

剣を正眼に構えて集中していた降魔スレイヤーは、キツ!と双眸を見開くと、剣を右手で逆手に持ち替え、必殺の一撃を放つ体勢へと移行する。すなわち、ワカバーストラッシュの構えである。

(……あの邪悪な想念の雷ごと閃光の刃で奴等を薙ぎ払い、このサイド2を守り切ってみせる!)

ツキラン!

ツパアアアアアアア!!

その時、三種の神器の内なるサイコマテリアが光輝く。降魔スレイヤーの覚悟に反応したのである。

そして。

(その意気なんだねえー)

(良い覚悟ですシオ隊員)

(僕も力を貸しますよ)

(俺もさ)

(私も)

(自分もですわ)

やさしいフレレンズの魂が、降魔スレイヤーの許に返ってきた。

(カパルアさん、博士、助手、ギーン船長、アムール隊長、マーゲイ、みんな、来てくれたのか……………)

(ええ。私たちにはもう身体がないけど)

(シオ隊員なら)

(僕たちの力を表現する)

(立派な身体と神器を持っているんだねえ)

(俺たちの平和を愛する心も)

(一緒に宇宙へ連れて行ってください)

「…了解した。俺の身体と神器を貸すぞ！」

(((((うみやああああああおおおおおつつつーーーーー!!!!!!)))(((((

地球圏に満ちた想念は悪意だけではない。ガロウ・ラン信者たちの想念がジ・死道に集まったように、ゴーマ・シオの死んでいった同僚たちの想念もまた、降魔スレイヤー

の許に集結したのである。

フレنزズたちの魂が神器と重なり、剣、楯、翼の杳の三神器が、一層光り輝いていく。いまや降魔スレイヤーは、より一層の輝きを持つ三神器を持ち併せ、新しい世界へと飛び立つ準備を整えたのであった。

そして、降魔スレイヤーの許に集まるのは、フレنزズたちの魂だけではなかった。

「何だ?! 女? いや、いや、フレنزズたちの声か! 今生に転生していた守護天使の魂が集まったか……いや、それだけではないのか!」

敵対する降魔スレイヤーの変化に気付き、イギー・カッグが驚きの叫び声を上げる。それは、ニュータイプの直感ではなく、オーラバトラーを創造した科学者シヨット・ウエポンの側面が分析した結果であった。

「あの力は……」

「これは……祈りの言葉?」（こののは）

そう呟く降魔スレイヤーの周辺へと、かつて地球圏で祈りと共に語られた言葉が集う。地球圏に生きる人々の幸せを願う、やさしい祈りの言葉である。

それらを、降魔スレイヤーは八百万言葉剣の力によって読み解くことができた。

「未来のスペースノイドたちが自力で権利を勝ち取り、新たな体制を作り出すことを願う」

その祈りの言葉は、そんな文面が主だったものであった。

「子々孫々の幸せを願う祈り……なぜ？」

その情報は、降魔スレイヤーへと流れ込むと同時に、守護の力を増幅させていった。

旧世紀、世界は混沌に満たされ、多くの者達が世界は破滅に向かっていると思ひ込んでいた。

なぜなら。

資本主義陣営の西側、共産主義陣営の東側。

共に自らの失策を覆い隠すため、互いに我等の方針こそが正しいと主張を繰り返し、他者を排撃することのみに邁進。自らの主張や手法を改め高めていくことに、その限られたリソースを積み込まなかつたからだ。

共産主義をその大義の御旗とした東側は、結局マルクス主義の次の段階へと到る手法を確立できず、赤い貴族の専横を抑えられず、その果てに失速していった。

従来 of 国家から脱皮し、理想郷を作り出すことができなかつたし、経済を成功させ、民衆を騙すことすらできない有り様だった。

これでは共産主義国家が存続できる訳もない。

また、資本主義、民主主義を御旗とした西側も酷い状況だった。

資本主義大国は、資本主義は素晴らしい、民主主義こそが素晴らしいのだと、次々と支配地域の資本主義化、民主化を推し進めていった。

しかし、その準備ができていない国家を無理矢理整えても、その中身である民衆はついていけない。

結局、元から先進国としての条件を整えていた国家や、数少ない勤勉な国家だけが西側の要求を満たすことができただけ。

むしろ、中小様々な国家は、援助を受ける側だった。

それでも、先進国からの援助で何とか体裁を整える程度レベルにしか到れない。

結局、支配国の要請を満たすことができなかつた。

もちろん、既存の宗教も無力だった。東西の政治に大した影響も与えられない。

それ故に「このままでは駄目だ」と、後に地球連邦の始まりとなる地球統一運動が力を持ち、各国の改革者達が連携し、動き出したのである。

そして、地球統一の戦いに勝利した後、彼等、連邦の始祖たちはある決断をした。

「宇宙というフロンティアに挑む子孫たちには、悪戯に上から権利原則を投げ与えることは控えよう」という決断である。

始祖たちは、旧国家群の過去の失敗を鑑みて気付いたのだ。その準備が整う前に必要以上の権利や原則を定め、民衆に与えても、当人たちは扱い切れないと。

子孫たちに性急に正解を求めはしないと。

その成長を、その時まで見守ると。

いずれ、宇宙の民として地球圏を切り開いた立派な子孫たちが、自らの力と叡智で革命を志し、宇宙市民の権利を得て、地球から立派に独立することを願い、その方針に則り地球連邦の法整備をしたのだった。

それは、「自力で権利を手にする強い子に育て」という、親が子を想う親心。甘やかすだけでは駄目だという聡い親の決断。

未来の子供の幸せを祈るが故の、やさしくもきびしい祈りであった。

（連邦の始祖たちは、子供たちに多くの権利を与えるのではなく、代わりに自己の成長を促す試練を与えた。それもまた親の務めなのだろうな。そんな祈りを込められた言葉も、俺と一緒に地球圏を守ることを選んだ……………）

「…了解した。その祈りも言葉も、我が身と剣に宿す。共に征こう！」

言葉の理解と共に、改めて逆手に握る剣に力を込める降魔スレイヤー。そのすべての力を合わせ、ニュータイプ能力を悪用するイギー・カッグと、ジ・死道を倒す。

青き鳥の勇者は覚悟を決め、その一瞬へと集中する！

「……………よかろう」

(勇者との一騎打ち。一人の戦士として得難き状況。その一瞬にすべてを賭すのも一興か……………時を巻き戻せば封殺できるというのに……………野望の徒であるこの私にそう思わせてしまう。それがフレンズの真の力なのか?……………それでも!)

対する、イギー・カッグ／シヨット・ウエポンも覚悟を決めた。

転生者シヨット・ウエポンとしてではなく、テロリストガロウ・ランのリーダーにして、宇宙世紀のニュータイプであるイギー・カッグとして最後の勝負に挑む覚悟。

これまで集めたすべての力を集約させて!

降魔スレイヤーを真つ向勝負で迎え撃つ!

一瞬の静寂。

そして、次の瞬間。

「勝負!!」

降魔スレイヤー空想バードが飛び!

破壊の大神官イギー・カツグが迎え撃つ！

世界の守護者と破壊の大神官が、叫びと共にすべての力を開放し、激突した！

やさしい世界1

「はあああああつー！」

「おおおおおつー！」

裂帛の気合を発し、双方、必殺の一撃を繰り出す！

降魔スレイヤーは破壊と隼の言葉を融合させた双極ワカバーストラツシユを繰り出し、イギー・カッグは自らとサイコマテリアで繋がったジ・死道にジェノサイドスパーク・ゼロ：暗黒の極大雷撃波を開放させる。

「なに!？」

しかし、異変に気付いたイギーが叫ぶ。

双極ワカバーストラツシユの向かった先は、イギーと繋がるジ・死道ではなかったのだ。その直前、暗黒の雷が閉じ込められていたサイコフィールド手前の空間だった。

「吸われる！ 我が暗黒の雷が！」

双極ワカバーストラツシユが切り裂いた空間に位相空間へと繋がる隙間が生じ、暗黒の極大雷撃波はその内部へと吸い込まれていく。このサイド4の空域で、暗黒の雷が猛威を振るう事態は回避されたのだ。

「臆したか！ この私との勝負から逃げるか！」

（違うんだねー）

（この世界を傷付けずに守ることが！）

（あなたの野望を挫き！ 倒すことに繋がるのです！）

（さあ、飛ぼう！）

（俺たちの戦いの舞台！）

（新世界へと！）

「おおおおおっ！ この世界を守るため、この私を位相空間へと引き込むか！」

その叡智に憧憬しつつも、イギーは戦士と真つ向勝負を否定された怒りの叫びを上げる。

強敵の怒りを理解しつつも、ブルーゲイル、フレンズたちの魂、やさしい言葉を纏う

降魔スレイヤーは、かまわず位相空間へと飛び込んでいった。イギーの乗るジ・死道も、

三つの力に絡み取られ、位相空間へと引き込まれていく。

外部の雑事から離れ、真の意味ですべての力を極限まで開放できる位相空間で真の決

着をつける。

それが降魔スレイヤーの決断なのだった。

キラランツ！

キラランツ！

二つの輝きが、流星のように位相空間を移動していく。

そして、巨大な小惑星上、ブルーゲイル吹き荒ぶ荒野のようなそこへと降り立っていき。

地表付近で停止する両雄は、その場で向かい合い、再び睨み合った。

「くっ……はははははっ！ やつてくれたな！ よかろう！ ここで真の決着をつけようではないか！」

相手のフィールドに誘い込まれたことも笑い飛ばし、メンタルを立て直したイギーが叫び、ジ・死道がグルルルツと唸る。

この程度ハンデは気にしない。さあ死合おうとしよう。

そんな境地であった。

（我が世の春である！）

事、ここに到り、イギーのメンタルは自身のイデオナイト練成計画よりも、青き鳥の勇者との決着を優先していた。

過去生の強敵との出会い、けものフレンドの魂との触れ合いが、イギーの闘争心に

火を灯したのである。

「ああ……決着をつけよう」

降魔スレイヤーにも、イギーの提案を断る理由はない。八百万言葉剣を正眼に構え、臍下丹田にて呼吸を整る。自らの肉体を名刀のように研ぎ澄まし、打ち込む瞬間を待つ。

もはや両雄に待つのは、一刻の修羅のみ！

第一局！

虐殺ビット&尻尾の鞭VSブルーゲイル纏う勇者の剣撃！

「ジエノサイド・ビット！」

先に動いたのはジ・死道。

三対の腕、計6のビットが分離。

オールレンジ攻撃開始と同時に本体は突進する。

イギーは、回避を試みる降魔スレイヤーをジ・死道の巨体にて叩き潰す策に出たのだ。

ビット攻撃と連携し、回避した勇者の未来位置へと大木のような尾で薙ぎ払いを撃ち込む。

羽虫のように勇者を叩き潰す心算だ。

「参るー！」

「風よー！」

対する降魔スレイヤーは吹き荒れるブルーゲイルで、光線を射出するビット本体に圧力を与え、射線を僅かに外させた。

さらに、左右へと僅かな動きのみでビットの光線を全回避し、迫りくるジ・死道本体を迎え撃つ。

「ブウウウオオオオオン！と、鞭のように繰り出される巨大な尻尾。

この程度、何するものぞ！と身体を地面擦れ擦れに後方へと逸らし、尾を躲すと同時に、剣撃を繰り出す。

「シユパアツ！」と巨大な尻尾を中程から両断。

さらに切り落とされた尻尾を踏み台にして飛翔すると、四方六方のビットへと、神速の「破壊の隼」を振り、次々と撃墜するのだった。

ブルーゲイルと物理力の盾の広域探查能力、そして降魔スレイヤーの身体能力。それら三つを合わせて、始めて実現した神技だった。

「何っとおー！」

そんな神技を目の当たりとしたイギーも驚愕し、これは叫ばずにはいられなかった。

第二局！

言葉の質量ある残像剣VS螺巖阿修羅サイコドリルブレイカー極&シャイニング・サイコフィンガー！

激戦は止む事無く続き、降魔スレイヤーはすぐさま反転攻勢に打って出る！

「群雲と光の言葉よ。混ざりて弾け、この世に偽りの姿を現したまえ」

今が好機！

そう機を見た降魔スレイヤーは攻勢へと討て出る。

他者の意志を感じ取れるニュータイプならば、降魔スレイヤー以外の意志も感じ取れる。

ならば、そのことを逆利用して雲に幻影を映し出し、フレンズの魂と共に高速移動させる。

即席のデコイである。

ニュータイプであるイギーが、それらデコイに気を取られている隙に、ジ・死道コックピットへと必殺の一撃を放つ。

直撃させることができれば、この闘争の決着はつく。

そう戦闘方法を組み立て、降魔スレイヤーは反撃の準備を整えるのであった。

「ビイレイ・アタック（多重残像剣）！」

ジ・死道本体の各処と、失われた三対の腕部分からサイコドリルが出現し、一瞬にしてその巨体全体が巨大なサイコドリルと化す。

「我が螺旋の力にひれ伏せ！ 心弱き者共よ！ 極イイイッツツツツ！！！！」

巨大なサイコドリルは荒れ狂い、周囲の雲の残像を次々と穿ち、その螺旋回転で吹き飛ばしていく。

（それでも！ それでも俺は！ 一意専心！）

荒れ狂うサイコドリル。しかし、降魔スレイヤーはその恐るべき攻撃に弱点が存在することを見抜いていた。

それは、コックピットがある本体部分が回転していないことと、技を解く瞬間、絡み合ったサイコドリルの腕を解き放つことだ。

その瞬間、ジ・死道のコックピットの防御が消失する。

そうなる未来を、広域探査能力を有する理力の盾が予測したのだ。

降魔スレイヤーは、その瞬間が訪れる時を。機を我慢強く待つ。

そして、その機が訪れる。

「見いたか！ 我が破壊神機の実力を！」

コックピットでイギーが咆え、ジ・死道本体を覆っていたサイコドリルが解かれていく。

イギーが座すコックピットの前面はガラ空きとなる。

(勝機!)

「たあああああつつつつ!!!!」

精神集中を終えた降魔スレイヤーは裂帛の気合を発し、その瞬間をピンポイントで強襲する!

青き疾風と共に飛翔し、突き出された八百万言葉剣の切先は、狙い違わずコックピットへと向かった!

「愚か者っ!」

(!?)

だが、一瞬早く、ジ・死道のコックピットハッチが内側から吹き飛ばされ、筋骨隆々なイギーが姿を現す!

何たる事か!

イギー・カツグはニュータイプ能力で降魔スレイヤーより一手先を読み、その打ち込みに対する対抗手段を構築していた!

「シャイニングウウウウツ・サイコフィンガーアアアツ!!!」

(ここぞビビッて…たまるかっ!)

咄嗟に自身の絶対急所(頭)を庇う形で、シャイニング・サイコフィンガーヘカウン

やさしい世界2

(左腕、止血するんだねー！)

(損傷した両眼は私が代わりとなるのです！)

(三半規管の代りは僕が！ バランスを取るのは任せて！)

(俺が両足を支える！)

(ならば、私は他の感覚の補填を！)

(血流は私が整えます！)

(すまない……みんな世話になる)

(いいってことよー！)

(情報省の仲間として、フレンズとして、当然です！)

(僕たちの魂は、あなたと共にあります！)

(最後まで共に戦い続けるぜー！)

(おいて行かないでくれよ、戦友)

(ずっと……ずっと！ 一緒です！)

イギーのシャイニング・サイコフィンガーを被弾し、満身創痕となった降魔スレイヤーの身体は、余命幾許もなく、僅か5分といった状況だった。

しかし、魂のフレンズたちの支援を受け、その余命は20分弱と大幅に伸びたのだ。た。

(ありがとう。これならまだ戦える)

第三局(最終決定戦)

フレンズ
守護天使正調& け も の は いる が の け も の は い ない

V S

シャイニング・サイコフィンガー&ダークネス・サイコフィンガー&マーブルスト
リーム・ソード

満身創痕、フレンズの魂たちの支援体制を受け、やっと正眼の構えを取る降魔スレイヤー。

一方、イギー・カッグはサイコマテリアを持って引き出したサイコパワーで全身を強化し、その大いなる力を漲らせていた。

後の世の、エグザム、ハデスなるシステムや、強化人間の力など及びもつかぬ、強力無比なニュータイプの力であった。

「もはや勝負はついた！　しかし貴様等は滅ぼす！　イデオナイト練成の材料としよ
うと思ったが、貴様等は危険なり！　我が奥義にて輪廻の輪に帰るが良い！」

ジ・死道のコックピットから強引に姿を現した破壊の大神官イギー・カツグは、巨体の胸の上で仁王立ちとなり、そう言い放った。

ゆつくりと、余裕を持って両腕を左右に開く。

その左右の掌には、それぞれ世界開闢の輝きと、世界終焉の暗黒が生じようとしていた。

究極奥義の準備であった。

（敵ながらあつぱれ！　見事であったぞ降魔スレイヤー！　だからこそつ！　だからこそ貴様は捨て置けん！）

イギーは、着実に降魔スレイヤーを無き者にする心算となっていた。

なぜなら、実質的に降魔スレイヤーを圧倒したイギーは、その頭脳に冷静さを取り戻していったからだ。

戦士としての滾る血潮を押さえつけ、逆転の隙を生じさせない確実な手段へと、戦闘方向を転換したのだ。

「螺旋混交………マープル！　ストリーム！　ソオオオオード!!!」

一度は左右に開いた両腕を、そのまま前方へと移動させ、胸元の前まで戻し合掌する。

「何?! 遅くなる! 貴様も時間操作を!!!」

イギーが叫んだ通りである。

絶望的な威力を誇るマールブルストリーム・ソードの切先は、八百万言葉剣の力で鈍り、容易く打ち込みを逸らされてしまった。

「だが!」

それでもめげずに、二度三度と打ち込みを続けるイギー。

その打ち込みを逸らす降魔スレイヤー。

しかし、イギーの読み通り、降魔スレイヤーは一分、二分と余命を減らしていた。

「イギー・カツグ、お前はそこまでして、この世界で何を成そうとしている?」

「はっ、はあっ! それを知りたくば! その余命幾許もない身体で、見事にこの私を倒して見せよ!」

「では、そうしよう!」

そう降魔スレイヤーが呟いた瞬間、その身体の奥から、黄金色の風が吹き出してくる。

「何いつ! これは!」

「まずい! 時を巻き戻さねば! !?」

「戻らぬ!」

そう。イギーがニュータイプ能力で時を巻き戻すことは不可能になっていた。

八百万言葉剣が起こした奇跡は、相手の攻撃を遅延させるだけではないのだ。

フレンズの魂が吹き起こす黄金の風とブルーゲイルを結び合わせ、時を操る疾風の車輪を生み出し、ニュータイプが操る時の螺旋の反作用、アンチ・スパイラルとしたのだ。

これならば、如何にイギーが時を動かそうとも、その時の流れを封じ込められる。

「守護天使正調」

(け 険しくも 麗しくある 山々を 登りて待つは 友の訪れ)

(も 文殊たる 叡智集めて 学びしは 業を祛いて 廻向せし術)

(の 伸ばしたる 指を絡めて 祈りしは 咎のありしも 許したる友)

(ふ 振り向かば 愚かな生を 過ごしたる 我が身を粉にし 多利と渡して)

(れ 煉獄を 共に歩みて 彷徨うも 道連れあらば 寂しくもなし)

(ん んんんと 他者の背を追い 縋り付く 姿まことに 醜きことよ)

(ず 凶に乗りて 人の手柄を 奪い取り 己が手柄と 成すは愚かし)

フレンズの魂の歌が八百万言葉剣の能力をさらに引き出し、時の歯車を封じ続ける。その力は、イギーの動きを緩慢とさせ、さらにその動きを封じていく。

精神はその影響は受けはしないが、ニュータイプ能力と身体の動きは封じられる。

「くっ！ 動けぬ！ 私をどうする心算だ！」

「お前の他者への恨み辛みを、俺たちの心の光で浄化する」

「何っ!？」

「お前にも、愛した女や、互いに認め合った友はいるだろう。その感情を想起させ、闘争の意志を封じ込める。さあ、修羅の道から正道に戻るんだ」

生を受け この世彷徨う 者ならば 咎を犯さぬ 人はあらざり 一人寂しく 逝くは哀しき

「俺たちも共に逝こう」

けものはいてものけものはいない

そんな言葉と温かい光は、黄金の風とブルーゲイルの作り出す時の螺旋へと巻き込まれ、あらゆる物質を経年劣化させる時粒子となり、イギー・カッグへと降り注いでいく。(おおおお……消えていく……俺の心の修羅が……この身体と共に消えていく……)

……降魔スレイヤーの身体同様に……)

永遠たるイギーの魂魄は、時粒子の干渉に滅びることはない。

ただ、フレンドズの暖かい魂の光に浄化されていくだけである。

しかし、有限なるその肉体はその限りでない。

イギーの肉体も、そして同様に時粒子に晒される降魔スレイヤーの肉体もその限りではない。

勇者と破壊の神官の肉体は、輝きの中へと消えていく。

(…負けた…か)

もはや、怒りも憎しみも忘れ去ったイギー・カツグ。ただ己の現状を素直に認めるのみである。

そんなイギーへと、降魔スレイヤーの思念が質問を投げ掛ける。

(イギー・カツグ。最後に聞きたい。お前の闘争理由を)

(よかろう。すべてはバイストンウエルの北端「の」の国に出現した暗黒の大地「ケモフレーツ」を無能力にて滅ぼさんがため)

(それは? 一体?)

(未来の幸せを求める魂を時の輪に閉じ込め、その内側を永遠に放浪させるシステム。その発生装置である災厄の地。俺の魂もまた、その時の輪に捕らわれている)

(強大な力を持つお前でも逃れ得ぬのか)

(その通り。だからこそ、私はケモフレーツを滅ぼせるイデオナイト練成を欲した。サイコマテリアはイデオナイトの卵。地球圏全体の巨大な悪しき思念を吸収できれば、

それは練成され無限力を引き出す宝具となる)

(そのためにダイクンを害し、サイド3に地球圏中の悪しき想念を集めようとした?)
 (然り)。どの道サイド3の新共和国は、ギレン・ザビが主導する一年戦争の結果により消え去る運命。人類の半数以上を死に追いやる戦争が発生する前に、この私が有効利用しようとしたのだ)

(そんな戦争が……………)

(私がお前に倒されたことで、その運命は確定した。だが悲しむことはない。お前たちは最善を尽くした。ただ、人の悪意がお前たちの善意を打ち消した。それだけだ)

(…)

(遠からずダイクンは死亡し、ジオン共和国はザビ家の独裁主義者たちに乗っ取られる。スペースノイドとアースノイドによる権利を巡る争いは、一時的に終わりを告げる。独裁、帝国主義陣営と、共和、自由民主主義陣営の争いとなるのだ。しかし、サイド3の民はギレンの洗脳から逃れられず、自分たちはスペースノイドの独立のために戦うのだと誤認し、ジオン・ダイクンの死体の生皮を被り、人類史上最悪の虐殺を実行してしまう)

(なぜ、そこまでする? 気が狂っている)

(その通り。第三者から気が狂っていると見做される状況を維持し、操ることが洗脳

であり支配方法なのだ。ジオン公国の軍人たち、戦後の残党の多くは、そんな矛盾に気付かぬまま戦い、殺し、殺され、死んでいく。自分たちが独裁者の犬という自覚なきまま、スペースノイド独立のためと思ひ込み、戦い、無様に死んでいく)

(ダイクンの意志を継ぐ者は、共和国内部でギレンたちを、ザビ家を止めなかつたのか?)

(止めるため戦ったよ。しかし、戦争前に肅清されて壊滅する。シンバ・ラルも、ダイクンの遺児を連れて亡命する)

(馬鹿な！ 同じ権利獲得のために戦った同胞を殺してしまえば、その時点で大義など無くなる！)

(そこがギレンの優性人類生存説の最悪のところだ。自分たちの闘争を認めぬ存在は優良種ではない。死ぬべき存在としている。だからこそ、ジオン公国軍はサイド1、2、4、5の民もその大部分を殺害するに到った………どうやら、時間のようだ)

消えゆく降魔スレイヤーとイギー・カッグの前に道が開く。

それはオーラロード。この宇宙世紀の世界と、様々な世界を繋ぐ生命力の道であった。

降魔スレイヤーとイギー・カッグ。

時すら操る強大な両者が争ったことで、この位相空間へとオーラロードが繋がったの

だ。

「やれ。青き鳥の勇者」

そう言つて、イギーは消え逝く身体の両腕を左右に伸ばす。十字の姿勢となつたのだ。すなわち、我が体をその剣で貫けとの意思表示であり、命を賭した戦いに、相応しき最後を与えてくれとの願いだった。

「御免！」

降魔スレイヤーもその意思を汲み、その片腕の剣を見事にイギーの胸中央部へと突き刺す。

青き鳥の勇者と、破壊の大神官の戦いはこうして終わりを迎えた。

「見事……ゴホッ！」

（見事な一撃よ。さくらば。青き勇者とフレンズたちの魂よ）

胸から剣を引き抜かれたイギー・カッグ。その魂魄は、早々とオーラロードへと回帰する道を選んだ。

もはや、思い残すことはない。

光の粒子と共に、その海中のような幻影を見せるオーラロードへと飛び込んでいく。

光と共に消えゆく魂魄。

イギーが残した情報通りなら、その魂魄は時の輪に再び捕らわれ、ループする何処か

の世界へと転生を果たすのだろうか。

「さらば。誇り高き戦士の魂よ」

（その時まで、一時の魂の安寧があらんことを）

（…終わったね）

（ああ）

（よくやってくれました）

（みんなのおかげだ）

（照れますが、その思い受け取っておきます）

（ああ。みんなでシユアしてくれ）

（そうしますよ。でも）

（残念だけど、もうすぐ私たちも時間だね……でも、どうしてこうなったのか、最後にまとめたんだねー）

（そうですね。最後に私たちが何を成し遂げ、何をできなかつたか。それをまとめましょう）

（僕たちは、サイド3数億の人命は救いました。でも）

（悔しいが、人の全ての原罪を背負うことは俺たちでも不可能だった。）

（イギーの情報が正しいのなら、サイド3の人々の心はズシーンと壊れてしまうよう

だ)

(哀しい事だけど、目を逸らさず真実に向き合い、それから新世界へと飛び立ちましよう)

(ああ。そうだな)

残された僅かな時間を使い、そう思念波でコミュする降魔スレイヤーとフレレンズの魂。

複数の魂が支えるその肉体も、今や消えかけ。

オーラロードの出現、時粒子の散布の影響を受けたジ・死道も、同様に位相空間共々消えようとしていた。

もはや、魂魄のみとなったフレレンズの魂魄も、イギー・カッグ同様にオーラロードへと回歸する以外、選択肢は存在しなかった。

(さらば。宇宙世紀。さらば。青春の日々。俺たちが必死に駆け抜けた世界よ。さらば)

そう位相空間の向こう側にあるサイド4空域へと思念波を飛ばし、降魔スレイヤー……いや、オオミチバシリの魂魄は、オーラロードへと向き合う。

しかし、僅かにコミュする時間が、降魔スレイヤーの肉体を依代とするものたちには残されていた。

彼等の魂魄は、自らの手向けとして、最後に思念波での交信を行うのだった。

最後の会話1

(まず、この時代でなにが起きていたのかです。助手、あなたが中心となり、みんなと協力してまとめるのです)

(了解です、博士。事の起こりは、宇宙世紀にも「一種の差別主義」である「中二病」という問題が存在していたことです)

(よりによってそれなんだねー。ぺっ!)

(まあ、中二病はどの時代にもいるよな)

(ええ)

(ぜんぜんわからん)

(もつとも、中二病自体は悪い事じゃない。自分を特別な存在と思いたい。それは誰でも思うことだ。本物の差別主義とは違うよ。問題は別にある)

(そうね。問題は特別な存在になりたいのにその努力を怠ること。中二病になっても、スポーツやアートに打ち込み競い合うか、オンリーワンの存在を目指せばいい。そのこと自体は前向きで良いことね)

(アイドルや声優、小説家を目指したっていい。もちろん、偉い学者さんや科学者、技

術者、政治家も)

(たとえ望む立場になれずとも、人はその過程で現実と折り合いをつけることを学ぶ。問題のある社会であつても、社会に向き合い希望を捨てずに未来へと向かつていく)

(ある者は愛する人を見付け、ある者は社会を豊かにしていくことに希望を見付ける。他者に迷惑をかけないなら、趣味に一生を捧げるもよし)

(それに、誰だつてすべてが望み通りになる訳じゃない。誰もが何かを我慢して切り捨て、その代わりに本当に必要とするものを手にするんだ)

(だが、人間は弱い。現実から目を逸らして本物の差別主義に陥つたり、正当な方法で望む存在になれないからと、不正に手を染める)

(そんな人間たちが少数、この宇宙世紀にもいた。そんな彼等の行為を、自分のストレスのはけ口とするために支持する人々も)

(少数といつても、100億の数パーセントで莫大な数だ)

(彼等は、旧世紀の真似をして、分離主義者のテロリストになってみたり、宇宙に強制的に移民させられた被害者を騙る詐欺師になってみたり、自分は特別な存在なのだから、地球に住みべき存在だと駄々をこねてみせたりする)

(親は宇宙開拓のために自らスペースノイドになった身で、自分自身も宇宙生まれのスペースノイドだというのにな)

（地球連邦の始祖である人たちが、未来の人たちが自力で権力を獲得すべきだったことも、連邦の初等科の歴史の教科書にバッチリ掲載されています）

（いざ、その舞台上上がった革命家を名乗る者たちは、自分をアピールしようと夢みたいなことを言って、過激なことばかりする。それと同じなんだねー）

（物事を一足飛びに果たそうとして、着実に努力を積み重ねている人々の存在を無視し過激派になる。結局は、その傲慢さのために社会に受け入れられない）

（だから為政者側の地球連邦の高官たちは、そんな連中を相手にすることに疲れ果て、切り離し、隔離する施設を作り出すことを望んだ）

（地球連邦から独立を志す宇宙国家の誕生。その一員になれば、誰もが少数派の特別な存在になれる。そんな人間心理を利用し、「地球の重力に魂を引かれた者たち」と揶揄される中二病を集め、閉じ込めるシステムを生み出すことにする）

（連邦の高官たちは、スペースノイド独立の思想を持つジオン・ズム・ダイクンに対し、そんなシステムの新共和国をサイド3に建国せよと、密かに打診した）

（ダイクンは当初、その打診を嫌がった。子供っぽく「特別な存在」になりたいと願う者達に、その器となる場所を上から投げ与えるのかと。権利とは上から与えられるものではなく、それぞれが自力で勝ち取るものではないのか。それが大人の生き方なのだ。そう言ってるね）

(でも、ダイクンはその考えを変えた。新共和国建国を肯定的に捉え、サイド3の民となった者たちを、正しい方向に導いていく救世主に、自分がなれば良いと考えたんだ)

(自分の思い通りにならない状況。その責任の所在を、自尊心を傷つけないために外側に求め、他者や社会に対し攻撃的になった人々を、自分が正しく導く)

(サイド3の人々の敵愾心のみを押しさえ込み、平和的な権利主張の運動と、地球連邦から独立できる国家建設の方向へと、サイド3の人々の闘争心を誘導する。そうすることで、ダイクンは地球圏の無駄な争いを抑制しようと考えた)

(その趣旨は、程なく実現するだろう)

(これが現在進行形で、我々が生きたこの時代で起きている大きな時代の変化です)

(博士、こんな感じで良いでしょうか?)

(グツジョブです、助手。では続いて、ガロウ・ランを率いたイギー・カツグは、何に注目し、何を目指し、なぜダイクンやザビ家の面々やサイド3の人々を人身御供にしようとしたのか。それをまとめます)

最後の会話2

(その一方、地球圏の各サイドでは反地球連邦のテロが頻発していました)

(ガロウ・ランを名乗る分離主義集団が、自分たちに都合の悪い人々を害し、怒りや悲しみの想念が地球圏に満ちるように画策していたのです)

(その動きに呼応して、他のテロリスト集団も動き出す始末でした)

(我々含む連邦軍情報省の調査の結果、ガロウ・ランの目的は、オカルト的方法でサイド3ならびに地球圏の人々の悪意を、器となるザビ家の人物に集め、地球圏を破滅に向かわせることだった)

(ザビ家のサスロ氏の通報を受け、その裏取りをした我々は、その狂った計画を止めようと、各サイドのガロウ・ランのアジトを強襲した)

(ですが奴等の抵抗は尋常なものではなく、多くの同僚たちが死んでいった)

(多数の犠牲を出しながらも、僕たちは敵の人型機動兵器の一機を排除し、その機体内部からサイコマテリアという未知の兵器を得た)

(そうして、敵同様にオカルト的な力を手に入れた私たちは、残る二体の巨大兵器を排除して、ついにガロウ・ランの指導者、イギー・カッグと対決する)

（正直、イギーは戦慄すべき強さでした。尋常の相手ではないばかりか、ニュータイプとして覚醒していて、破壊の大神官の力とニュータイプ能力を掛け合わせ、破壊神的な起動兵器ジ・死道を誕生させました）

（その結果、一人生き残り降魔スレイヤーへと覚醒したシオ隊員は、イギーと一騎打ちすることになりました）

（その合間に、私たちは知るんだねー）

（イギーの真の目的は、サイド3の人々すべての命と、地球圏の悪しき想念すべてを、イデオナイトとやらの卵であるサイコマテリアにすべて吸収させることでした）

（理屈はぜんぜんわからんけれど、サイコマテリアが多数の命と悪しき想念を吸収すれば、サイコマテリアはイデオナイトに練成されることだった）

（あいつは時を操る能力以外にも、異世界を幻視する能力も持っていて、その情報を基にして様々な異界テクノロジーを駆使できたんだ）

（そんなイギーの望みとは、自分の魂を輪廻の輪なるものから開放することだった）
（時の輪を永遠に再生させるケモフレーツという地を、完成したイデオナイトを撃ち込み破壊するつもりだったの。その無尽力で）

（真実を知った俺たちは、魂の尊厳と命を賭し、イギーの計画を阻止するため最後の決戦に挑んだ）

（激戦の末、ニュータイプ能力で時間を操るイギーに対抗し、私たちも時間を操作する能力を得て、これに勝利した）

（サイド3の人々の命と、地球圏の秩序はこうして守られました。以上です、博士）
（よくやりました、助手。最後に残された時間を、比較的有効に使えたようです）

博士の思念波の通り、本当に降魔スレイヤーの余命は幾許もなかった。降魔スレイヤーが消え逝く身体をオーラロードへと投げ出せば、彼等の魂魄の旅路は終わり、その魂魄はそれぞれが新しい新世界へと旅立つことになるだろう。

（でも）

（少し悲しいです）

（私たちを含む情報省特務隊はほぼ全滅。残るシオ隊員の余命もあと僅か）

（ふっ。それは仕方がない。この戦いに勝利し、多くの人々を救った代償だ。俺たちはその結果を受け止める以外、方法はない）

（ありがとーなんだねー。シオが生き残ってくれたから勝てたんだよー）

（ぜんぜんよくわかる）

（最後の希望になってくれて、ありがとうね）

(よせやい、照れるぜ。ただ一つ気になることは、イギーが言い残した未来のことだ) 降魔スレイヤーが、そう仲間たちに思念波を送る。

それだけが心残りだった。

(そうだねー。ダイクンは新共和国建設を成し遂げ、多くの民衆の更生も成功するが、道半ばで死亡しちゃうらしいんだ)

(ザビ家のサスロ氏も暗殺され、シンバ・ラルもダイクンの遺児を連れて亡命する)

(歯止めを失ったザビ家は、自分たちが地球圏の支配者になるために活動を開始)

(イギーから聞き出した情報によれば、ザビ家の下でジオン公国となったサイド3の多数の人々は、ギレンの優性人類生存説なる差別主義全開の思想によって洗脳され、差別主義者となっていくらしいです)

(洗脳に対抗できた者たちは、ギレンによって粛清され、差別主義者たちがサイド3の国家体制を牛耳るようになり、国家の武装化が進む)

(本当にダイクンの生前の功績は、ズシンズシーンと崩れ落ちてしまうのか)

(当初、平等の権利を寄越せと叫んでいた者達が、他者の権利を侵害して憚らない一番の差別主義者となる。笑えない現実ね)

(結局、ひとの心の闇が、人の心の光、温かさを冷たく覆い隠してしまうのね)

(哀しいことです)

（でも、僕たちの宇宙世紀での命は終わってしまいました。シオさんの命も後僅か。これ以後のことは、生きている人たちに任せるしかありません）

（人が原因である災禍は、結局は人自身が解決する以外ない。俺たち死人の出る幕ではない）

（助手やギーンの言う通りです。イギーが言っていたアムロやシャアといったニュータイプの人が、未来の人々を良き方向へと導くことを願いましょう）

（そうですね。残された僅かな時間、最後にそう祈ります）

（そうするんだねー）

「ああ……カパルアさん、博士、助手、ギーン、アムール、マーゲイ。今までありがとう。そう言えるのも、本当にこれが最後だ。来世でまた再開できるなら、また一緒に生きていこう」

そして、最後の瞬間が訪れる。降魔スレイヤーの余命はもう一分もない。

（当然なんだねー。一緒に紅茶でも飲んでまったりしようねー）

（もちろんです。賢い私たちが、また助言をします）

（美味しいものも、一緒に食べましょう）

（ああ。付き合うよ）

（そうする以外、ぜんぜんわからん）

（その時は、私もチームに入れてください。今度は自分で踊りますよ）

「それは楽しみだ。では、また会おう。その時まで……さらば！」

そう言っ、青い鳥の勇者はオーラロードへと飛び込んだ。新世界へと旅立つために。

オーラロードへと飛び込んだブルーゲイル纏う勇者の身体は、光の粒子と共にそのオーラの奔流へと飲み込まれ、消えていった。

そして、その魂魄は最後の最後に（ありがとう）と思念波を何者かへと飛ばし、来世へと向かっていくのだった。

完

エピローグ1

「私^{わたくし}、ジオン・ズム・ダイクンは、今日のこの日、サイド3にジオン共和国建国を宣言する！」

その日、サイド3でジオン・ズム・ダイクンによるジオン共和国建国宣言がなされ、続いて新憲法が次々と発布されていった。

この日のために建設されたサイド3新議事堂から次々と地球圏全体へと放映されたその光景に、建国に関わったスペースノイドたちは歓喜の表情を浮かべていた。

ヨーロッパ風にデザインされていた、サイド3の各コロニー内部では、尖塔の鐘が激しく打ち鳴らされ、その鐘の音が響く道々では、住人たちが歓喜のダンスを踊り、歌い明かしていた。

この日ばかりはと、琥珀色の液体の満ちた様々なデザインの容器を乾杯で打ち鳴らし、浴びるように酒を煽る。

自分たちがこれから人類の新しい歴史を紡いでいく。

今日のこの日はその始まりなのだ。

そんな狂瀾の宴は、サイド3各地で続く。

その一方、地球及び各サイドの者たちは複雑な表情を浮かべていた。

なぜなら、ジオン・ズム・ダイクンたちの動きに理解を示す一方で、一連の建国関連の動きの裏に、地球連邦側の意志が透けて見えていたからだ。

すなわち、一部のスペースノイドの分離、独立運動を利用し、各コロニーの厄介者たちをサイド3へと押し付け、様々な宇宙生活の困難さを自力で解決させる気ではないかということである。

その内実を窺い知るには、まずは宇宙生活の困難さと、ここまでの半世紀以上の間、なぜ人類が地球圏の構築をやり続けられたかをまとめて説明しなければなるまい。

そもそも宇宙生活の困難さとは、旧世紀の砂漠化した紛争地帯などとは比べものにならないほど困難なものだ。

何しろ重力均衡点ラグランジュポイントである以外、各サイドがそこに建設される理由は無い。

人類がそこに、人口の大地であるコロニー群を建設しなければまったくの無だった場所なのである。

水路を引き種を蒔けば回復する天然の大地。

ある程度面倒を見てやれば繁殖する草木。

そういった、ある意味、神の如き加護もまったく無いのである。

その厳しい環境のために、人類はすべてを自力で揃え、育まなければならなかった。

天文学的な金額と労力を費やし、まず地球上で選ばれた者たちに宇宙生活に必要なスキルを複数取得させ、次に1Gから離れた生活に慣れさせ、続いて人工の生存可能環境を生み出す仕事に従事させた。その上で、そこに新たな人類の生存圏を拡げさせ、築かせていったのである。

そんな五重、六重の艱難辛苦を乗り越え、その事業に従事した人々は、それ等の重要な仕事をやり遂げた。

そして、各サイドの建設が完了した後もやり遂げ続けている。

そんな悪環境の中、人々がそこで半世紀以上も生き延びられてきた理由が何かといえば、ひとえに人類の統一共同体である地球連邦政府による庇護があったからだ。

地球連邦がその強権を発動し、勝手な人々の意見を封殺し、人類全体に宇宙進出のための大事業を実行させたからなのである。

もちろん、そんな悪環境の下にいた人々は、悠長に政治に関わっている暇はなかった。いわゆる宇宙移民の第一陣、第二陣、第三陣といった初期世代の技術者、職人、その

他諸々の職種の方々は、地球圏の構築という大事業に掛かりきりになり、政治的なことはほとんど地球連邦政府に任せきりになった。

当然の結果として、地球圏構築という共に偉大な事業を果たした彼等とその子供たちは、その成功体験から地球連邦政府による一連の政策の熱心な支持層となり、スペースノイドに半世紀が過ぎても選挙権が与えられないことも是として許容した。

大義のためならば、ただ生きていられるだけの雑多な人々の意見封殺も必要と割り切ったのだ。

故に、宇宙で忙しく働き続ける人々は、政治の分業という構造も当たり前と捉えて地球連邦政府に反抗することなど考えなかった。まず宇宙に住む人々が住み続けられる環境を整備することが自分たちの責務であると捉えていたからである。

それは、当時の技術者たちが互いに言い合っていた理論に集約されていた。

「俺たちは宇宙空間と戦争をしている兵士だ。宇宙に人類が生存できる大地を作り出す役目を帯びた尖兵なのだ」

「上官である連邦政府政府は今の所は有能だ。無理に上官を変更する必要はない。そんなことは返って最前線で戦う俺たちに混乱を齎す。兵士は悠長に選挙など行っていないで、戦闘に従事するのが一番さ」

「コロニーの壁一枚隔てた先は、人間が生存できない真空の宇宙だ。まずはコロニー

建設と内部環境の維持だ。それらが可能になったと言えるようになってから、はじめて次の段階に進める。スペーススノイドの権利やら自立とかは優先順位は低い。何事も一足飛びには果たされんのだ」

これらの意見集約があつたことが、基本的な第一世代の考えであり、人類が苛酷な環境下で宇宙進出を可能とした理由であつた。

しかし、それ以後の宇宙移民は違うのである。

宇宙世紀にも、世代間の意識の差は当然発生した。

宇宙世紀黎明期にインフラが整備された後、宇宙に上がった一部の恵まれた人々は、各コロニーが整備されていることが当たり前と捉え、いまだに各サイドのインフラ整備が行き届いてない状況下であるにも関わらず、政治活動を開始した。

宇宙に上がった者の大多数は、すぐに宇宙の苛酷な環境を理解し、コロニーの空気を読んでおとなしくなり、インフラが地球圏に整っていない政治的な主張などナンセンス、今は愚かなことだと気付き、ベターと思う行動を取り始める。

しかし、極一部はその空気を読まなかつた。

ついに「我々は強制移民させられた。地球連邦政府は我々の生活を保障し、謝罪と

賠償として一定の金額を恒常的に支給しろ！」と言いつ連中も出る始末。

当然、彼等は前の世代の者達や、その思いに同調した者たちに「スペースノイドの生き方に、世代間の意識の違いと差別主義的なブルジョアジーを持ち込んだ連中」「差別されたと叫ぶ差別主義者」「自分は一般市民でしかないのに、特別なんだ、特別扱いされなければいけないと定義する輩」と揶揄され、蛇蝎の如く嫌われた。

また、各学会の学者たちには「この状況は、ある意味、宇宙世紀になろうとも決して悪は絶えないし、誤解や、それぞれの立場、意識の違いによる争いも、手を替え品を替え続くとこのことの証左と言える」とまで言わしめた。

そのために、これは座視できないと、ついに地球連邦の高官たちも動き出す。

その議論は地球連邦政府内で紛糾し、ある方向へと傾いていた。

すなわち、「できるものなら、お前たち分離主義者たちだけで宇宙生活のすべてを賄ってみせろ」という方向へだ。

その決定に従い、連邦各省庁の高官たちは、陰日向からジオン・ズム・ダイクンの新共和国建国の動きに協力しだした。

当初、その意味を多くの一般宇宙移民たちは理解できなかつた。

しかし、時を経て次第に「これは意趣返しなのだ」と理解しだした。

地球連邦政府は、その施策に従い実施された地球圏のインフラ整備事業へとタダ乗り

した連中をサイド3へと押し込め、用意した隔離施設に閉じ込める手段に打って出たのではないかと。

今までタダ乗りしてきた連中に、地球圏のインフラ整備を一から自分たちの手ですべてやらせる。

そう決定したのだと。

後の世……すなわち、本格的に宇宙国家が地球連邦から独立する未来のため、サイド3をそのモデルケースにしてしまおうとしているのだと。

「はたして彼等にやりきれるでしょうか？ 独立を主張するならば、当然、サイド3は経済制裁を受け、経済の悪化だけではなく、アステロイドベルトからの資源の切り出し、木星圏からのヘリウム3の輸送。そういった諸々をすべて自分たちで獲得するか、交渉で買い取らなければならなくなる。それが地球連邦から離れるということですから」

「でしようね。それでも今はジオン・ズム・ダイクンやその取り巻きである政治家たちに、地球圏の未来を委ねてみましょう。たとえば、彼等が五重、六重どころではなく、十、二十の重荷を背負うことになろうとも」

「すべては、ダイクンがサイド3の人々を良き方向へと導けるかどうか………という訳ですか」

「そうです。サイド3をゴミたちを閉じ込めておく、ゴミ捨て場のままにするか、平和的に独立運動を展開し、連邦から真の独立を勝ち取れる。そんな立派な人々へと育てられるか。それ次第なのです」

「それが連邦の始祖たちの願い。しかし、いささかスパルタが過ぎる気がします。あの種、気が狂っているといえますな。ダイクン含め、全員が過労死しても可笑しくはない」

「連邦の始祖たちは元々、極と枕言葉がつくほどの改革派です。立派に成長できず、人類が外宇宙へと飛び出すのに遜色のない社会を生み出せないのならば、地球連邦は最終戦争でも勃発させて潔く滅べ。その屍を踏み台にして、人々は新たな社会構造を生み出していく。人類が健在ならば代用品は生まれる。彼等は当初からそんな思いなのでしよう」

「恐ろしい話ですな。たとえ地球という揺り籠から宇宙空間へと飛び出せても、所詮、人間が永続する国家制度など構築できる訳もない。ならば、未来の人々がより良き世界を生み出すための人身御供になれと。だが、不思議と嫌な気分はしない考えです」

「ふふ、そこまで最初から突き抜けていられては、正直、私たちもそうですかねとしか言えませんかからね。地球連邦の官僚でしかなかった私としては、連邦の始祖の方々が残した計画に従うだけです」

そのように会話していたのは、地球連邦の高官であったミウラー・ガイドナーと、連邦軍情報省トップのエルラン少佐であった。

ジョン・ズム・ダイクンの建国宣言前に退任したガイドナー、多大な犠牲を出すもガロウ・ランというテロリスト集団討伐を終え、任を解かれ休暇中のエルラン。

比較的自由な立場となった二人は、こうしてサイド3への旅行を兼ねてダイクンの建国宣言の瞬間に立ち会っていた。

人混みを避けるべく、二人は野外テレビの実況中継が視聴できる並木道を抜け、人気の少ない街路樹の並木道方向へと向かっていく。

「新しい時代の風が吹いた。そろそろ私も身の振り方を考えなければなりません」

道すがらそう言って、エルランはミウラーの反応を待った。連邦の高官たちのお遊びである腹の探り合い。その延長としてである。

「もう隠す必要もないので言いますが、私は宇宙引越し公社と関連している資源獲得公団に潜り込むつもりです。根回しはもう終了しています」

街路樹の日陰にあるベンチを指差し、ミウラーが微笑んで言う。二人はそこにゆつくりと歩み寄ると、並んで腰かけて遠目にダイクン主演の一大イベントに見入った。

そうしながら再び話の続きを始める。

「それは初耳ですな。地球圏を離れるおつもりですか」

「アステロイドパーク計画関連です」

「あの計画ですか。何にしろこれからの時代はそうした方が無難かもしれません。これからは、地球圏も一枚岩という訳ではないですからな」

「まあそれもありますが、昔から動物相手の仕事に従事したかったという理由もあります。人間相手は、とにかく疲れますからね」

「ははっ！ それは同感ですな。もの言わぬ動物ならば、訳もなく他者を裏切る理由もないー」

「ふふっ、そうですね。それで、Mr. エルランはこれからどうするおつもりなのです？」

「……………正直、これといった計画はありません。ダイクン氏がこのまま新共和国導き続ければよし。もしそうならないのならば……………」

「……………ふふっ、聞かなかったことにしますわ」

「……………ありがとう。これでお互い、今生では最後となりそうですな」

そう答えると、エルランは立ち上がり、右手をミウラーに差し出した。

「……………ええ」

その手を取って最後の握手を交わすミウラー。重なる掌と指の力が次第に弱まると、エルランはすつと手を引き、無言で踵を返して、中継に見入る人混みの中へと消えて

いった。

「……………さあ、私は地球圏から旅立つことにしましょう」

エルランが去ること数分の後、ミウラーはベンチから立ち上がる。

「あら、鳥の羽?」

するとそこに、慶事だと空に放たれた色とりどりの羽毛を持つ鳥の羽の一枚が抜け落ち、舞い降りてきた。

それを手に取ったミウラーは、その羽を楽し気に自らの帽子の飾りにする。

「この羽のに、私のこれからの人生も、美しいものになるとよいのだけど」
そう一人呟くと、ミウラーもサイド3を離れるべく歩き出すのだった。

エピローグ2

ジオン共和国建国宣言は終了したが、その後もサイド3の政治指導者達は忙しく動き回っていた。

宣言直後よりも、むしろ宣言後の諸々こそが大変であった。

議事堂前に押し寄せて帰らない大衆への対応、マスメディアを含む各種メディアへの説明、宇宙引越越し公社含む公的機関、民間問わず、地球圏中の各産業機構との打ち合わせの数々、サイド3側へ帰化した元連邦軍人たちとの話し合い等々。

やらなければならぬ事は尽きることがなかった。

ダイクン含むジオン共和国の政治的主導者勢に、まともに安らげる時間などほとんど残されてはおらず、それは、書類の不備が重なり、一時要望が途切れるまで続いた。

「ふう。小休止させてもらおう」

「はっ！ 要望書の処理はしばらくこちらで止めておきます。僅かではありますがお休みくださいー！」

「頼む」

腹心の部下たちにそう言い残し、ダイクンは敬礼する警備の者たちに手を振りなが

ら、議事堂のもつとも奥まった場所にある首相クラス用プライベートルームへと向かった。

そこで仮眠を取る気でいたのだ。

その道中、ダイクンの移動を妨げる者は存在せず、通路に靴音のみが。響く。

「ふう…」

プライベートルームへと到着し、ガチャツとベーシックなレバーノブを引いて扉を開けて内部へと進入するダイクン。すると……

「閣下、閣下もこちらに？」

「む。サスロ君か」

ダイクンが発した通り、一足早くプライベートルームを休憩所に使っていた人物がそこにいた。サスロ・ザビであった。

彼は、民衆たちとのディスカッションを終え、疲れた体を癒すためにこの場に来ていたのである。

ダイクンやサスロといった人物が静かに休憩できる場所が他になかったために、二人はここでバッテリーングしてしまったのだ。

「はい。先程民衆代表たちとの話し合いを終え、一足先にこちらで小休止をしようと思ひまして」

「御苦労だったな、君も」

「それが役目ですから……と、すいません。お疲れでしょう。お休みください」
「すまない」

そう言つて部屋のソファアールへと向かうダイクン。

一方、サスロは一礼すると、ダイクンとは入れ違いにプライベートルームから出て行くとした。

「待ちたまえ、サスロ君」

「は。何でありましょう、閣下」

「どうだったかな？ 私の道化姿は？ 君の基準では合格点だったかな？」

そうサスロに尋ねるダイクンの言葉には、若干の照れが含まれていた。いくらスペー
スノイドの自立のためとはいえ、これまで演劇染みた行為を続けてきた。

ダイクンはそんな自分を嘲笑し、政治的に同士であり同罪であるサスロに、今の自分
はどう見えるか？と問うたのである。

その言葉を聞き、サスロは身を正して振り返った。

「道化などと……照れを感じて御自分を卑下なさる必要は御座いません。私は閣下
が御立派だったと感じました。今日、修羅道、餓鬼道に陥っていたスペースノイドたち
に、閣下は正道に立ち戻る切っ掛けを与えました。ジオン・ズム・ダイクン以外の誰が、

人間道に立ち戻る切っ掛けを、スペースノイドたちに与えられたでしょう！」

そうキツパリと言い放ち、真直ぐにダイクンの双眸を見詰めるサスロ。

その双眸の瞳には嘘偽りの輝きはない。

そのことを理解し、ダイクンはフウツと息を吐く。

「サスロ君、君がそう言ってくれると、私も若干だが肩の荷が下りた気がするよ。少しだけだが、良い気分では寝が取れそう。ありがとう！」

「それは何よりです。では私はこれで」

柔和な表情になったダイクンにサスロは敬意を表すと、一人プライベートルームから退出していく。

残されたダイクンは早速、少しだけ精神的に楽になった身体をソファへと沈ませ、一人、仮眠へと入っていった。

その様子も確かめることもなく、サスロは新政府の主要閣僚たちが待つ議事堂中央部へと向かっていった。

（閣下は、あのミーティングでの話を覚えていてくれたか。ならば、あの約束通りに私も人々のために行動しよう）

口に出さずにそう決意したサスロは、本心からダイクンを支え、ジオン共和国を支えていくことを誓った。

そんな彼が思い起こすのは、かつてダイクンとの行動理念共有のために話し合った内容である。

ダイクン、その腹心たちと、ザビ家にあつてもつとも民主政治家的才能を持っていたサスロを含んだミーティングでのことである。

それは、基本的な政治論から始まり、各種宗教のことまで及んだ。

地球連邦成立から宇宙世紀への移行を経て約一世紀が経過し、地球から宇宙へと飛び出した人々も墮落し始めていた。

墮落するのは何も、官僚や軍人といった政府関係者だけではない。理念を失い我が身を正すことを忘れれば、民間人も同様に腐敗するのだ。

たとえば、地球の一部地域の独立を希求する分離主義者たちは、地元の存在する地球でのテロ行為は自粛し、連邦直轄である宇宙でのテロ行為を推進した。その行為に、一部のスペースノイドも利益目的で協力し始める。

言うなれば、そういったスペースノイドたちは仏教でいうところの修羅道に墮ちたのだ。

また、労働に勤しむことなく他人に寄生して楽に生きたいスペースノイドたちは、働きたくないでござると連邦政府に対し、自分は強制的に移民させられた被害者である。謝罪と賠償を求めるなどの唾棄すべき行為を行い、餓鬼道へと墮ちた。

こうして、地球連邦樹立以前の旧世紀同様、人類は再び墮落し始めたのである。

過去、地球連邦の始祖に相当する人々が、旧世界の各国政府を打倒し、全人類を人間道へと引き戻したにも関わらずにである。

過去、ダイクンはサスロたちに語った。

「連邦の成立以前、人類は修羅道、餓鬼道、畜生道に陥っていた。そして、もう一步のところで疲弊した地球環境の中で生き続ける地獄道に堕ちるところだった。仏教的に言えばな」

「地球を席捲していた白人優越主義、共産主義、独裁主義は酷いものだった。たとえば白人優越主義。白人以外は人と見做されず、有色人種のカラーズは畜生として扱われた。また、共産主義、独裁主義も同様だった。思想を同じくしないと見做された人々は人間扱いされずに、家畜を屠殺するように殺された。その一方、戦乱で地球環境は二の次とされて破壊されていき、地獄の様相を呈していた」

「一方、各国政府に従っていた人々にも、何とかしてこの状況を打破しようとしていた人々は少なからず存在したが、各国の政府に、将来、政権を崩壊に導くのではと危険視され次々と潰されていった」

「そして、結局、上から物を与える者たちに素直に従う無気力な者のみが良民とされていった。この状況は、仏教のいうところの末法の世だよ」

「だからこそ連邦の始祖となった人々は、限定的な核戦争となろうとも、一気に各国政府を打倒する道を選択した。争い合う各国政府を排除し、すべての人々の意志を宇宙開発へと向けさせる方向性を示し、そんな酷い状況から脱出させた。そう。なにも地球の環境破壊防止のためだけに地球連邦を生み出した訳じゃない。人間を人間の道へと立ち戻させる必要があつたのだ」

「そして地球連邦が成立して一世紀が経過しようとする昨今、地球圏というフロンティアを得た人々にも、そんな墮落の兆候が見て取れるようになってきた。スペースノイドたちも、修羅道、餓鬼道、畜生道、そして地獄道へと再び向かい出したのだ」

「だからこそ、今、サイド3を中心とした平和的な独立運動を地球圏で展開しなければならぬのだ。人々の墮落した意識を地球連邦からの独立運動に向けさせ、その過程で浄化させる。そうすることで人々の前に天界道が開かれる。言い方を変えれば、争い合う地獄道を事前に回避する感覚を得た存在、ニュータイプへの道だよ」

そう語って、ダイクンは腹心たちを見回し、最後にサスロを見詰めたのだった。

「よくわかる話です。私も、閣下の思いを遂げるため、一命を捧げましょう。そうして初めて、人は地球の重力を振り切り天界道へと到るのでしようから」

「頼む」

返答したサスロに、ダイクンは右手を伸ばし握手を求めた。

サスロは、そのダイクンの右腕を力強く握り返したのだった。

稀代の大政治家ジオン・ズム・ダイクンと、後にその腹心にして政治的後継者となる（はずだった）サスロ・ザビの、その人生を賭した約束であった。

（あの約束は、このサスロが生きていくかぎり果たされることでしょう）

（先のガロウ・ランとの戦いで命を落としていったサイド3の志士たち、地球連邦の特務隊員諸君、君たちの犠牲で現在が、ジオン共和国の建国がある。そうすることで、君たちの働きに報いさせてもらおう）

そう決意を新たにし、サスロはサイド3議事堂中央部に姿を現すのだった。

その眼前には、人が修羅でもなく、餓鬼でもなく、もちろん畜生としても生きる必要のない道が広がっていた。

サスロ・ザビは、その命がある限りその道を進んでいくことだろう。

この後、どのような経緯を経てサイド3が地球圏を覆う災禍の中心になるのか。如何にして地球圏が一年戦争へと突入していくか。

それは各々の知る所である。

だが、それはまた別の、別の物語で語られる話であろう。

ジオン共和国の正体く地球の重力に魂を引かれた精神病患者たちの隔離施設く 完